
サファイア

ルーディー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サファイア

【Nコード】

N6145N

【作者名】

ルーディー

【あらすじ】

呪われた宿命を背負ったチート能力少年とその宿命に引きずられた4人の人々の姿を描いたファンタジー作品です。
不定期更新です。

序章 〱目覚め・何時の日常〱（前書き）

この作品はフィクションです。

登場する人物、団体、国家等は現実社会と一切関係ありません。

序章 〱目覚め・何時の日常〱

寝ぼけたまま彼はその見えない黒い瞳の右目を擦っていた。
そう黒いはずの右目を……。

しかしその眼は蒼かった！

一瞬ではあったが蒼かったのだ……。

「そろそろ起きないと……。」

寝ぼけたまま彼は布団の中にいた。

低血圧のせいで起きてから1時間以上布団に包まり続けるのが彼の
一日のスタートだ。

3

まだまだこのままで居たいのを我慢してゆっくりと起き出し右目を
擦る。

しかしその瞬間……。

「またやった！」

彼は一気に目を覚ました。

すぐに左手を右耳の辺りから眉間に向かって滑らせる。

それと同時に蒼かった右の瞳は元の黒い瞳に戻っていた。

そう元の黒い瞳に……。

彼、フロルド・Y・F・ランフォードは生れ付き右目だけが蒼かった、しかし今は両目とも黒い。
天涯孤独と言う生い立ち以外は目立たない極普通の高校生として生きていた。

「ばれて無いよな？」

そう呟きながら登校の準備を進めていった。

学生寮からの徒歩による登校途中、何時もの様に一人で歩いていると、背後から彼に声が掛った。

「おはよう！」

フロルド君。」

その声にはフロルドは振り返りながら、

「ん？」

おはよ、エリシア。」

クラスメイトのエリシア・ノーラを見てぶっきら棒に挨拶を返しながら歩き出す。

エリシアはクラスメイトに対して普段から距離を取っているフロルドにも極普通に接する数少ない人間だ。

「もう待ってよ。」

そう言いながら追いかけて来たエリシアは小走りで追い付き、笑顔でフロルドの隣に並びながら歩き出す。

しかしフロルドの方は内心彼女が自分に関わる事に対して毛嫌いしていた。

彼女はクラス、学年、学園の枠を超えてファンクラブまで在る美少女だ。

当然フロルドはそんな彼女が何故、自分に付き纏うのか察していたが、彼にとってはエリシアの好意は迷惑以外の何物でも無かった。

しかしそれを、態々口にするほど彼は非情でも無く現在は放置状態、先送りと申す方が・・・。

で必要最小限の関係を継続中だった。

「ねえ気づいてる？」

何時もの口癖出てたよ。」

そんな内心に気づく事無くエリシアは話し掛けてくる。

そんな、エリシアの会話には一切答えずに無言で返しフロルドはひたすらに歩き続けていた。

教室に着くまでそんな一方通行の会話が続いていた。

補足だが、エリシアは一方通行な会話は何時もの事なので特には気にしておらず当然周りのフロルドに対しての視線にも気付いていな

かったりする。

他人の視線はフロルドでは無く自分に向けられていると思い込んでいるのかも知れない。

こういつた嫉妬交じりの視線には昔から曝されているのだから。

教室に着くとエリシアと仲の良い生徒がエリシアを冷やかに来たがフロルドは他人事と一切割り切って無言のまま自分の席に腰を落とした。

少ししてクラスメイトのハース・タクティスが話しかけて来た。

ハースもまたフロルドの事を構う一人で本人にとってはフロルドは手の掛る弟でぶつきら棒で愛想がないのもむしろ好感が持てる部分なのかも知れない。

「よっ！」

相変わらずだな。

それより、今日の実技は出来そうか？」

「さあ、な。」

フロルドが素っ気無く返すのとホームルームの鐘が鳴るのはほぼ同時だった。

序章 〈目覚め・何時の日常〉（後書き）

この作品はもともと別携帯小説サイトに投稿していた物ですが、作者のミスにより更新不可になってしまった為、加筆修正を加えて当サイトに再投稿した物です。

別サイトの進行に追い付きましたら、再度連絡したいと思います。さて、作品についてですが、この作品は、作者の妄想全開で書いている物なので肌の合わない人はご容赦ください。

また、ご意見等ありましたら遠慮なく投稿していただけると幸いです。ではまた。

第2章 学園生活・崩れゆく日常

「今日は先日からの連絡通り、学科ごとの実技試験だ。
実施場所は何時も通りだから遅れるなよ。
では、皆頑張る様に。」

担任のカイト・ビスコンティの簡潔だがやる気を感じられない口調とセリフと共に教室を移動し始める生徒たち。
エリシア、ハースもやる気なさ気なフロルドを引っ張って移動し始める。

三人は同じ学科で三人一組のチームでもある（この学園では実技、専攻課程以外の授業は人数分け以外の意味はない、つまり、普通科、商業科、工業科等といった科でのクラス分けにはなっておらず、大学の授業に似ていると言う事だ。）。

「お前な〜試験ぐらいやる気出せよ。
留年するぞ！」

と言うハースのセリフに、

「どうでもイイだろ？」

と心底そんな事は知りませんと言いたげに返したフロルドに対してエリシアは、

「絶対ダメ〜！」

三人一緒に進級するの！」

と泣きそうな顔で必死に訴えかけて来たが、フロルドはまるで気にした素振りも見せず素知らぬ顔で沈黙を返した。

そうしている間に試験会場に到着し、各クラス身長順に整列し待機してから暫くして試験管の説明が始まった。

説明は簡単な諸注意と試験場についてなど極有り触れた、何度も聞いて慣れてしまった内容だった。

「では、これより武芸科、士官科、情報処理科、魔法科に別れそれぞれ試験を始める。

それぞれの科の担当官の元で細かな説明は受ける様に！

では解散！」

『魔法科』このセリフからも分かる様に、『リストア』と呼ばれるこの世界には魔法が存在する。

試験管の解散の号令と共に

「ハア〜イ。

魔法科の～みんなは～Dブロックに～つ～いつてき～つてね～。」

と聞いているだけで眠気を誘う声音でフロルド達の担当官であるメイリン・イシュメアの声がした。

それに従い三人は移動を開始していた。

実際は、メイリンに案内されるまでも無く試験会場は指定済みなので着いて行く必要はないが・・・。

会場に着くとそのノンビリとした話し方に似合わずメイリンは早速試験内容を説明し始めるが。

「じゃあ～今回は～チーム毎の～トーナメントで～1つ番～最後まで～残った～チームに～100点満点～あっげます！」

といかにも適当な試験内容を開口一番宣言する。

この試験内容は言うまでも無いがとにかくチーム力の高いチームに有利で、仮に足を引っ張る人間がいても一人程度なら切り捨てればまず、負けない、総合力が団子状態ならこの限りではないのだから。しかし、そんな甘い幻想は試験内容を指定した本人により打ち消される。

「タダ～。」

チームで～1つ番～弱い人が～リーダーで～、当然～リーダーの～戦闘不能は～チームの～敗北です～！」

とその瞬間ハース、エリシアは絶句し他のチームはフロルドを見た。

理由はフロルドが学年トップ2の成績を誇るハース、エリシアに対して、実に学年最下位（全科共通で）と言う実に不名誉な成績を誇っていたからだ。

そんな彼が進級できていたのは、ハース達の日々のサポートのお陰だったのは言うまでも無い。

そんな中、メイリンは試験とは全く関係ないが実にとんでも無い爆弾を自身の生徒たちに投下した。

「甘く見てるとく痛い痛い、言っちゃうからね。」

もうすぐく戦争がく始まっちゃうからね。」

と極上の笑顔で実に爽やかに告げて見せた。

この台詞にはメイリンの台詞が聞こえていた、全ての生徒が絶句した。

二人の例外を除いて、もちろんその例外も表面上は驚いて見せていたが。

しばしの沈黙の後、一人の生徒が笑い出す。

「面白れーじゃんか。」

「やっと実戦に、実物の手加減ナシの魔法を使えるんだろー？」

それに一気に学生達の士気が上がる、無理もない、彼らは血気盛んな十代後半、まして世間一般に見れば魔法科の生徒はエリートに当

たり社会的地位がある程度すでに確約されている。

その為、自分達は特別だと生れ付いての強者なのだと思覚しても責められない、実際魔法科の生徒は他の科の生徒からは畏怖と尊敬と嫉妬を持った視線を向けられているのだから。

フロルド、ハースを始めとした一部の者達は冷めた目で視ていた訳だが……。

その様子に知ってか知らずかメイリンが。

「ハイハイ、そろそろ試験始めるよ。」

1番と最後の25番のチームは直ぐに準備してね。」

二試合目は2番と24番のチームね。」

後は判ると思うから自分達で準備してね。」

と告げて試験官としての採点の準備に取り掛かった。

フロルド達は12番トーナメント形式の今回の実技試験まではまだまだ時間があった。

その為、三人はドームになっている会場の二回観客席に移動した、勿論、只、目的も無く移動したのでは無い。

自分達の対戦相手に如何にして相対するか作戦を練る為の移動で、到着早々三人は作戦を練り始めた。

しかし現実には三人と言いながらもフロルドは必死な二人を完全に無視して聞いてもいなかったため、エリシア、ハースの二人での作戦会議と言う事になっているのは、当人たちにもありありと感じられていた。

「どうしよう。」

私たちの相手、ソラ達だよ？」

そう不安げに意見を述べたのはエリシアで、その意見は当然の意見だった。

ソラと呼ばれた少女は、ハースに続く学年三位の実力者で個別に成績を觀ればエリシア達を上回る成績を誇る学科も少なくない。

さらに、彼女のチームメイトは現在の魔法科同学年75人中、4位と10位と言う成績優秀者で、構成された実質今回の試験優勝候補No.1のチームだった。

「フロルドには今回は逃げ回って貰うしか無いと思う。

勿論、使って貰う魔法は防御魔法のみに集中してもらって俺たちが敵を引き着ける。

かなり分は悪いけどな。」

躊躇わずにそう意見を述べたハースに対して、エリシアはかなり嫌そうな顔で眉を潜めたが反面、それが最も効果的な対処法だとは、理解していた。

話に全く加わる気の無かったフロルドを除けば、であるが。

一方話を無視していたフロルドは自身の対応に思案していた。その最中に突然、

さあ〜フロルド君〜貴方の〜本当の〜実力を〜教えてね〜。

そう頭に直接語り掛けてきた声で思考を停止する。

魔法による通信
念話だ。

通信相手は担当官のメイリンだ、その問い掛けにフロルドは、

何の事だ？

そう問い返した。

心底何の事なのか解らないと言ったフロルドの返答にも変わらぬ口調でメイリンは、

勿論、フロルド君の魔法力だよ！

他の子は、全つ然、気付いて、無い、みたいだけど。

時々、もつのスツゴ、イ魔力を、放つてるでしょ。

気の所為だろう？

オレは全科の中で最強の魔法科に居る事すら不自然な問題児だぞ？

そうフロルドはメイリンに言葉を返した。

しかしフロルドの台詞とは裏腹にメイリンの指摘は当たっていた。と同時に間違ってもいたが、二人の遣り取りを現実が終わらせる。

終わらせたのはエリシアの一言。

「次、私達だよ！

フロルド君は兎に角逃げ続けてね！

私達を守るから。」

この試験の始まりの到来を示唆する一言だった。

そのセリフにフロルドを視ながらハースが頷いていた。

そんな二人を観察ながらもフロルドは無言だった。

一方ソラは三人が降りて来るのを1階で待っていた。

ソラは同年代の女子たちの間では唯一自分より成績の優れたエリシアをライバル視していた。

しかしエリシアにはまるでその気が無い様でエリシアが気にして要るのは何故か落ち零れの代表とも言えるフロルドだけだった。

何故落ち零れのフロルドに好意を抱いているのか気には為るが反面自覚は無い物の自分も又フロルドに興味を抱いて要る事は疑い様が無かった。

その事は今回の試験がソラにとって圧倒的に有利なこの状況では尚更意識しがたい事だがソラはその感情をエリシアの一番大切に思っている相手を自身の力で蹂躪できる為だと歓喜にも似た誤解をしていた。

その為エリシア達三人が試験場に降りて来たのを見て

「遅いわよ！」

逃げたかと思った。」

そう嬉々として告げていた。

対してエリシアは

「逃げたら落第じゃ無い！」

そう強がって返していた。

そんな強がりを知ってか知らずか間もなく無情にもメイリンの試験開始の合図が降った。

合図と同時にお互いDクラスの魔法を詠唱破棄で撃ち合っていた。

それが今回の模擬戦最注目カードの開始だった。

「フレイム」エリシア

「ウォータ」ソラ

「エア」ハース

「ライトニング」ジン（ソラチーム、学年4位）

「ダーク」ノバア（ソラチーム、学年10位）

「・・・」フロルド

ただ一人が沈黙を守った事を除けばである。

そのままノバアのダークがフロルドに直撃し粉塵が周囲の視界を奪う。

その光景に誰もがフロルドが試験を放棄したのだと思い試験の終了を確信し期待を裏切られた形の他生徒キャラクターから失望と同情の混ざった声が漏れ聞こえてきた。

暫くして粉塵が治まる事になるその瞬間までは。

そこには人が居たフロルドでは無い胸元に虹色の十字架を掲げた人物が。

「カイル、首尾は？」

カイルと呼ばれた人物は肩膝を付きながらフロルドの質問に答える。

「現在、カトレア、クロス両国に対して総帥陛下の御指示通り休戦及び介入勧告を実施し、その解答待ちの状態です。」

そう告げた虹十字の人物は虹の派閥と呼ばれる魔法師組織のメンバーであった。

「……………」

その光景に静寂が流れる。

フロルドは黙考し、周囲は混乱から沈黙しているからだが当然でもあった。

暫くの後フロルドが口を開く。

「そう、たぶん無駄だろうがな……………」

「何故です？」

派閥の意向を無視すると？

四皇様の意向ですよ！」カイル

静寂の中二人は続ける。

「両国の兵力は虹の100万倍だ。
とても抑えきれんよ。」

それに四皇の意向と言っても実際に派閥に顔が知られて居るのは
運命の律司者のみ……。「フロルド

「それは……。「カイル

「……更に総帥は暗殺が有るからと言って実際に顔を拝見した事
の有るのは四皇だけだからな。」フロルド

内心苦笑しながらそこまで告げると初めて二人以外の声が震えなが
らも割って入る。

「何……の……話？」

混乱を隠し切れてい無い声では有ったがエリシアはフロルドに聞いて
いた。

話の内容では無くフロルドが何故、虹の派閥の人間と話しているの
かが聞きたかったのだが今の混乱し切った頭ではそんな質問をする
のが精一杯でそれ以上は聞け無かった。

第3章 派閥・決意と決別？

派閥は学園卒業後の魔法科の就職先である。

派閥にはその規模と所属魔法師の能力平均によりランクが存在し、上から。

蒼、クレナイ紅、金、碧、無色と続く。

勿論、規模と所属魔法師の平均でのランク分けで有る為、各派閥には高位ランクに位置する魔法師が必ず居る。

只、多いか少ないかの差でしか無いが、やはり高ランクの派閥の方が人気が高いのは仕方無いかも知れないが・・・。

そんな中に在って虹の派閥は特殊で虹は各派閥のエリートのみを集めた派閥き抜いた(一部例外を除いて)で実質の構成員は他の派閥と比べると極端に少ない物の世間一般には最強と呼ばれていた。

話は変わり、魔法師のランクは

D

C

B

A

Sソロ

Sデュオ

トリオ
SSS

カルテッド
SSSS

クインテッド
SSSSS

の9ランクに分類されAランク以上で一流とされ一般魔法師の目標でもあるが虹には最低でもSSデュオランク以上のランクが無いと声すら掛からず、ランクはSSデュオでも派閥入りを認められ無い場合も多々存在する、虹の派閥は只強いだけの人間では対処出来ない問題に率先して介入するからだ。

そんな学生では先ずお目に掛かれ無い様な雲の上の人間が膝を付きながらフロルドと話をしているのだから、学生として普段の彼を知る者には理解できる筈も無かった。

そんな状況の中絞り出したエリシアの質問に激昂したカイルの怒声が飛ぶ。

「小娘！

誰に対してその様な口を！！」

その声のエリシアの体が震え顔が恐怖に歪み。

「ヒッ……！！」

と声が漏れる。

その様子に間髪を置かずに静止の音が掛かる。

「構わん！」

「オレは今、彼女達のクラスメイトだ、派閥の立場に意味など無い。」

「そう始めこそ強い口調からの静止だったが、全体的には優しい口調で左腕をカイル、エリシアの間に掲げながらカイルを静止するが、納得如何ないのかカイルは更に反論する。」

「しかし貴方はエレメントマスターなのです！」

「この様な下級ランク魔法師達相手にその様な対応は許され無いのです。」

「御自身の立場を軽視した発言は謹んで頂きたい。」

「そう続いたカイルの言葉に会場が一気に騒めく。」

『エレメントマスター』

その異名な(二つ名)は余りにも有名過ぎたからだ。

エレメントマスター……

若干10歳にして虹ニユウハツに入閥した天才術師であり。

現在、虹の派閥中央支部中央司令室現場最高司令官の職に就く魔法師であり、クラスは四皇に続くSSSSカルテッド。

数少ない虹に例外的所属無しに入閣した人間の一人でもある。
事実上派閥のNo.5にあたる人物の持つ称号だ、しかしそれに反して若すぎるその年齢の為、実名、素顔は一般には公表されてはならず世間的には神秘的な印象を強く持たれている。

流石にフロルドの才能を高く買っていたメイリンにも予想外の事態で有り言葉を無くしていた。

メイリンでさえこうだったのだ、他の人間には尚更の混乱を招いていた。

それでもメイリンは現役の派閥クルーである為に実力を隠している可能性も試験開始前から考慮していただけに数拍の後に落ち着きを取り戻し、

「答えてくれる？」

「本当なの？」

そう質問していた。

しかし当のフロルドはメイリンを見ずに、エリシアを見ながら軽く溜息を付き、

「余計なタイミングで余計な事を言ってくれるなカイル。

まあ仕方あるまい、この様な場で公にすべきでは無いのだが、いた仕方あるまい。」

そう古臭い口調で言の葉を告げていく。

「本来ならば内密に御伝えする所存では在りましたが、部下が先走

りました故、単刀直入に申し上げます。

エリシエール・A・S・マークライト皇女陛下！

皇帝陛下より皇宮への帰宮命令が下っております、速やかに御準備の程を。」

そうエリシアの目前で片膝を付きながらフロルドは頭コウズを垂れながら口にし、口にし終えるとゆっくりとエリシアの顔を見上げ、その目を死んだ魚の様な暗い目で見つめた。

そんなフロルドにエリシアはエリシアで、周囲を巻き込みつつ再び混乱し切った状態になりながら呟く。

「何を言って………?」

そんなエリシアの様子を完全に放置し淡々とした口調で更にエリシアを追い詰めて行くフロルド、

「エリシエール様、混乱なされておられるのは重々承知致してしておりますが………事実は変わりませぬ。」

貴女様はこの国の第4皇女様に当たり、皇位継承権は13位に当たります。

皇宮で御育ちになられ無かったのは陛下の實の御母上、皇后陛下が御側室で在られた事と陛下の御誕生と時を置かず御崩御成された為に御座います。

信じられぬと申されますなら皇帝陛下より直接御聴き下さい。

私が此処に居りますのも派閥より皇女陛下であられる貴方様を御護りする様にとの、皇帝陛下、並びに四皇陛下よりの命、在つての事に存じます。」

この事実は二人にとって最悪の事態を引き起こすが現在その事は誰も気付かないまま更に事態は進行して行く。

「・・・イヤ！」

・・・イヤ！イヤ！イヤだ！

お願い、お願いだからそれ以上言わないで！」

そう言いながら泣きじゃくるエリシアにフロルドは感情を殺したまま再び淡々と止めの台詞を続けた。

そうしないと自身の立場を忘れて目の前の女性を抱き締めてしまいたいそうだったからだ。

「・・・先ほどメイリン女史が質問なさった私の身分についてですがエレメントマスターは私で間違いございません。

私がそう呼ばれているのは・・・事実です。

それと先ほど部下が行なった非礼御許し下さい。

後ほどきちんと処罰しておきます故。」

しかし余りにも淡々としすぎた遣り取りはまだ歳若い皇族である事すら知らなかった少女の感情を爆発させる。

「・・・メ！」

・・・ダ・・・！」

ダメ！」

そう叫びながらエリシアはフロルドの首に手を廻しながら唇を重ねていた。

突然の出来ごとに反応の遅れたフロルドは暫く目を見開いたまま動きを停めたが

「・・・！」

ッ！

陛下！」

そう言いながら強引にエリシアを引き離しその顔を見る。

「そんなの知らない！

皇女になんて成たくない！

皇宮なんて行かない！

だから・・・だからお願い！

お願いだから・・・嘘だつて言つて！

貴方は只のクラスメイトだつて！

皇帝なんか知らないつて派閥なんか知らないつて！

そんな冷たい目で私を見ないで・・・お願い！

おね・・・が、い！」

そんな懇願を聴きながら視たエリシアの表情にフロルドは言葉を失い見惚れていた。

・・・美しかった。

本当に美しかった。

今まで見てきた彼女のどんな表情、どんな姿よりも。

その他のどんな光景よりも、ただ一向ひたすらに美しかった。

しかしその所為で出来てしまった静寂は決定的な誤解を生む。

「・・・私じゃダメツ！なんだね！

サヨナラ！」

そう俯きながら呟くと同時に走り出すエリシア。

しかし直ぐにその足は停止とまる。

信じられない光景が目の前に広がっていた。

「コフツ・・・無事か？」

「エリシア。」

口から鮮血を吐きながら微笑むフロルドがエリシアの肩を掴みながら目の前にいた。
フロルドの血で顔を染めながらエリシアの口からは眩きが漏れていた。

「エッ？」

「無事だな！」

「キエロ！」

「グランエンド！」

スペルキャンセルで放たれたSSSトリオクラスの地属性の魔法は敵を一掃し同時にフロルドは崩れ落ちた。
その背には何本もの魔力付与が施された矢が突き刺さっていた、皇女エリシエールに刺さる筈で有った矢の雨が……。

「何……してるの？」

「ねえ何してるの、何時みたいに寝てるだけでしょ？」

「ねえ、何時もみたいにつまんなそうな顔してよ、めんどくさそうな顔してよ！」

「フロルド君!!」

「……………」

幾ら問い掛けてもフロルドからの返事はなく赤い血の海が代わりに拡がりその体温は徐々に失われて行く。

「……………いだ！」

私・・・いだ！
私のせいだ！！」

発狂寸前にまで追い込まれているエリシア。
それを止めたのはハースだった。

<パンツ>

大きな音と共に倒れ込むエリシア、その前には右手を思い切り振り
抜いた態勢でエリシアを睨むハースがいた。
平手打ちがエリシアに見舞われていた。

「泣いてる暇があつたら出来る事を考える。

治癒魔法掛けるとか、校医の先生呼ぶとか！

<ヒール！>

治癒系オレは苦手なんだぜ？」

そう言いつつもセリフの途中でCクラスの治癒魔法をスペルキャン
セルで放つハース、それに正気を取り戻した面々はそれぞれ行動に
移って行く。

「ひ、光り輝く精霊の祝福、彼の地に到る光王の威光、その光の下、
傷付きし者に癒しの加護を！

ライトヒール」ソラ

「癒しの風」カイル

「ディア」メイリン

そんな周囲の様子に同じく正気を取り戻し、冷静になったエリシア

は、現在この学園の学生では唯一のSクラス治癒魔法師である自身最高の魔法を無意識の内に紡いでいた。

「聖樹の加護！」

スperlキャンセルで放たれたにも関わらず肉体手足などの消失の欠損程度であれば復元可能とさえ言われているその治癒力は凄まじく瞬く間に傷は塞がり、メイリンの放った解毒・解呪魔法により状態異常バットステータスの心配も無くなり、残る処置は意識の回復を待つだけとなった。

フロルドの意識回復を待つ一方、カイルは学園、派閥と駆け回っていた。

その為に派閥からは別の人物がエリシアの護衛として着任していた。護衛にはなんと四皇が就いていたのだった。

護衛に就いた四皇は運命の律志者の異名を冠する者・・・戒カイ紫桐シドウその二つ名の意味は 運命すら自らの意思で調律する者 と言う意味を込めて付けられている。

また、カイは四皇の中では唯一表立って行動している人物で派閥のNo.4に当たる人物だ。

それだけ今回の事件は帝国に於いても派閥に於いても重大な案件として認識されている事を暗に示している。

「しかし普段寒気がするほど冷静で傷なんか滅多に負わないコイツがまさか死に掛ける何てな〜！」

薄い笑みを称えながらカイがエリシアに話し掛ける。

「・・・・・・・・・・。」

黙ったままフロルドの手を握り続けるエリシアに諭す様にしかし見方によっては嘲笑う様に続ける。

「それだけ大切に想ってたんだろうな、あんたの事を・・・だから距離を取った。

好きになれば皇女であるあんたや派閥に迷惑が掛かるからな。」
カイ

「・・・迷惑何かじゃない！」

迷惑何かじゃ・・・。」エリシア

「世間体なんか無視して駆け落ちでもして欲しかったか？」カイ

「コク」

頷き返すエリシアにカイはとことん呆れたと言いた気な表情を浮かべ毒つく様に言い放った。

「無理だぜ！」

コイツには無理だ！

そんな事すりゃ派閥に孤児院作って管理してるコイツの給料が止まる。

そうなりゃコイツの個人資産で運用されてた孤児院も当然潰れる。

孤児院が潰れりゃ孤児たちは路頭に迷い、のたれ死ぬ。

そんな事このお人好しに出来るかよ！」

「孤児院って、本当何ですか！」エリシア

「あゝあ、本当だ。
だが完全に無駄だったな〜！」カイ

とても愉快そうな表情でそう嫌味ったらしく言い放つ、それに嫌悪感を露わにした表情をに浮かべながら問い返すエリシア。

「どうして……、ですか？」

それに唇の端を歪いびつに歪めながら多少芝居がかった大きめの動作と共に抑揚に返すカイ。

「そりゃ〜勿論お前さんが人前で唇を奪っちまったからさ！
それ以外に何があるってんだ。」

「どうして？」

あれは私が勝手に……しただけです。

フロルド君は何にもしてないんですよ。」エリシア

「そんなもん関係ね〜。」

あんたが皇女でコイツが護衛とは言え、エレメントマスターとは言え、平民そこが問題なんだよ！

世間知らずの御嬢ちゃん。

クツクツ……、惚れた男を地獄に墮したな〜！」カイ

「……」エリシア

何も言えなくなつたのを見て笑いながら部屋を出ていくカイにエリシアは俯いたまま唇を噛みながら只見送るしか出来なかった。

第3章 〽派閥・決意と決別？〽（後書き）

投稿直後に後書きのみ追加で再投稿、中途半端な事してすいません、ごめんなさい、申し訳ありません。

特に後書きは書くつもりが無かったのですが投稿後にこの小説をお気に入り登録なさってくれている喜徳な方（初めての登録者）がいらっしゃったので感謝のお言葉を述べさせて頂きます。

ほんと嬉しいです（涙）。

まだまだ不慣れで問題だらけかと思うのですがこれから頑張って投稿していこうと思いますので宜しく願い致します。

またご意見とう御座いましたら遠慮なくご連絡下さいませませ。ではまた次話でお会いしましょう。

第3章 く派閥・決意と決別？く

エリシアは自分勝手な行動を心底後悔していた。

カイ様の言った通りなら私は間違い無くフロルド君を破滅させた事になる。

当然だよ、彼の今の地位も名声も職も家族もその他の全てを最悪その命でさえ私が感情のままに取った行動で破壊した事になる。

そしてフロルド君は立場上その責任を取らざる終えないんだから。孤児院の孤児達と言う不特定多数の幼い子供達を巻き込んで。

それだけの事をしでかしたのに、フロルド君は私を庇ってくれた。その結果が彼自身の命さえも失いかねない大怪我をする可能性は十分に理解していたはずなのに。

事実、私はそれだけの怪我を負っわせてしまった。

しかしそれほど怪我を負いながらあの瞬間、まるでそうする事が当たり前だとも言っているかの様に笑いかけて私の無事を確認する言葉をくれた。

『無事か？』

と、問い掛けてくれた。

そして私の無事な状態よじすを見たあの瞬間、間違いなく安心していた。その事がカイ様から話しを聞いた今では私には不思議でしょうがない。

そうだ、間違いない。

あの時の彼の目は紛れも無く私の無事に心から安心していた。

それと同時に自分が負傷した事も死ぬ可能性がある事にもエレメントマスターとしての彼の存在価値が無くなる事に対しても彼に繋がる沢山の人達を不幸にしてしまった事にも。
違う！

あの時起きたすべての事に対して私を非難するつもりが全く無かったんだ。

エリシアはその事実に向更、子供染みた自分の余りにも短慮な行動を後悔させた。

惨めだと思う。

余りにも惨めだと、成績優秀？才色兼備？20年に一人の天才？誰に対してもやさしい？誰が？私が？

何処がよ！！！！

たった一人の本当に優しく、強くて、思慮深く、我慢強くて、その上冷静で。

今までずっと総てを視ていた人がすぐそばに居たって言うのに？

どうしてそんな事が言えるの、受け入れられるの！

違う！

違う！！

そうやって他人の評価だけを見ていたから、聞いていたから、そう思われるのが居心地がいいから、見たく無い物を見て見ぬ振りをして来たから、だから！

だから一番大切な人には振り向いて貰えなかった。

少し気を回せばある程度なら不自然さに気づいた筈なのに。

どう考えてもフロルド君は最初から私がフロルド君と深い関係にならないで済む様に自分から距離を取っていてくれたし、彼の成績で魔法科に在籍いる事も有り得ない、今にして思えば不自然な事だらけだ。その事に気付いて聞いていればもしかしたら私が皇族である事、これは無茶かも知れないけど、フロルド君がエレメントマスターで誰かの護衛であることは教えてくれたかも知れない、ううん！

きつと教えてくれた。
今なら自信を持って言えるその方が護衛はしやすい筈だし不自然さが少なくなるから。

だというのに私は他のクラスメイトと明らかに違うフロルド君を只の虚栄や嫉妬で振り向かせ様とした、してしまった。

フロルド君が気の無い態度を取って引き離そうとしても尚、かたくなに彼の周囲を付き纏った。

ただ、取り巻きとして彼を飼いたかったから。
その結果がこれだ、私の醜い部分が綺麗に浮き彫りになった訳だ、本当に情け無い。

そして彼を失いかけて初めて自分の本当の気持ちに気付くなんて本当に滑稽だ、私は。

フロルド君は最初から他の誰よりも私エリシアと言う人間を本当に大切にしてくれていたのに。

カイ様は彼の事をお人好しだと言っていた。
本当にその通りだと思う。

フロルド君は、怪我が治った後、私が謝っても決して私を責めたりしないと思う、ううん絶対にしない。
それどころか逆に謝ってくれると思う。

『騙っていて済まない。』

と、言い方は違つかも知れないけど間違いなくそう言った言葉を言

つてくれる。

大馬鹿者の私にだって本当は判ってる！

これ以上彼の側にいる資格は私には無いって事くらい。でもそう思っているにしても、解っているにしても、それでも強く強く彼に惹かれていつてる自分がいるのは隠し様が無いの。

今自分の横で眠るフロルド君が放つ暖かなオーラが……。

変化の魔法が解けた事で彼の本当は女性かと思わせる程綺麗で整った顔を見る事になって……。

エリシアと言う人間を引き付けて放そうとしてくれないでいるから。

フロルド君からすれば端迷惑な話だと思う。

私はフロルド君に怨まれて当然の立場なんだから、既に愛想を尽かされたはずの立場なんだから……。

だと言うのに……。

なのに、それなのに……。

今頃気付いたフロルド君への好意をまだ未練がましく持ち続けている自分が本当に可笑しくて堪らない。

同時にどれくらいこの人を愛していたかを思い知った。

決して叶わない恋だと言う事は自覚してる。

だって自分で壊してしまっただから。

もう決して叶わなくなった恋にエリシアの目元から透明な冷たい雫があふれた。

その酷く澄んだ雫はエリシアの頬を伝って空を舞いフロルドの頬を濡らして消えた。

しかし消えた筈のその雫は幾度消えようともあふれては空を舞い頬を濡らして消え、またあふれては空を舞い頬を濡らして消えをただ続ける。

繰り返し繰り返し時間が許す限りその光景は一向繰り返し返された。

第3章 〽派閥・決意と決別？〽（後書き）

行き成りですが今回の章は実は章分けする必要は全く無かった章です。

それでも敢えてそうしたのは読んで頂ければ判りますがこの章はある人物の脳内回想モードメインに仕上げてあり、続けて書くより分かり易いかと思っただからです。

今後も偶にこういった書き方をしたいと思いますがお理解くださいね。

第4章 く捕縛・失う者と観察者く

エリシア襲撃から3日。

目を覚ましたフロルドはエリシアが看病の疲れから自分に覆い被さる様に転た寝している姿を優しい眼差しで眺めそつとその髪を撫で、そのサラサラとした心地よい肌触りを暫し楽しむ。

「んっ」

それに気持ち良さそうな反応が帰ってきた事に一瞬微笑みを見せた
が次の瞬間には何時もの無表情に戻っていた。

「スマナイ。

サヨナラだ。」

そう呟くと眠るエリシアを起こさない様にそつとベッドを出て魔法
を行使し服装を整える、着用するのは公式な派閥幹部の正式礼装。
礼装に袖を通すのはエレメントマスターとしての最後の職務を全う
する為に決して怠る事の出来ない礼節であった。

この部屋を出ればフロルドはもう怪我人ではない、皇女を誑かした
大罪人だ、そうなれば犯した大罪で捕縛、拘束されるその後待つ
のは『処刑』恐らくこれ以外の処断はないだろう。

仮に罪を非常に軽く見積もったとしても、その生涯を幽閉と言う形
で終わらせる事になるのは覆し様の無い確定事項だ。

だからこそ解任は確定でも現時点ではまだエレメントマスターであ
るフロルドには病室の扉の向こうに佇む気配に対して自身の存在を
姿を形だけでも取り繕う必要があったのだ。

「ゴメンナサイ！
ゴメンナサイ！
フロルド君」 エリシア

そんな寝言が聞こえ退室仕掛けたフロルドだったが、

カイ辺りかな？

確実に余計な入れ知恵してくれてるなあ、折角真相は墓の下まで持ってくつもりだったのに。

と寝言の意味を正確に理解したフロルドはその思考とは裏腹に心からの謝罪の言葉を真摯に受け取った事で、もやもやしていた心は晴れていた、同時にその声の主と決別する決心をつけた。

病室を出ると元部下達全員が廊下に直立不動で一列に整列いた。

「今まで御苦労様でした！」

一斉にフロルドに贈られた敬礼とともに病室に一番近い扉前に居たカイルの劳いの言葉が響く。
それに対して、

「私からの最後の命令だ！

皆、己の守りたい者を守り切って見せよ！

そして其の者と共に生き残れ！

守りきる事の出来なかった私の様には為るな！

良いな？

汝らにカトレアの加護があらん事を！」

敬礼を返し、そう鼓舞した後ゆっくりとだが周囲に威厳さえ放ちながら堂々と審議官この世界の審議官に向かって歩いて行くフロルド。

その姿は実に堂々としていて美しく神々しくさえあった。

審議官の前に着くと手錠を架けやすい様腕を上げるが、目の前立つその姿に圧倒された審議官二名は結局手錠を架ける事が出来無かった。

病室の外から響いたカイルの声によって目を覚ましたエリシアが急いで病室を出ると思わず感嘆と少々の卑屈混じりの声を漏らしてしまふ光景が目飛び込んできた。

「綺麗…。

…どうして私だったんだろう…。

フロルド君の方が全然王子様か皇太子様みたいなのに。

皇女の私は只の町娘にしか見えないのに…。

エリシアはフロルドの後ろ姿を見てそう呟いていた。

フロルドは元々細身骨格で此の世界の男子としてはかなり背は低く170cm弱な上、体型も女性的で地声も高かったりする為ますますそう思わせた。

因みにこの世界、リストアの成人男性20歳の平均身長は183cmで成人女性性は162cmである。

少しの間状況を忘れ見取れていたが直ぐにその様な状況では無い事を思い出しフロルドの後を追って走り出すエリシア。

それに気付いた派閥構成員の女性がエリシアの前に立ち塞がり顔を寄せて小声で耳打ちを行う、

「堪^たえて…ください…」。

あの方を想うなら…堪えてください！」

その声は涙声で細かく振るえていた、どうやらフロルドに好意を寄せていた構成員らしくエリシアには強い敵意の籠った眼光を向けてきている。

批判したり手を揚げないのは例えエリシアがフロルドの仇であつても皇女で有る為、叛意を口にする事が出来ない為だ、だからこそ視線だけでも抗議を行ったのだろう。

エリシアにはその視線から逃れる資格は勿論無い、階級から言えば出来なくも無いがエリシアの抱える罪悪感がそれを許さなかった。

良く見るとそこに並ぶ者の殆ど全てが同じ状態だった。

それだけフロルドと言う存在が大きな尊敬と畏怖を持っていた事が解る出来事だった。

一方、前方では歴史的とも言える事態が起きつつあった。

そこでは一般的には知られていない四皇の内二人がそこに立ちフロルドを見ていた。

そこにカイが合流する、

「よっ。」

レックス！

マリアーナ！

珍しいな！

総帥も来んのかい？」

レックス・スミルノフ

破天の剣皇の異名を持つ派閥N o . 3の術師で破天の剣皇とは天を破る剣ツルギの皇帝の意である。

派閥の男性構成員からの支持が高く、反面女性構成員からの支持が低い。

原因は典型的な女垂らしとしても知られるからである。

実力は折り紙付きで単純な戦闘力だけでは四皇随一とさえ言われている。

マリアーナ・アクア・カズウエル

天啓の賢者と呼ばれる派閥のN o . 2。

天からの啓示を受けし賢を持つ者の意の二つ名を持つ四皇唯一の女性術師で、親フロルドの立場を摂る派閥の副総帥である。

反フロルドの立場にあるレックス、カイとはこと有る事に衝突している。

またフロルドを派閥に推薦おしたのも彼女である。

「・・・」レックス

「言葉に気を付けなさい！

四皇の品格を損ねます！」マリアーナ

「今頃出て来てそれか？

そんなんじゃ何時まで経っても結婚できね〜ぜ！

もう27だったな。

クツクツクツ。「カイ

「余計なお世話です。

貴方のような野蛮人に言われる筋合いは在りません！

少しはフロルド君を見習って礼節と言う物を学びなさい！」「マリ
アーナ

「罪人から何を学ばつてんだい？

そのフロルドが一番礼節つてのを判つて無かったから皇女様を誑
し込んだんだらう？

ククツ、派閥内でのあんたの発言力は随分落ちるだらうな。」「カイ

「いい加減にしておけ。

今は罪人の処分の方が先だ。」「レックス

そんな四皇同士の確執を露呈させる会話を隠す事無く公然として退
ける三人に周囲は混乱しかけているがそこに姿を見せたカトレア皇
国皇帝の姿に敬意と畏怖の混ざった喧騒が訪れる。

「覚悟は出来て居らうな？

皇女エリシエールを娘を誑かした罪は重いぞ！」

そう皇帝は威圧感タップリにフロルドに宣言したが。

「せっかちじゃのう！

まずは身内に話しをさせてもらえんか？」

そう言つて割つて入つたのは現虹の派閥に置いてのNo.1。

総帥を務めるガイア・フォース・マティウスその人だった。

ガイアは四皇最後の一人であり魔天の覇者と呼ばれる大賢者である。魔天の覇者の由来は人界呑み為らず、魔界、天界にすらも覇を称える絶対の強者の意である。

ガイアはフロルドの扱いに関んしては中立の立場を示して居るが孫の様な歳のフロルドの事を案じていたのは確かで優秀すぎるフロルドに一種の危機感を抱いていた。

皇帝と言えども流石にこのガイアの意見は無視出来なかったのか、

「良かるう…。」

ただ一言そう答えた。

「許しが出たのう。」

このような状況じゃて素直にお主の総ての意志を本心を伝えてはくれんかね？

フロルドよ。

主は秘密主義に過ぎるでの。」

ガイアはそう問い掛けたがその目はフロルド越しにエリシアを優しく見つけた。

それと同時に念話でエリシアを呼んだ。

「意志、本心・・・です、か？

いつも本心ですよ？

マスターはそうでは無い・・・と？」「フロルド

「わしが聞きたいのはこの後どうしたいか！
いや違うのうどうするかじゃよ？」ガイア

「どうするも何も得に何もしませんよ。」フロルド

「・・・答えんか。」

「ワシ等はそこまで信頼出来んかね？」

「とわ言えお主の立場上いた仕方あるまい。
では質問に答えなさい。」

「何時までその血筋を隠しておく気じゃね？」ガイア

「血筋？」

「私はただの一般人ですよ。」フロルド

「よう言うつわい。」

「隠しても今は無きエルゼ王家のみが持つ魔血の気配は消せわせん！
心配せんでも悪い様にはせんよ。」ガイア

「その言葉にざわめきが起きたが。」

「二人が言葉を交わす間に二人の側に近づいていたエリシアが口を挟む。」

「虹の総帥様ですな？」

「態々お呼び下さり感謝致します。」

「それで本当なのですか？」

「フロルド君がエゼル王国、確か15年程前に王族の失踪で解体された国。」

「その王家の生き残りだと言うのは。」

「頷きガイアは続ける。」

「このまま処刑されも良いのかね。
この娘を悲あつむしませる気かのう？」

「仮にそうだとしても私にはそれを証明する方法が無いのですよ？」
フロルド

「フオ、フオ、心配せんでも少し指でも突いて血を流せば魔血特有の膨大な内包魔力が溢れ出すわい。」ガイア

「……ハア、まったく何の為に彼女を遠エリシアざけていたと思っ
てるんです。

人の努力を完全に無駄にしてくれますね。」フロルド

その言葉と共にフロルドの姿は消える。

一方、ガイアの話が王家の生き残りで有る事への確認に移った事で焦りだした人物がいた。

マズイね〜。

皇帝に殺させる気だったんだがね〜。

仕方ない作戦変更と行くかね！

それと同時に指を小さく

パチン

と鳴らした。

その音は10キロメートル以上離れた場所で大きく響く事になる。そこには10万を超える兵士^{軍人}、術師がいた。その軍は一都市を占領していた。カトレア帝国の一都市をである。フロルドの倒れた翌日に発表されていた宣戦布告はカトレアがおこなった物だが、逆に侵攻を許した形だ、占領までの時間は僅か行軍を除けば半日かなりのスピード占領と言える。つまりクロス共和国軍が居たのだ。クロス軍はその指を鳴らす音と共に一斉に姿が消える。

転移魔法^{ゲイト}が作動したのだ。

消えたと思ったフロルドは一人の男に短剣を突き付けていた。

「これは何の合図だ？」

声が出した方を全員が見る……。

そこには短剣を突き付けるフロルドと突き付けられたカイがいた。

「オイオイ、何の真似だ？」

まだ罪を重ねんのかい？」カイ

「もういい加減つまらん偽装ペテンは止めだ！
お互いにな。」フロルド

「ペテンね〜何の事だ？」カイ

「騙せるのは精々オレ以外の鈍感な連中だ！
バン。」フロルド

その時巨大なゲートが開く。
クロス軍が転移して来たのだ。

「気付くんが少し遅かったようやな！
堪忍な。」バン

「どうかな？」

クロス軍は身動き出来ないらしいぞ？」フロルド

「は？」

何言うてんねん。」ハバン

「見ればわかる。

一網打尽だ！」

そう言つてフロルドはクロス軍を指す。

「やりおつたな……！」

苦々しい口調と共にバンは魔法を放った。

フロルドには無くクロス軍とエリシアに向かつて。
クロス軍に向かった魔法は捕縛魔法バインドを破壊した。
しかし魔法を放った事はクロス軍にとって最悪の結果を生んだ。
エリシアに放った魔法に起きた事態のせいだ。

中級魔法それも無詠詔このクラスならエリシアでも十分防げる魔法だ。

実力から言えばで有るが、しかし突然攻撃されたせいで実戦経験の無いエリシアは全く動け無かった。

「灰と化す世界。」

しかしエリシアの前に再び移動したと同時に放たれたフロルドの魔法がバンの魔法を飲み込む。

だがその火属性魔法はそれだけでは済まなかった！

威力が違い過ぎたのだ。

そのままバンやクロス軍に向かつて行く。

このまま何もしなければクロス軍は跡形も無く消し炭に成るだろう、もしかしたら、灰すら残らないかもしれない、しかしクロス軍は勿論、この場にいた誰もがただ啞然と全てを蹂躪するこの魔法を見続ける、時間の経過が嫌に遅かった、迫りくる死の鎌を前にクロス軍は只呆然と立ち尽くしていた、この魔法を防げる術師はこの場にはフロルドしか居ないと本能的に理解したのかも知れない。

「…そ、んな！」

誰とも無くそんな声がクロス軍の兵達から漏れ響く。
自分達には死しか無いのだと感じ取った兵からだろう。
それほど圧倒的な破壊力だったのだ。

一方、カトリア皇帝を始め派閥の人間、学園関係者もフロルドを敵にすれば死しか無いのだと全員が考えるに至った、何処彼処から化物、魔王等と言った畏怖を募る言葉が囁やかれる。

しかし双方の考えは外れる。

クロス軍に魔法が当たる直前に炎は真上に軌道を変えたからだ。
結果死者は一切出ずに終わると言うある種異常な事態に陥る。

その光景を全員が呆気に取られて見ていたがしばらくしてフロルドに視線が集まった。

そんな中エリシアだけはフロルドの背を微笑みながら抱きしめていた。

「何をしてる？」

状況が判らん程愚かでは或るまいに。」

そうフロルドは呆れながら呟いた。

「だってフロルド君、こんなどうしようも無い私をまた助けてくれた。」

それが嬉しかったから。」

そう返してきたエリシアに聞く前よりも更に呆れつつもフロルドは、

「そうじゃない。

恐くないのか？

って言ってるんだ。

虐殺者の背中に抱きつくのは不自然だろうに。」

「恐くないよ！

だって初めから当てる気無かったでしょう？

それ位は幾ら私が馬鹿でも分かるよ。

こんなに短い期間間に何度も同じ様な事をしてるのを見ればね。」

エリシア

「何の事だ？」フロルド

「だから、さっきの魔法だよ。

あの人達に当てる気なんて初めから無かったでしょう。」

そう言つてエリシアはフロルドの目を見詰めながら微笑んだ。

エリシアの言う事は確かにその通りで、フロルドは学生が大勢居るこの場を鮮血の舞い踊る戦場には決してしたくは無かったし、見ないで済むなら極力、人の死も特に殺人による人の死は若い彼らには余り見せたくは無かった。

その上此処でクロス軍を虐殺する様な事が有つては今後の終戦、停戦交渉時にもその後に置いても非常に不利になる。

戦争では勝者が絶対では有っても虐殺者が指導者として他国の民を導いては誰も信用などしないだろう、恐怖は疑心を生み、疑心は暴徒を産みだし、暴徒は暴動を産むのだから。

それだけは今後の両国の友好を維持し続ける為にも何が有っても避けるべき事柄だった。

あくまでも強大過ぎる力は中立で無ければ平和は造れず、また維持出来ない。

その事をフロルドはよく知っていた。

むしろエリシアがフロルドには殺意が全く無いという事実気付いていた事の方が驚きだろう。

人は自分達に理解出来ない物を畏れる。

そして排除しようとする。

差別と言う物はこの典型だ、ただ複数の人が当然の様に行くが為に普段は気付かないだけに過ぎない。

それでも世界が廻るのは、人は個の意見や思想は重視しない反面、集団の意思思想には非常に流され易い習性がある生物で有る為、大多数の”人”と言う生き物にとって誰かを見下し蔑む事は当人達の心に安定と優越感を生み出し、また他者との共通した思想と言う名の共通点を見出させる為、仲間意識を作り出すからだ。

だからと言って全ての人がそうでは無い、フロルドやエリシアがそうだ。

二人は今、自身の行動が周囲に及ぼす影響を理解した上でフロルドは広範囲攻撃魔法を相手の鼻先を掠める様に放ち、エリシアは自分が異端視されるのを覚悟した上でフロルドを抱きしめている。

一方そんな二人を冷ややかに見つめる人物がいた。

所詮ただの操り人形か我等の役にはたちそうも無い、まだカトレアとクロスの方が使えるな。

だが、フロルドの力は人形に持たせるには大きすぎる対処法を考

えておくべきだろうな。

・・・世界が自分達を守る為に作り出した人形・・・か、邪魔くさい存在だな。 ???

そこまで考えながら周囲の雰囲気から逸れない様に合わせながら、ざわめきと共にフロルドから遠ざかり出した周囲に合わせ、その人物もまた姿を消していった。

一方フロルドに一掃されかけたクロス軍だがバンの的確な指揮の下、ゲートを使いその場から即時撤退し、自国の領土まで退いていた。同時に混乱を極めるカトレア軍、クロス軍、学園関係者、派閥構成員の入り乱れた撤退作戦の中でもバンはスパイ工作員を潜り込ませる事を忘れていない辺り流石と言うべきなのだろう。

しかし、そのスパイに紛れて第三のスパイが居た事には流石のバンも気付いていなかった。

クロス軍が撤退していく中この混乱を作り出した張本人はその場から特に逃げる訳でも争いを助長する訳でも無くただ前方を見つめていた。

エリシアはエリシアで余り長い間フロルドに抱き着いている事はフロルドの立場上得策では無いと言う事に気付いていたらしく、今はその華奢な背中を不安げに見つめ続けていた。

それから暫くして混乱の鎮静化と共にフロルドはカトレア軍に連行されて行き、エリシアは近衛隊に護衛もとい監視されながらその場から離れて行った。

第4章 ー捕縛・失う者と観察者ー（後書き）

もうすぐ新年、と言う事でペースアップで執筆中です（年末年始はサボり？）。

てな訳で新年までにもう1、2話投稿できればな〜と思う今日この頃。

一時期かなり空いたり、短期間に複数Upしたりと落ち着きなくてスミマセン。

話は変わって作品について少し、行き成り重い内容（政治や人間心理絡み）を少々多目に書き込んでいるこの章は論文っぽくなら無い様に極力気を付けましたが皆さんにとってはどうでしょうか？

戦闘シーンの非常に少ない序盤に飽き飽きして居る方もおられるでしょうが本格的な戦闘シーンはある女性の登場後に段々増えてくる予定なのでもう少しお待ちください。

ではまた、次のUpでお会いしましょう。

第5章 二人の選択・真実の欠片

カトレアとクロス両国の戦争は硬直状態にあった。

原因は”シンクレアの変”と名付けられたフロルドの拘留事件だ。

シンクレアとは事件の有った学園の名である聖十字シンクレア軍事学園から来ている。

カトレアでは軍人はエリートであるため戦争総健派反対派が皮肉を込めてそう名付けたのだ。

その裁判以降クロス軍はフロルドの軍事介入を恐れ守りを固めて状況を見守っている状態であり。

対と為るカトレア軍はフロルドの抱き込みを計り、軍の先兵となる事で罪を許すとして勧誘に励んでいるが拒否され続けている為守りを固めたクロス軍を攻め切れずにいた。

かと言ってフロルドを罪に問い処罰する事は先のクロス軍の進攻でたやすく町一つを落とされた帝国カトレアには不可能でもあった。

〈皇居地下特別牢獄〉

その牢の一つに立つ牢番と一人の罪人が世間話混じりに物騒な会話をしていた。

「協力する気にはなったか？」牢番

「する訳無いだろ。」フロルド

「このままだと処刑だ！」

それで良いのか？」牢番

「お好きにどうぞ……。」フロルド

「もう何人も殺してるんだ！」

今更だろうが……。」牢番

囚われの人物の身を半分案じ、半分は利用する為に説得していたがそこで二人の会話は一旦終わる。人が来た為だ。

コツッコツッコツク

静まり返った廊下に足音が響く。暫くして足音の主が姿を見せる。

皇帝とガイアだった。

牢内に居ながらまるで自宅のベットで寛ぐ様に出迎えた黒髪の青年を忌ま忌ましげに睨みながら、既に利用価値の無くなった一枚の政治的カードをそれ以外の目的で最大限利用するために切る事を決意した皇帝は、

「娘をくれてやる！」

獄中で寛ぐ自国最大の戦力に対してそう告げた。

しかしそれを言われた当人は、その申し出を一蹴する。

「それで協力すると？」フロルド

「勿論断つても良い！」

ただし・・・その時はどうなるか・・・。」皇帝

そう言つて不敵に笑う。

「それは脅しと言つらしいぞ？」

一般的には・・・な。」フロルド

「随分と余裕がある様じゃな。」

とても脅されとは思えん。」ガイア

「脅しに成つてないんでね。」

と今度はフロルドが不敵に笑う。

「・・・自分の立場が判つているのか？」

この牢は魔封石で出来ている。

幾ら貴様が強かろうが此処に居る限り何もできん！」皇帝

魔封石・・・魔力を掻き消す魔石で希少価値の非常に高い鉱石。

それで作られたのがフロルドの居る牢だった。

「だからと言つて人質を殺せばオレは迷う事無くクロスに付くぞ？
それともエリシアをオレの目の前で拷問でもしてみる？」

そうフロルドは余裕たっぷりと言った時、別の人間の急いた足音が響いた。

暫く全員声を出さず訪れた人物を待つ形になり暫しの沈黙となった。

「フロルド君。

・・・失礼しましたお父様にガイア様。」

そんな中、上擦った声から後半は沈んだ声になりながらエリシアがフロルドの牢を訪れる。

それに皇帝は、

随分間のいい

フロルドとガイアは、

随分間の悪い

とそれぞれ思いながら迎えた。

その雰囲気は彼女にも伝わったらしく登場直後、固く暗い顔で固まってしまう。

その様子を知ってか知らずかエリシアを無視して話は進む。

「エリシエール、喜べ！」

たった今フロルドとの婚姻について話していた所だ。」

そう皇帝は半ば狂喜を含んだ笑顔で話しを再開した。

その顔と言葉の意味を正確に読んだ彼女は引き攣った顔を其の儘に

顔色を一瞬で蒼白に変えて佇み、その手は小刻みに振るえ始めている。

「どうした？」

青い顔をして、もっと喜んだらどうだ惚れていたのだろうか？

折角身分に関係なく籍を入れられると言つのに普通なら有り得んだのだ。

平民からの成り上がりとは皇族の婚姻など。

それを許す余は随分と寛大であるう？」「皇帝

追い撃ちを掛ける様に皇帝の言葉は続く、エリシアとしては皇帝の、実父の口からこれ以上の腹黒い言葉は何も聴きたくは無かったのだがそれで終わる程狂気を孕んだ皇帝は甘くは無かった。

「さあ。

早くともに生きたい婚姻の申し出を伝えなさい。

父として大いに歓迎するぞ。

この者も皇女の申し出を断る不敬等せんだらう。」

口調こそ優しい皇帝だったがそれが自分に対しての優しさでは無く、^{フロルト}彼に対しての揺さぶりであり脅迫なのと言つまでも無く理解できた。そのためエリシアは俯き、

「・・・ゴメン、ナサイ・・・。」

そう口にするしかなかった。

「なぜ謝る。」

もっと嬉しそうにしたらどうだ？

^{フロルトにガイア}貴公等もそう思うだらう？」「

この場にエリシアが現れた事でフロルド自身が口にした目の前で彼女の拷問（陵辱）。
それが現実になりかけた事で皇帝はフロルドとエリシアを精神的に完全に追い詰めていた……。

「さあ？」

返事を聞かせてくれ。

勿論断らんぞ？

我が娘、エリシエール、それとエレメントマスター、フロルドよ。

┌

しかし皇帝がそう言い終わるよりも早く二人は動きだしていた。

エリシアは自分が取引材料となる事を永遠に拒否した。
舌を噛んだのだった。
自決した

これ以上フロルドに迷惑を掛けられ無い！

掛けたく無い！

追い詰められていた彼女はその思いから冷静で在れば短慮と言えるが今の状態では最善と思う行動を取っていた。

エリシアの様子を見ていなかった皇帝は自らが指し示した結末に気を取られ自ら追い詰めた少女が口から血を流し倒れるのに全く気付か無かった。

そんな皇帝とは裏腹にガイアは舌を噛んだエリシアが倒れる前に抱き留め声を上げる。

「エリシア君！

シツカリしなさい！

死んではならんぞ！」

そう叫んでいた。

その声で皇帝は初めて娘が舌を噛んだ事を知り愕然とした声を上げる。

「なっ…！」

そう呟くだけに留まったが驚嘆は隠し切れていないのは傍目からでも理解できた。

そんな表情を浮かべる皇帝は人の心を理解していないが故に、統治^帝者であるが故にエリシアの行動の意味が理解の範疇を優に超えただいた、事態に付いて行け無くなり完全に取り乱していた。

皇帝としてはエリシアにとってはフロルドを自分の物に出来る最も簡単でてつとり早い方法を示したのに舌を噛んだのだから、何を差し置いてもこの話に乗る物と思っていたのだろう。

しかし現実の意味不明の事態に推移した為に皇帝を混乱させ皇帝の計算を完全に打ち砕いてしまっていた。

そんな皇帝を他所にガイアは治療を始める。

本来、治癒魔法はフロルドの方が数段格上ではあったが牢から出していたのではとても間に合わない。

そう判断したガイアは自ら治癒魔法の行使を行う、自らより格上と言っても十分にガイアの魔法もエリシアを治療出来るからだ。

勿論その判断は正しく何の問題も無かった。

しかし……。

治療を行えばまた道具として扱われる事になるう。

それにこの娘はフロルドの足手まといに成たくないからこそ……
舌を……かんだのじやろう。

その思いが治療への集中力を奪っていた。

当然それはエリシアの命を更に危険に曝す事となったが、情に流されつつあったガイアにその思いを打ち消す事は出来ずエリシアは瀕死の状態のまま治療は中断されてしまっ。

一方獄中のフロルドはエリシアが舌を噛む直前ある行動を開始していた。

それはエリシアが半錯乱状態にあることを正確に把握した上で自分のために命を断つ可能性が有る事を考慮した判断では在ったが、彼女の行動は彼の予想より早く、エリシアのフロルドへの罪の意識の大きさを物語っていた。

舌を噛んだエリシアの状態を確認した彼は、その後の成り行きを観察しながら通常なら必要は無いが、人命を最優先に考え頭の中で詠唱を開始する。

光輝なる陽の通、生を満たす優しき灯その照らし守る活力、汝が
児に……。 シャイニングリカバリー

そう心の中で唱え魔法の発動を遅延させつつ、詠唱と同時に腰を落とし居合の様な構えをとった。

勿論、牢生活のフロルドに武器は無い。

その上此処では魔法は使えない魔封石の効力だ……。

が、牢の鉄柵は切り裂かれると同時にエリシアの傷は癒えていた。

そのままゆっくり歩きながら気を失った少女を抱き上げながら独り言葉を紡ぐ……、その声は皇帝とガイアの声で掻き消された。

「フロルド、貴様は一体何を！」 皇帝

「フロルド、お主何をしたのじゃ！」 ガイア

その悲鳴にも似た声には答えずに気を失った俣のエリシアを見つめ呟いた。

「困った娘だ！」

サファイア……使わせやがって……全く。」 フロルド

そう言いつつも嬉しそうな寂しそうな複雑な思いの感じ取れる顔を向けていた。

「……んっ……。」

それから直ぐにエリシアは声を漏らしながら目を覚ましフロルドの顔が近くに有る事を気付くと真つ赤な顔で暴れ回ったが、暫くしてそこに不自然さを感じ暴れるのを止めフロルドの顔を凝視観察し始める。

普段の彼とは僅かにしかし明らかに何かが違っていた。

違いはすぐに判った。

目の色が右目のみ蒼に、黒と蒼のオッドアイに変化していた。

「……目の色……変、蒼くなってるよ？」 エリシア

困惑しながらその事を告げる少女には目を向けず声には答える。

「誰のせいだと・・・まあ良い。

これが本来のオレの目の色だ。

オレは元々オッドアイ、傍目に目立つから髪の色と合わせて黒に変えてるだけだ。」フロルド

「オッドアイ・・・魔眼かの！

どうにもお前さん呪われた王子じゃった様じゃな。

じゃから身分を隠しておったか。」ガイア

「蒼い隻眼の魔眼・・・まさか！

サファイアか！」皇帝

「これで判ったろう？

俺は貴様程度にどうこう出来る人間では無い！」フロルド

「待って！

また一人で行っちゃうの？」エリシア

フロルドと皇帝達の駆け引きを余所にエリシアはフロルドが今度こそ居なくなる様な気がして状況にそぐわない台詞ではあるがそう聞いていた。

「・・・そう為るだろうな・・・。

お前はどうする気だ？

先に言って置くがお前の事まで庇ってられんからな。」フロルド

遭えて冷たい眼を彼女に送りながらそう聞くとエリシアは逡巡しな

第5章 二人の選択・真実の欠片（後書き）

どもども、本年最後の更新です。

作品書いてて思ったのですが、この作品、主役級簡単に死にかけすぎか？

でも別にいつか・・・。

で、話は変わって裏話を一つ、実は以前（序章で）この作品は別サイト投稿だと書きましたが、加筆修正の段階でサブタイトルが変わってる部分が幾つか有ります。

更に別サイト投稿分とはボリュウム全然違います。

元探して読んでみると面白いかもです。

投稿サイトに付いては進行が追い付いた時にでも紹介しますので、我慢してください。

では、皆様、良いお年を。

第6章 く邂逅・現実を見つめながら・・・く (前書き)

新年明けましておめでとございます。

少々遅い新年のご挨拶ですがお許しを。

では皆様お楽しみ下さい。

第6章 邂逅・現実を見つめながら・・・？

フロルドがサファイアを解放するより1週間前。
シンクレアの変の翌日、学園はフロルドの話題で持ち切りだった。

そんな中ハース達フロルドのクラスメイト達はエリシア暗殺未遂の
一件以来臨時休校と為っていた事を利用して学園の図書室に来てい
た。実技試験

目的はエレメントマスターと皇女殿下、派閥についての情報収集だ。
と言っても新聞やニュース程度の情報しか手に入らずなかなか思う
様には進んでいない。

「試験以来フロルド様の話題ばかりね。」ソラ

「そうだな、でも仕方ない。」

何しろ、あの落ちこぼれが実はエレメントマスターでした〜って
んだから。「ジン

「・・・そうね。」

随分とゲンキな話、ハースあんたやエリシア様以外、だれも見向きも
しなかったのに・・・。「ソラ

「昨日のであいつ・・・って、フロルド様が、・・・の本当の力思
い知らされたからな。」ハース

「・・・うん、無詠詔で最強クラスの魔法撃っちゃ何て思わなか
った。」ノバア

「そ〜ね〜。」

でも〜時々〜SSクラスぐらいの〜魔力を〜放ったり〜してたから〜センセ〜は〜フロルド君が〜サボってるんだ〜って思ってたんだよ〜！」メイリン

突然会話に入ってきたメイリンの方を見ながらその場に居た全員が、

ただの天然ボケ教師じゃ無かったんだ！

非常に失礼ではあるがそう心の中で叫んでいた。

「SS^{デュオ}クラスの魔力を放っていた？

何時ですか？」ハース

「あらあら〜興味津々ね〜？

そ〜ね〜。」

・・・何時早朝だったわね〜。」

でも〜、一回だけ〜授業中にも〜有ったかな〜！」メイリン

「何時ですか？」ソラ

「エリシアちゃんが〜魔獣に〜襲われそうになった時〜。」メイリン

「あの時か！

あの魔獣確かAランク指定だし、先生も近くにいなかったのに何で逃げたのかわかって？

ずっと不思議だったけど・・・。

そ〜ういふ事だったんだな。

それより先生、様付けしないとマズイですよ。」ハース

「あら〜そうだったわね〜。」メイリン

「あの、どうでもいい質問なんですけど。」

先生のランクってどれぐらいなんですか？

出来れば他の先生方のランクも教えて貰えると解りやすいんですけど。」ノバア

「ん〜、そうね〜。」

じゃあ〜、初めに〜教員試験の〜合格〜ラインからかな〜？

教員資格は〜最低でも〜Aランクから〜受付で〜、その上で〜試験に〜合格した〜術師だけだね〜。」

それで〜みんなの〜担任の〜カイトちゃんが〜。」メイリン

カツ、カイトちゃん！ 全員

「Aランクで〜、学園長先生が〜SSSトリオランクのはずよ〜。」

後〜武芸科主任の〜明日香アスカちゃんが〜Sソロランクで〜。」

通信科の〜一成イチセイ君も〜Sソロランクだったかな〜。」

士官科のタリアアちは〜、SSデュオランクで〜私といっしょよ〜。」
メイリン

この人、目茶苦茶だ！

でも凄いんだ！

やっぱり！ 全員

メイリンの底抜けにマイペースな口調と目上の教師陣を奥目もなく友達感覚で呼ぶその軽さにツッコミつつもクラスメイトは気になつた事を質問する。

「でも、エレメントマスターはSSSSランクでしたよね？
なのにSSデユオクラスの魔力しか放たなかったんですか？」ヨーティ
ア（男子のクラスメイト）

「あら〜。

イイ質問ね〜！

本人が〜いないから〜推測だけ〜魔獣の時は〜それで十〜分だ
つたんでしょ〜ね〜！

それから〜朝の時は〜ハース君が〜知ってるんじゃないかな〜。
メイリン

「俺ですか？

・・・う〜ん。」ハース

「貧血と低血圧よ！

それで寝ぼけてたんでしょ。」ソラ

「何であいつが貧血に低血圧って知ってるんだよ〜！

「やっぱりね〜！

メイリンの質問に答えたソラの返答に対してハースとメイリンの声
がダブリながらそれぞれ口を開く。

「ね〜、ソ〜ラちゃん。」

更にメイリンが手招きしながら続ける。
それから耳元でこつ言った。

「やっぱり〜、あの子の事〜フロルド君好きだったみたいね〜！

一瞬何を言われたのか理解できずに固まったソラだがその言葉の意味が判つてくると真つ赤になりながら否定し始める。

「なっ！」

ちっ、違っ、違います。

何で私が……。」「ソラ

「そうだったの？」

ソラ。」「ノバア他女子数名

「何々、何の話、何で赤く成ってんの？」男子

「ウツサイ男子！」

黙ってて。」「女子

そんなやり取りを一人の少女が呆れ顔で見ていた。

何をなさっているのこの方達？

そう思いながら口を挟む。

「お話が脱線してしまっている様ですけれど！」「????」

そう突っ込まれて話を再開し始めようとする生徒たち、しかし直ぐに異変に気付く。

「あっ。」

そうだったね。

僕達、フロルド様について調べてたんだ。

って、アレ？」ウル（クラスメイトの男子）

「貴女……、一体誰なの？」ノバア

「私はリンデイス・N・F・テイターニアと申します、リンとお呼び下さいな。」

何時も兄がお世話になっております。「リン

絹のような輝きを放つ銀の髪に澄んだ碧色の瞳を持つ少女はいかにも良家の出だといった立ち振る舞いでスカート裾を摘み腰を折りながら挨拶をした。

リンと名乗った美少女に見取れながらも、

「お兄さん？」

Fってまさかフロルド様の妹さん？

でも、確か孤児だったはずだけど？」

そうウルは聞き返した。

「はい、私とお兄様は血は繋がっておりません。」

ある事件でお兄様に保護されその後妹となりましたから、私は……

私がこちらをお訪ねしましたのは、お兄様から御学友の皆様方にお渡しする物が有るからです。

もしもの時はこの手紙を皆様にお渡しする様言付かっておりましたので。「リン

「手紙！

読ませて。「ソラ

先程まで遊ばれていたのも忘れてソラはリンに急かせた。

「こちらです。」リン

受け取るなり封を切る。

「声に出して読んでくれ。」ハース

「ええ……、これを……。」ソラ

『これを読んでいるという事は、オレとエリシア、又はどちらかの正体を知ったと言う事だろう。』

皆には「本当に済まない」と思っている。』

そう綴られた書き出しに僅かに喧騒が漏れる。

仮にもクラスメイトだったとは言えエレメントマスターからの謝罪など有り得無い事なのだから。

喧騒を無視してソラは続ける。

『立場上オレ達はその存在を公に出来無かったとは言え皆を騙していた事には変わり無い。』

本当に済まないと思っている。

責めてこの手紙を託したリンデイスに機密以外の事は説明して貰うつもりだが……。

余り深入りすると引き返せ無く為るかも知れない。

それぞれ十分考えてから話を聞くか聞かないか判断してほしい。

それでも聴くならリンから詳しい話を聴いてもらいたい。
最後にリンはオレの大切な家族であり右腕と言つて良い。
そんな彼女の言葉はある意味全てが機密や禁忌になるえる。
それだけ重要な真実だと頭の片隅にでも留めておいて貰いたい。

白天の節3の月 / 7日 / 聖魔歴6749年
聖魔歴6749年2月7日

フロルド・

Y・F・ランフォードより『

「・・・より。

ですつて。」 ソラ

ちなみにこの世界は春夏秋冬を節に分け。

それを更に3つの月に分けて月を数える形で12ヶ月を数えると1
年とする数え方をする。

春は醒芽せいがの節（3月～5月）。

夏は盛緑せいりよくの節（6月～8月）。

秋は蒼天そうてんの節（9月～11月）。

最後に冬は白天はくてんの節（12月～2月）。

（ ）内は西暦の相当月

と言ひ西暦とは1月ズレている。

ソラが読み終わったのを確認したリンは落ち着いた口調のまま必要
事項を伝えていく。

「今より1時間お待ちます！」

それまでに御決断の程をお願い致します。

先程の文の意味を良く吟味して御決断下さい。

逸れでも聞きたいとおっしゃるのなら屋上までお越し下さい。」

リン

「待って！」

その前にこれだけは聞かせて。

二人は無事なの？」ソラ

「少なくともエリシア様はご無事です。

お兄様は・・・申し上げ難いのですが・・・。

後、一週間生きておられる保証は有りません。」リン

そう言った時のリンの顔は下を向いていた為解ら無かった。

しかし、その声音は今にも泣き出しそうな印象を皆に与えていた。

1時間後手紙の噂は広まっていて殆どの生徒と教員に話は伝わっていた・・・しかし、そこに居たのはメイリンを覗けば他は生徒のみでその生徒もたった4人だけだった。

その4人はソラ、ハース、ジンにノバアだ。

「1時間経ちました。

では、場所を変えましょうか！」

そう言ってリンは

パチンッ

と指を鳴らした。
ゲート
転移魔法だ。

着いたのは荒れ果てた草原。

だがそこには元は豪邸であったであろう家の焼け跡が聳えていた。

「……此処は……?」

そう呟いたソラにはこの場所に見覚えがあった。

「わたくし私が初めてお兄様にお会いした場所です。」ソラ

「どうしてこんな場所?」ノバア

「10年前、此処はある商家同士の対立で焼き払われた現場です。」
ソラ

それを聞いてソラの手が震え出す。

同時に本人さえ聞き取れ無いような小さな声で、

「……まさか……ここは……!」

そう呟いた。

その声は聞こえてはいなかったがリンは、

「……此処は10年前に暗殺されたティターニア家の家が在った所です。

ティターニア家はサルスバード地方を基盤としていた貴族で300年の歴史を持つ名家であり、商業、工業で巨万の富を得ていた事でも有名な商家でもあります。」

「……やっぱり。」ソラ

「やっぱりって知ってるの？」

ソラ。「ノバア

「ええ。」

私、何度か此処に遊びに来たこと有るから。」ソラ

「……やはり貴女様はシューベルト家のご息女様なのですね？」
リン

それを聞いたハースが、

「シューベルト家のご息女？」

とリンとソラを見ながら聞いた。

ソラティカ・G・シューベルトそれがソラのフルネームだがソラは学園ではソラ・ガーネットと名乗っていた為だ。

「ソラティカ・G・シューベルト。」

それが私の本当の名前よ。

別に良家の子息が身分を隠して学校に通うなんて珍しくも何とも無いのよ。

謀略、暗殺は日常茶飯事だからね。

リンデイスの名前には聞き覚えが有ったけど貴女があの子だったのね。」ソラ

そう本当に嬉しそうに言った。

その言葉にリンは背筋が凍る様な冷徹な視線を向けながら、軽蔑する様な口調で問い返す。

「何故、それほど嬉しそうになさっているのですか？」リン

「何故って？」

「死んだと思ってた幼なじみが生きてたら嬉しいに決まってるじゃない！」ソラ

「・・・本当にそう思いなのですか？」リン

真意を謀りかねて首を傾げるソラにリンは、

「何もお知りでないのですね？」

そう聞いたがその顔は哀れみが浮かんでいた。

『何も知らない。』

そう言われてソラは心当たりを探ったが答えは出なかった。見兼ねたリンが言葉を紡ぐ。

「ある商家との対立と言いましたね？」

その商家のお名前をご存知ですか？」リン

その質問にソラは悪い予感を覚え顔色を悪くして来ていたが、聞か

ない訳にも如何ず他の4人と共に、

「……知らない。」5人

そう答えていた。

それにリンは、

「シューベルト家を含む3家です！

他の2家はマーシャル家と朝野家アサノと言いますが……。

黒幕はシューベルト家とアサノ家の様です。

ちなみにお父様達に直接手を掛けたのはアサノ家の様ですが……。

屋敷に火を放たれたのはシューベルト家だった様です。」リン

予想道理のリンの返答に必死にしかし完全には否定しきれず言葉に詰まりながら反論する。

「……うそ……そんなの嘘よ！

そんな筈無い！

パパ達が……人殺し何て！

確かに……貴族にとっては……暗殺や……策謀が……日常茶飯事でも……。

パパも……ママも……そこまでして……一族を……繁栄……させる気は無いつて……。

そんな事する筈無い!!」

顔面蒼白に成りながらソラは否定する。

逸れでもリンは、

「……証拠なら……此処に……ございます!」

それとご両親が関わっておられなくとも一族の全員がそうとは限りません！」

そう言いながら暗い顔で出す事を躊躇いながらある文書をソラ達に見せる。

そこには古ぼけた紙に暗殺の依頼についての内容が書かれていた。

「パパの字だ……。
間違いない。」

ソラはその場に崩れ落ちながら天を仰いだ。

薄々は幼き日に聴いた両親の言葉が嘘であると気付いてわいた。

しかし、信じなかった、信じなくなかったその結果とは言え相当にショックだったのだろう。

「……貴女の家族を怨みます！」

ですが悪い事ばかりでは有りませんでした。」「リン

「ど〜いっ〜意味なの〜？」メイリン

「お兄様にお会い出来た事。」

それと孤児院の家族に出会えた事は本当に幸せだったと思っております！」リン

「そっんなに〜フロルド君が〜大事〜？」メイリン

「当然です！」

お兄様以上に尊敬できるお方にはお会いした事など有りません！」
リン

即答するリンに若干引きつつハースが口を挟む。

「ブラコンだな……。」「ハース

「貴方方は普段のお兄様にお会いした事が無いからです!」「リン
語気を強め軽蔑の目を向けながらそう言い放つ。

「そう言われてもな……。」「。

オレらサボリ魔のフロルド様しか知らないんだよな。」「ジン

「それもお兄様のお心使いです。

これは私^{わたし}を含め極僅かな方々しか存じていない事実ですが……。

お兄様は現在^{カルテット}SSSSクラスですが実際には^{クインテット}SSSSクラスの
更に上のクラスにおられます。

この意味は解りますね?」「リン

「なっ!」「全員

「それって臨戒者^{りんかいしゃ}って事じゃ……。」「ノバア

臨戒者……。

世界と繋がり世界を導く物と言われる伝説上の最高位クラス、実際
にはクラスでは無く称号に当たる。

そう呟きにもいた小声を漏らしたノバアに、少々怒気の間じられる
声音でリンが肯定の言葉を返す。

「そうです!」

お兄様は史上2人しか確認されていない臨戒者の3人目なのです。

「リン

「つまりサボってるフリして世界と繋がって世界の逝く末を見守ってた！

って事？」ソラ

「そうです。

勿論何時もと言う訳では在りません、何時もで在るならこの様な事態には陥ってはいませんから。

更に言わせて戴くと臨戒者は下手に魔法を使ってしまうと周りに魔力汚染を起こしてしまいます。

結果として貴方は亡くなっていた可能性が高いでしょう。」「リン

魔力汚染・・・

強い魔力が周囲を汚染し周辺空間に影響を与え最悪の場合生物の命を奪う事。

「でも、世界と繋がるって具体的にはどんな感じなのイメージ湧か無いんだけどさ。」「ノバア

確かにその通りである。

何しろ記録に在る分だけでは有るが臨界者について書かれた記録は僅か二人分だ、それも具体的な内容は一切無い。

解ら無くて当然なのである。

「その点に関しては完全に禁忌に触れます。

聞く覚悟がお有りならお話ししますが、いかがなさいますか？」

リン

その言葉を聞いてソラ達は表情を硬くする。

聞かない事にしたらしい。

「そうですね。」

では、機会があればお話しさせて頂く事に致しましょう。「リン

そこでこの話しは終わった様だ。

ちなみに臨界者が世界に繋がる事をフロルドはイマジナリーリンクス幻想連結と名付けているが、普段は省略してイマジンやリンクと呼んでいる。

この状態は言ってみれば空気中の情報化したマナを読み取り、そのマナが持つ情報全てを分析、処理して引き出したり、その逆で読ませたり書き込んだり出来る。

ただし、それはつまり時間と言う概念が生まれてからこれまでに貯めた情報とこれから起こる情報を処理しろと言っているのと同じだ。通常処理ふつうしきれる物ではないのである。

だからこそ今だかつて臨界者は数える程しか居らず、その記録も少ない。

もたらされる情報を処理仕切れずに発狂狂ってしてしまい臨界者到達後の記録は総じて他人からの観察記録に近く臨界者本人が記録した物は実は存在しない。

発狂してしまう事も有って臨界者は総じて早死にしている。

仮に臨界者級に達しても永くは生きられ無いのだ。

そこまで話、リンは自分が取り乱していた事に気付き少し間を置いた。

それを見たメイリンが問い掛けた。

「ねーリンちゃん。」

ソラちゃんは貴女の敵何かたきでしょう。」

「そう成りますね。」リン

「じゃあ〜どうして〜さつき〜ソラちゃんを〜怨む〜って〜言っ
て起きながら〜手を〜挙げないの〜?」メイリン

その一言で場が凍り付く。

得にソラは自身の問題で有るため父のした事を知った時よりも更に
血の気が引き蒼くなった。

最早その目は虚るで何を見ているのかさえ判別できない程だ。

復讐されればソラに防ぐ術はない、また、彼女には復讐する権利も
あるのだ。

「リンちゃんは〜SSか〜SSSSクラスぐらいでしょう?」
デュオ トリオ

それとも〜もっと上かな?」

何にしても〜ソラちゃんに〜お仕置きするのは〜簡単でしょう?」

!」メイリン

だがリンの反応は全員の予想の斜め上を示す。

「お仕置き……してほしいのですか?」

して欲しいのならば…….…….

出来ればしたく無いのですが…….…….」リン

どうやら言葉のままに捉えたらしく見当違いの言葉が帰ってくる。

どうやら見た目どりのお嬢様おっとりしたな性格の様だ

それに呆れ混じりの声が還る。

「……そういっじゃ無くて。」

復讐しないのかって意味だよ?」ノバア

「復讐ですか？」

そのよう事をしてどう成るのですか。

ソラさんにそのような事をしても意味を成しませんよ。

お父様達の件に関わって要るならそれも良いでしょう。

しかし、先程の問答で関わりが無いのは確認できましたから。

それでも復讐を行うとすれば、哀しみを増やすだけで価値など有りません。」リン

そうはつきり言い切ってソラを見つめた。

ソラの青ざめた顔を見つめながらリンは、

「たしかに先程、私は怨むと口にしましたが……。」

私は貴女の家族で実際に手を汚した方を怨んでいるのです。

つまり貴女には何の怨みも有りません！」

そう言い切る。

それを聞いたソラは顔を上げ真剣な眼差しでリンに、

「ゴメンナサイ！」

何も知らなかった事も！

家族が犯した誤ちも！

それ意外のリンさんの家族に対しての罪も！

謝って済む問題じゃないけど。

でも！

それでも！

今の私には謝る事しか出来ないから……。

本当にゴメンナサイ！！」

そう言つて涙を流しながら深々と頭を下げた。

それにリンは無言のままゆっくりと頷いた。
その後メイリンの提案で暫く休憩を取る事になった。

全員が落ち着くまで休憩を取った後、リンはいよいよ本題の説明に入った。

第6章 く邂逅・現実を見つめながら・・・？（後書き）

前書きでも書きましたが2011年最初の更新です。

初登場のリンちゃんも早速重い過去を他人に暴露しちゃってますが
考えなしでは無いので悪しからず。

では今後の展開に期待してくれている方もそうでない方も取り敢えず、ハッピーニューイヤー！

出来ればまた次話でお会いしましょう。

第7章 へ 転換・現実を見つめながら・・・・・・・・・・へ (前書き)

短いです！すみません。

第7章 〱 転換・現実を見つめながら………？

リンがハース達に接触したのと同じ頃クロス共和国の最高意思決定機関である十字議会が始まっていた。

十字議会は選挙で選ばれたクロス国民10名による議会だ。

しかし今回の議会には先日の進攻で指揮を執っていたバンが参考人として招かれていた。

まず沈黙を破ったのは議長のライト・ライトだった。

「……バン將軍！」

今回の失態について何か弁明はあるんか？」

「有らへん！」

フロルドの力を読み違えたワイの凡ミスや！」バン

質問に胸を張って答える態度はむしろ清々しい物が有る。

「將軍はエレメントマスターの力をどれほどの物と考えていたのです？」

そう今度はリプレ・スタッカートが聞いた。

「年齢から魔力はSSデュオの上程度、後は技術で補つとると思てた。

実際潜入してからの派閥の指揮っぷりはワイらより上やったしな。

あの手の人間は力より技で戦いたがるさかいな。

技術が高いと判断して待機しとったし対応もそれを基準に組んどった！」バン

「でも実際はそうは行かなかった。」リプレ

「そや！」

実際にはフロルドの力は明らかにSSSSクインテットクラスの魔力は有ったさかいなあ〜！」バン

「そ〜かそないに凄い力を秘めとったか。」

何処か嬉しそうに聞こえる口調で答えるライト。

「・・・手駒に出来れば話は早いけど！」

そう今度はジーン・ヒューズトンが言った。

それにカタロス・サイトが素早く反論する。

「無理だな・・・。」

「判ってます！」

それくらい。

ただそうなれば苦労せずに攻め込めると言うだけの話です！「ジーン

「たしかに楽は出来るやろけど・・・」

それやと後が怖いで裏切る可能性高いわ！」ライト

「皇帝の娘のエリシエール・A・S・マークライトを人質に出来れば可能でしょうが・・・」

それも難しいでしょうね。「リブレ

「エリシエールを人質に？

意味が無いと思うけど？」カタロス

「いやフロルド・Y・F・ランフォードとエリシエール・A・S・マークライトは両想いや。

フロルドはエリシエールを守る為に死にかけたぐらいやからな。

せやけどエリシエールはエリシエールでフロルドの足引っ張るん嫌つとるっばいから……。

人質為るくらいやつたら死ぬやろな。」バン

「……それや！

それ利用しよ。」

そういつて議長ライトは笑った。

それに木賀^{「ガ・ヤヒ」}・弥彦が問い返す。

「利用……ですか？

一体何を想い着いたのです。」

「その前にバン。

皇帝は確か人の心が解らんど阿呆やったな？」ライト

「？

ああ……そうやで。

それがどないしたんや？」バン

「んでフロルドは皇帝とは反りが合つとらん感じやねんな？」

「せや。」バン

そこまで言うとライトは悪戯を思いついた子供の様に目を輝かせた。その様に少々呆気に取りられながらもヤヒコはもう一度問い返した。

「ライト、一人で納得しないで思い着いた策を教えてください！」

「あゝ。スマン！スマン！」

何も難しい事あらへん。

暫くほつといたええだけや。」ライト

「はあ・・・？」

ほおっておくんですか？」全員

「せやほつといたらええねん！」

そんで後は皇帝が協力を渋つとるはずのフロルドに接触するやろ
う。

当然、エリシエルを人質にして戦いを強要するのはほぼ間違いない。

その後エリシエルを保護したつたらフロルドはワイらに協力する。

最悪でもこの戦争には介入せんなるやろ。」ライト

「それほど上手くいくでしょうか？」

今度はシーマ・V・オーガストが問い返す。

「どつちみちワイらにはフロルドを止めれる戦力なんざあらへん！
せやつたら一発賭けてみんなのおもろいやないか！」ライト

「賭け・・・ですか。
政治家の台詞では有りませんね。
ですが・・・。」

先の進攻の際帝国は我が国の進攻になすすべも無く町一つを落と
されている。

その事が皇帝に焦りを与えていれば・・・。

このまま睨み合いを続ければそう言った事態は十分に有り得ます
ね。「シーマ

「仕方ないか。

それで行きましょう。」

バン將軍引き続き軍の指揮をお願いします。
皆さんもそれで良いですね!」「ヤヒコ

その問いに全員がうなずき同意する。

「ほな龍翼將軍バン殿よろしゅう頼むで!」「ライト

「その異名なで呼ぶなや!

恥ずいかな・・・。」

まあええわ。

ほちほちやらして貰うで。

期待はせんといてや〜。」「バン

「そうします。」

本日の用はこれで終わりです。

お疲れ様でした。」「シーマ

「ほな失礼するわ。」「バン

「喰えない人ですね・・・相変わらず。」

バンが去った後和田山・栖羅堵ワダヤマ・スラドがそう言った。

「それはそうでしょう。」

あの方は我が軍が誇る五鬼将の筆頭。

龍翼の名を与えられた智将なのですから。

そうそう本心など覺らせては頂けないでしょね。」

そう何処か誇らしげに言ったのはバンの妻で十字議会議員でもある
アカネ・W・フェスタ
紅音・W・フェスタだった。

ちなみにバンのフルネームはバン・M・フェスタである。

「何にせよ今日は此処までや。」

ほな本日の議会はこれにて閉会とする！

「苦勞さん。」ライト

そう言っって十字議会は幕を閉じた。

第7章 へ 転換・現実を見つめながら………? (後書き)

メインサイドの補助ストーリー的な意味合いが強い章です。

ただこの章は簡潔に書いていますが本当はもつと力を込めるべき章
だったりしますが作者の都合で余りいじってません。

この章は余力を込めるとネタバレ必至なんですスイマセン、ほん
とスイマセン。

と言う事で余り良くない後書きですがまたお会いしましょう。

第8章 く邂逅？・乙女心と真実と誓い

場所はかつてのティターニア家跡に戻る。

リンはまず改めて自己紹介をし直す事にした。

「では改めて自己紹介致します。

私は虹の派閥、第83独立女性魔法騎士部隊、戦乙女隊バルキリーに所属しております。

バルキリー隊は全10師団存在し、各団50人で構成されています。

私はその内の第3師団に席があり、その師団長をさせて頂いている。

リンデイス・N・F・ティターニアです。

桜剣舞のリンデイスの異名で呼ばれていますね。」

「師団長！

その上異名持ちって！」5人

異名持ち………

異名はSSSトオトランク以上の高位術師の中でも特に特徴的な術士に与えられる。

高位術師の中でも極一部の非常に優秀な術師しか持っていない為、異名を持つ事は一般術師からすれば一種の恐怖の対象で有ったりする。

虹内部でも30人程度しか存在しない事もその原因でもある。フロルドや四皇も当然異名持ちである。

「それほど驚か無くても……。」

わたくし私の異名などたいした事など有りません。

……話しを戻しますが私の魔法ランクはSSでデュオ武術ランクはSSSスキル。

ランクアベレージはSSSトシオとなっています。」

ランクアベレージ……。

術師としての能力を示すもので一般に知られる術師のランクはランクアベレージ（以下R・A）である。

R・Aは魔法ランク（以下M・R）と武術ランク（以下S・A）の平均値で示される。

例えばM・RがDランクでS・RがBランクならR・AはCとなる。またM・RがAでS・RがBならR・Aは低い方に評価されBになる。

M・R、S・R共にランクの選定はR・Aと同じDクインテットSSSSとなる。

5人は軍学校の関係者であったため当然ランクの概念は知っていたがメイリン意外この場では全員が同世代。

ましてリンはどう見ても年下にしか見えない。

そんな少女のランクが自分達より遥かに高い。

その事実に変更して衝撃を受けていた。

「……R・A、SSSトシオか……。」

学園の首席取るような人でもAか天才扱いされる生徒でもSシロランクが良いと何だけどなく。「ジン

「そうね。」

その天才扱いされる生徒の遥か上何て。

・・・我が幼なじみながら呆れる程の超天才ぶりね。
才能無いなく私。」ソラ

そう少し寂しそうに呟いた。

「私わたくしの力ちからは私わたくしの才能で得た者では有りません。
お兄様の指導に依るものです！」リン

ソラ達の若干落ち込んだ態度に少々慌てたリンは慌てて追加で自身の事を補足する。

「フロルド・・・様の？」ハース

「はい！
私達わたくし・・・青の翼。

お兄様が創った孤児院の名前ですが。

そこで暮らす子達は皆、お兄様からその子一人づつに合わせた指導を受けます。

その子の意思にも選りませんが眠っている才能に合った訓練を積み
せて頂けるのです。

結果、短期間で才能が開花していきますね。

勿論魔法や武芸以外にも炊事や鍛冶、行商等に関する事を学んだ
子も居ます。」リン

「そんなに色々な事を一人で教えてたの？」ノバア

「そうです。

・・・と言いたいのですがお兄様はお忙しい方ですから。
ほとんど独学ですね。」リン

「独学ならっやっぱりっリンちゃんのっ才能だよ。」メイリン

「いいえ！」

確かに独学なのですが・・・その時に使った物から言っつて完全な独学とはとても言えません。」

そう少し申し訳無さそうにリンは顔をしかめた。

「どっいっ事っ?」メイリン

「武芸は別なのですが、それ以外はお兄様が個々人に最も適した教本を用意して下さいますし。」

武芸はそれぞれ近いタイプの人を集めてそれぞれに合った武芸の師を雇っつて下さっつていますから。」リン

「それもう完全に軍学校じゃん!」ノバア

「軍学校と言っつよりは全寮制の総合学習塾とっつた所ですね。」

そう言っつてリンは苦笑した。

それにソラは・・・。

「・・・ずるい・・・!」

と小声で抗議したが、それを聞いていたノバアは意地悪い笑みで。

「フロルド様に手取り足取り指導して欲しっかつたな。」

Byソラ。

なっんて思っつてるんでしっよう?」

などとソラをおもちやにし始めた。

「うん！」

「……………って、何でそうなるのよー!」「ソラ

「図星なんだ」。ノバア

「だか……違うわよ。

そっ……そうよ違うわよ!

さっきのは単にそんな良い環境で勉強できるリンが羨ましかっただけよ。」「ソラ

その抗議の声にリンは、

「環境は確かに良いのですが……。」

と言葉を濁した。

「何かあるわけ?」「ノバア

「はい。」

ソラさんの言う通り物事を学ぶ環境はとても良いのですが……。
私達^{わたし}は皆、お兄様と同じく全員が身内を無くすと言う悲劇を経験
しています。

また孤児が高度な知識や技術を持つ事は余り歓迎されません。

特にエリート集団である虹の幹部や貴族、豪族といった所の出身
者は快く思っていないません。」「リン

「良〜くある〜話だよね〜。」

だとすると〜嫌がらせとか〜妨〜害とか〜日っ常〜的に〜有るん

だね。」「メイリン

「そうですね。

特に孤児院には小さな子達や年頃の女性も大勢暮らしていますから。」

その子達を護りながらの訓練は想像以上に大変です。

わたくし私も昔襲われかけた事があるほどですので。

それを踏まえればその困難さは想像出来るのではないですか？」

リン

「そうだね。

確かに想像できる。

・・・でも今、勸進なのはソラのフロルド様に対する感情気持ちなのよ！

取り敢えずソラがフロルド様LOVEなのは確定したけど・・・。

まだまだ肝心な事は何一つ判ってないんだから。

さあソラいい加減白状しなさい！」ノバア

その台詞にリンは困惑して言葉を無くした。

ソラはソラで真っ赤になりながら否定するがノバアは学園での質問責めを再開し始めていた。

それを見たジンとハースはノバアに制止をかける。

「ノバア！」

「今はソラの好きな人が誰か何て事関係ないんだから後にしろ!!」
ハース

「何ですよ？」

本当はジンだってその当たりはつきりさせて欲しいんでしょう!」

ノバア

「なっ！」

何でオレが……。

そんなの関係ないだろ！」ジン

「言っちゃて言い訳。」ノバア

そう今度はジンに勝ち誇った顔で耳打ちする。

「いつ、言っちゃてって……。
なっ。」

何を……だよ？」ジン

「勿論。」

ソラに「ジン君は、貴女の事、

好っき！」

だ〜って。」ノバア

ソラは何処からどう観ても可憐なお嬢様なエリシアに対して、
少々キツイ所も有るが面倒見の良いお姉さんと言った風で後輩（特
に女性徒）からの人気が高く。

クラス内でも男女問わず人気がある。

更にソラはエリシアに負けず劣らずの美少女でスタイルだけならエ
リシアより数段良かった。

その上成績も学年でトップクラスと正に三拍子揃った女性だ。

ジンはそのソラに惹かれている事をノバアは知っていた。

「やっ！」

やめろ！」ジン

「やめてください。」

ノバア様！

でしょう。」ノバア

「たっ頼むから止めてくれ！」ジン

「だから。」ノバア

そこまで言った所で気圧され気味だったハースとリンが怒鳴り付けて二人を止めた。

「いい加減にしろ！」ハース

「いい加減になさい！」リン

「時間は限られています。」

今はその様な事に時間は裂けませんので話を進めます。」リン

その剣幕に圧されジンとノバアはたじろぎながら頷いた。

リンは見た目は兎も角、中身は凄まじく強い。

その覇気は一般人には十分な抑止力に成るのだった。

しかし意外な人物がその意見を否定した。

「待って！」

そう言ったのはノバアの追撃から逃れた事で冷静さを取り戻したソラだった。

「えっ？」リン・ハース

「ちょっとだけゴメンナサイ！
これ以上話の腰を折らせる訳にはいかないのは解るけど・・・。
何か違和感があるの！」ソラ

その意見にリンは感心しなから続けさせた。

「違和感とは？」

「此処には私達6人しか居ないはずよね？」ソラ

それにメイリンが頷く。

「なのに他にも人が居る様な気がするのよ・・・。」

そう言ってソラはリンを見た。

リンは目をつむり少し思案してから、

「皆さん、もういいですよ！」

そう周囲に呼び掛けた。

それに合わせて周囲から影が伸びた。

そこに居たのは明らかにまだ10歳にも為っていない子供を含んだ
複数の人でその数は50人近くもいた。

「こんなに人が・・・！」

そうリンとソラ以外の4人が言ったが2人は無視して話を始める。
まず口を開いたのはリンだった。

「何時。

「気付かれたのです？」

「此処に来てすぐに視線は感じてた……。でも逸れよりもこの場所の方が気になっちゃってそっちをまず聞いたの。」

でも……。

その後の話の内容が衝撃的過ぎてノバアが変な話を振るまで忘れてたのよ。

それでこの人達は一体誰？」ソラ

「この子達は私の義弟、義妹達です。」

つまり皆、孤児院に居る孤児達ですね。

孤児院では私が最古参の院生に当たります。

院では年齢に関係なく永く院で生活している方が年長者扱いされています。

その為、私が此処では長女と言う事になります。」リン

「どうしてそんな子達が此処に？」ハース

「そんなん孤児院を脱出した言う以外考え様ないや無いか！」

そう言っつて割っつて入った関西弁の男はガゼル・ジオット。

リンと同じ年の青年で虹の派閥と友好関係にある騎士団・紅蓮クリムゾンに所属する孤児院育ちの騎士だった。

「ガゼル！」

今、割っつて入られると話が複雑化します。

申し訳ありませんが黙っていて下さい！

まったく、そういう所が有るのでお兄様は議会などに貴方を連れて行けないのです。

よくお兄様が、

『貴方のそう言った所が治れば騎士としてもっと伸びるのに!』

と嘆いておられるのは貴方も知っている筈ですよ!」「リン

リンのガゼルに対しての第一声にソラは面食って目を丸くしていたが当のガゼルはまるで他人事のようにリンの話を見殺しに続ける。

「そんな怖い顔ばつかしとると兄貴に避けられるんちゃうか!

それで・・・オレはガゼル・ジOTT。

紅蓮騎士団所属の騎士様や。

よろしゅう頼むで。」

「大きなお世話です!

それとこれ以上邪魔をしないで下さい。」

そう言ったリンの目は据わっており。

それを見たノバア達は完全に畏縮してしまっていた。

「リンデイス。

兄ちゃん達怖がってしもたで!」ガゼル

それを聞いてリンは自分の態度に気付き少し頬を赤くしながら咳ばらいをして話をもどしに掛かった。

「コホン!

えー。

この子達が此処に居るのはガゼルが言った通り孤児院を脱出したからです。」

それにジンが

「何で脱出なんかしたんだ？」

そう聞き返した。

「それはね、さっきリンちゃんが言った、フロルド君の派閥での立場のせいね。」

孤児院は派閥にとって目の上のたんこぶだったのね。でもフロルド君って後ろ盾が無くなったからね。

何時も鷹派の標的に成ってもおかしく無かったってことね！」

そうメイリンが説明した。

それに静かに頷きリンはゆっくりとした口調で一つの事実を告げた。その事実にはソラは人生の選択を迫られていた。

しかし同時にある人物にとっては此処までの展開は予定通りであった事に誰一人気付いていなかった。

そのどす黒い思想と共に……。

第8章 へ邂逅？・乙女心と真実と誓いへ（後書き）

早速ですがソラちゃん滅茶苦茶遊ばれてます。

書いてて少々可哀想に成りました（でも、止めない）。

しかし、ソラちゃんは進行上、非常に重要な人なので多少虐められるのは仕方無い（登場期間短い人達の意趣返しだ！頑張れソラ）。

てな、章ですが他にも展開上の設定も書いてます、徐々に激動の展開が始まる・・・筈（疎覚えの記憶なので「確認してません」間違ってたらすミマセン）。

では次の更新でお会いしましょう。

第9章 く進むべき道・師（マスター）と逆らう少女（前書き）

インフルエンザに掛かってしまい暇だったので急遽更新です。

第9章 く進むべき道・師（マスター）と逆らう少女く

「私は……………」

そこまで言ってからエリシアは少し間、瞳を閉じながら黙考に浸る。しばらくの後、強い意思の籠った目で真っ直ぐフロルドを見つめながらハッキリと少女はその言葉を告げた。

「サヨウナラ！」

私は皇女としての職務を真つ当しようと思えます。

私なんかは何が出来るか解らないけど。

それでも！

フロルド君はずっと魔眼の持ち主としての役割を全うしてきた。

でも私は逃げてばかりで迷惑ばかり掛けて、このまま役たたずで終わりたいくない。

だから、私も自分の運命に精一杯立ち向かってみる！」エリシア

その答えにゆっくり頷きながらフロルドは言葉を返した。

「それで、良いんだな？」

力強く頷くエリシアを観ながら。

「エリシアなら必ず自分自身の運命を乗り越えられるだろう。

その時にオレの望む未来がエリシアの望む未来と同じ事を祈っている。」フロルド

「未来が同じなら……………」

その時には聞かせてください！

私は貴方が好きです！

愛しています！

だから・・・私とずっと一緒に居て支えてくれませんか？

今は返答しないで下さい！

今の私は答えを聞く資格なんてないから。」 エリシア

暫し目を丸くして沈黙したフロルドだったが直ぐに頷きその言葉を口にした。

「・・・サヨナラ。」

次に会うのを楽しみにしてる。」

「サヨウナラ！」 エリシア

そう返って来た直後にフロルドはその姿を消し、エリシアはその目に大粒の涙を湛えながらその場に座り込んでいた。

その光景を暫く呆気に取りられて見ていた皇帝とガイアだったが落ちて着いてくると皇帝は怒りをあらわにし始めた。

「エリシエール！

お前は自分が一体何をしたか判っているのか！」

その顔はまるで鬼、悪魔で在るかのような凄惨な表情で同時に絶大な凄みを放っていた。

そんな顔を向けられればこれまでのエリシアならまず間違いなく恐怖で動け無くなっていただろう。

しかし今のエリシアにはその気配は全く感じられない、むしろ皇帝を無言のまま真っ直ぐに非難の籠った眼差しで射竦めていた。

その様子にガイアが問い掛ける。

「お嬢ちゃん。

自分に出来る事と言ったの？

それに民の平和を差し出す事に成っても構わんのかね？

フロルドの帝国よりの離反は即ち、この国にとって衰退を意味するのじゃよ？

解っておろつ。」

ガイアの問いは為政者として当然の問いだったがそれだけにとっても重い問いだった。

その問いにエリシアは僅かな戸惑いすら見せずにハッキリと自分の意思を伝える。

「民の平和を棄てるつもりは初めから有りません！

確かに戦争状態のこの国で最大戦力であるフロルド様を手放すのは愚策かも知れません。

民の平穩を捨てていられると言われても仕方有りません。

それでも本心から民の平和を望むと仰るなら。

国と言う小さな器に留めて置くべきでは無い方だと私は思います。

総帥様も気付いておられるはずです。

あの人の未来に繋がる力と可能性に！」エリシア

そう言った少女の顔は先程までの少女の物では無く一國を背負う女帝、女王とも言うべき為政者の顔をしていた。

その言葉と表情に込められた決意と意思を見て取ったガイアは自分の孫程の子供が本気で国の為にその将来を捧げるつもりで要る事を悟った。

そのため何も言え無くなり沈黙した。

それと共に皇位の交代が近い事を感じ取った。

エリシアのカトレアでの皇位継承権は13位。

ハッキリ言って皇位継承には絶望的と言っても良い位置に居る。

しかもエリシアの実母マークライト家の皇后は皇帝の側室。

その中でも特に地位の低い一族の出身である。

新しく正室との間に子供が出来れば更に継承権は落ちる。

事実エリシアはフロルドから自分が皇族であると聞かされるまでその事実を知らなかった程だ。

更には世間一般には名前は知られてはいないが一般人に汚された皇女と世間では噂されている。

そんな人間を次の皇帝に……。

などと言う事は体面を気にする権力者の体質から言って有り得ない事だ。

それでもガイアは次の皇帝にはエリシアを押しすところの瞬間に決意した。

ちなみにエリシア以外の皇族は血筋こそ良いがその才格はぬるま湯育ちも相俟って平凡かそれ以下だった。

希代の天才と呼ばれたエレメントマスター。

それが地位を捨て命まで賭けて護衛し（勿論、恋慕の情もあったが）、去り際までその身を案じ続けたエリシアと比べるとその才は雲泥の差であった。

一方、今まで周りに流されるだけだった気の弱い少女に良いようにあしらわれた皇帝はガイアの問いが終わると怒り狂い始めた。

「エリシエール！
貴様側室の！

我が娘の分際で！

良くも父たるこの私の邪魔をしてくれたな！」 皇帝

その顔を冷ややかに見つめながら。

「処罰されますか陛下？

私はそれでも構いません！

処罰されればフロルド様は私と言う枷から解放される訳ですから。
ですが・・・、その様な事態を陛下はお望みでは無いでしょう。
フロルド様のお怒りを請ける事はそのまま帝国の滅亡と繋がりますので。」

そう言い切ったエリシアの目は哀れみを色濃く映し、淡く清んだ何処かはかなさも含む輝きを放っていた。

一方皇帝のその目はエリシアが一言一言発する事にまるで火に油を注ぐかの様に怒りの色を濃くしていった。

その怒りは辺りを飲み込むかと思うほどの闇を発して要るかの様な禍々しさがあった。

その怒りの籠った眼光は邪気や殺気と言った負の気配を強く発していた。

逸れでもこの場に在るのは大国を納める皇帝。

例え怒りで我を忘れていようと頭のキレははずば抜けていた。

瞬時にフロルドに悟らせずエリシアに一生残る傷と屈辱と苦痛を与える方法を理性的では無いにしろ考え出し大きく口元を歪めて。

「・・・看守！」

「看守！」

そう叫んでいた。

皇帝の命令を聞き付けた看守達が集まって来たのは逸れから直ぐの事だ。

元々フロルドが牢を壊した時の音で人が集まりかけていたためだ。看守達を確認すると皇帝は、

「この小娘を！」

「反逆者を捕らえよ！」

そう命じた。

一方、ガイアは皇帝が看守を呼んだ時点で決断を問われていた。勿論、『エリシアを時期皇帝に押す。』

と、決めた時点で決まっていた。

・・・しかし、このままエリシアを庇えば後にエリシアを庇護する者が居無くなる。

それが最大の問題だった。

『さてどうした物か・・・。』

そう試行錯誤を開始したガイアに念話が届く。

『・・・聞こえますか？』

マスター。』

それは他でも無いフロルドの声だった。

『聞こえておるが・・・』

今はお前に構っておる暇は無いわい！』 ガイア

『その様子だとエリシアの才が開花した様ですね？

どうせまだ自分の立場、才能に等の本人は気付いて無いのでしようが。

そのせいで勢いにまかせて皇帝に喧嘩売ったんでしょね。話を戻します。

その様子だとエリシアの後ろ盾になって頂けるのでは無いのですか？』 フロルド

『まさかこうなると読んでおったのか？』 ガイア

『ええ、この程度の事態は想定済みです。

それでお願ひしたい事があります。

去り際に彼女に渡したネックレスに魔力を注いでもらいたいのです。』 フロルド

『ネックレス？

魔力を注ぐ？

魔道具かね？』 ガイア

『はい。

必要な設定はこちらで行っておりますので魔力さえ注げば条件が揃います。

それでゲートが発動します。』 フロルド

『いつの間にそんな物を？』 ガイア

『エリシアが舌を噛んだ時です。』

詳細は省きますが・・・。

今、それはエリシアの左手首に巻いてあります。

後はほんの少しオレ以外の者の魔力に触れれば発動します。

転移後はオレの犯行だと言えはお蔵入りです。』

そうフロルドが言い終わる前にガイアはゲートを発動させていた。

それと同時にフロルドが派閥に復帰する事があれば総帥の座を明け渡そうと派閥にも世代交代が必要なのだと感じていた。

一方フロルドはクロスに居た。

敵国の首都に。

本来なら味方であるリンデイス達と合流すべきではあるがフロルドはリンデイス達の元にはエリシアを合流護衛させる事を選んだ。

そして自身は逃亡という形で身を隠し。

かつ情報収集も行っ事を選んだ。

それはフロルドのその出身と若さ故に派閥の幹部から前線で手柄を建てない様、派閥内に軟禁状態であった事（エリシアの護衛任務はそういうった意味合いが大半を占めている）で対外的に顔が割れていなかったためだ。

またもう一つの理由はクロスが軍事行動を開始した場合の対処だ。

今までフロルドという存在が軍事行動を抑えていたが逃亡を開始した事でクロスが動いた時その動きを牽制止めるするためだ。

「さてと・・・。」

そう呟いたフロルドは身を隠していた路地裏を出て情報収集を開始する為、繁華街を目指して歩きだした。

〔繁華街〕

繁華街は既に多くの人で賑わっていた。

その中でも特に人垣が出来ている場所があった。

繁華街の名物とでも言うべきイベント。

喧嘩が始まるうとしていたからだ。

フロルドはその様子を観るために人混みを掻き分けて進んだ。

勿論、普通なら野次馬に見える行為だがフロルドの逸れは違っていた。

喧嘩でその国の戦力がある程度予想する為だ。

何故と思つかも知れないが繁華街での喧嘩は酷い物では軍が鎮圧に入る。

その為どのぐらいで軍隊が動くかで軍の強さを予想出来るからだ。

しかし予想以前に一人が強すぎた4対1だと言うのにフロルドが着いた時には男は何事も無かったかの様に悠然と立ち尽くしていた。

「……つまんね。」男

そう呟いて現場を立ち去ろうとしていた。

その男をフロルドは知っていた傭兵として名を馳せている男だ。

男の名はケイオス・クーカイ。

異名を持つ

”鬼人”と呼ばれている男で気に入った雇い主にしか力を貸さない事で有名な傭兵で金では動か無い事でも有名な男だった。

ケイオスを見つけたフロルドはケイオスを追う事にした。

ケイオス程の実力者なら尾行には直ぐに気付く事は予想出来たがそ

れでもケイオスがクロスは勿論の事だがカトレアに就く事も避けるべき事柄で欲を言えば。

『エリシアの下に就いて欲しい!』

と言うのが本音だが当面は両国からケイオスを引き離すか決別させる事にその意識を集中させる。

尾行を始めてすぐにケイオスは裏路地に入る。

それを追いフロルドは周囲の様子を伺いながら進むが暫くしてケイオスがその歩を止める。

『やっぱりバレてたかな?』

そう思いながら様子を見る。

間もなく明らかに変装していると判る二人組の男がケイオスに話し掛ける。

どうやらこちらはバレていないか暫く様子見ととれる対応をされるがこちらからは逢えて何もしなかった。

それから直ぐに交渉の始まりとなったが・・・。

ケイオスはどうやら今回の依頼には気が乗らなかった様で依頼は断ったようだ。

その事実に対し安心するがまだまだ安心するには早い状況に変わりは無かった。

依頼人が立ち去ってからフロルドは実際に自分達の為の交渉を開始するため行動にでた。

その行動は単純だが最も明確で誠意ある行動とも言える行動だった。

事前に尾行さえ行っていないければ!
である。

「ケイオスさん！」

「少し宜しいですか？」フロルド

「誰だ？」ケイオス

その問いは当然だったがフロルドは逢えて直ぐには名乗らず謝罪の言葉をまず続けた。

「その前に謝罪させていただきます。

先程から貴方を尾行・監視させて頂いていた件です。

正直ばれている事を前提とした尾行でしたが。」フロルド

「ばれていると知っていて尾行を行っていたっか！

では、名の前に聞いておこう！

先程の男達はこの国の軍人だ！

もしオレがあのお男達にあの時雇われた！

もしくはお前が姿を現すのを待つ為の罠だったとしたらどうする
？」

そう言つてケイオスは不敵に笑つた。

それに対しフロルドもまた笑みを返しながら返答した。

「前者はともかく後者は有り得ないですよ！

何故なら貴方の様な名の通つた傭兵がごそそ尾行する様な相手をわざわざ罠に掛ける必要は無いですからね。

それと前者だった場合はその場で貴方にはこの舞台からは引き上げて貰うつもりでしたね。」フロルド

その言葉は事実上の挑発だがケイオスも名の知れた傭兵だけにその

辺りは当然の様に聞き流す。

「では軍人2人とオレを敵に回すつもりだったんだな？」

それに頷きながらフロルドは話を続けた。

「ここまで言えばもう気付いた筈だけど余りこんな場所に永くは居たくない。」

ついて来てくれるな？」

「良いだろう！」ケイオス

その言葉と同時にフロルドはその場から移動を開始した。

着いたのは郊外にある廃寺院だった。

そこで改めてケイオスと対峙しながらフロルドはケイオスに自分の所属と名を名乗った。

但しその言葉には詠唱破棄と遅詠呪文で忘却の魔法を上乗せしてあった。

「さてつと。」

オレは元カトレア、虹の派閥所属ランクSSSS。

エレメントマスターと呼ばれていたフロルドだ……。

最もさつきも言ったが今は元、虹の構成員でカトレアと虹の両方から追われる身だかな。

その辺りの理由についてはこの国でももう噂に為ってるんじゃないか？」

それを聞いた瞬間ケイオスは心底驚いたと言わんばかりの顔をしたがすぐに元の不適な顔に戻っていた。

逸れでもやはり内心は困惑していたがその辺りは場慣れしているだけに傍目にはそんな様子は見せなかった。

「想像以上の大物だったな。」

だが生憎オレは傭兵でね。

報酬の貰えない仕事は請けない！

残念だったな。「ケイオス

「報酬？」

無いと思っっているのか？

だったら勘違いだ、心配するな。

勿論、働きに見合った報酬は用意するさ。

だが請ける請けないはオレではなく雇い主に会って決めてくれて構わない。「フロルド

「雇い主？」

お前では無いのか？」ケイオス

そう言っつて怪訝そうな顔をフロルドに向けるがフロルドはまるで見えてい無いかの様に振る舞いながら答えた。

「報酬はオレが払うがあくまで仕えるのはオレではなく会っつてもらおう相手だ。」

その相手が気に入ら無ければ前金だけで手を退いて貰って良い！」

「それほどの相手なのか？」ケイオス

「いや！」

お前を納得させれ無い様ならどちらにせよ目的には手が届かない。
それだけの意味での一種の試練。

と言った所だ。「フロルド

「ふん！」

流石は天才術師。

このオレを試験材料扱いか！」ケイオス

その言葉には明らかに怒りが籠められていた。

そんな様子に構う事なくフロルドは話を続けた。

「当然だ！」

仮にもカトレアとクロスの間起こった戦争に第三勢力として介入する事を決意した様なじゃじゃ馬だからな。

優秀な人材を傘下に引き込める位のカリスマ性が無いと話にもならない！」

その言葉にケイオスは目を丸くしたが続いた言葉に先程の様な怒気は無く嘲笑と侮蔑が込められていた。

「これはまた随分と大それたホラを吹いた物だ。

以前の貴様ならともかくそれ以外の人間にそのような事が出来るはずも無い！」

「そうだな。

確かにこの大陸において中立を貫いているエルフ族を中心とした亜人族の国であるイカロス共和国。

この国を除けばそれ以外の国は全てカトレアかクロスに属している。

それはつまり味方はいないと言う事だ。

それでもオレなら何とでもなっていたのは認めるが……。

それぐらいこなして貰わなければ困る！」フロルド

そう言いながらフロルドは踵を返し歩き始めた。

更にはその場に前金の500E（^{千ル}）（日本円で500万円）を置いた。

通貨単位……

この世界の通貨はすべて統一されていて国家間の通貨取引に換金の必要は無い。

また単位は上からイムヘムIH、グルエルGF、エE、ディノD、シエルC、バツB、エアAの9通貨で上から日本円でそれぞれ1億円1I、1千万円1H、百万円1G、十万円1F、1万円1E、千円1D、百円1C、十円1B、1円1A換算である。

また通貨はすべて紙幣で有り各国の物価から言えば一般人の日常生活にはEまでの持ち合わせで十分でありF以上は一般市場には余り出回る事は無い。

フロルドが前金をEで用意したのは市場流通の都合からである。

それを見たケイオスは

「前金と地図……それとも別の何かか？」

そう確認した。

「惜しかったな。

前金と暫く……まあ、3日ほどか……のオレの滞在先だ。

情報収集何かも有るからずっとは居ないけどな。」

そう言い残しフロルドは姿を消した。
一方、フロルドの姿の在った場所を見つめながらケイオは独り呟いた。

「・・・喰えない男だ。

エレメントマスター！。

・・・違うな、この国では確か・・・『マスター・オブ・キャスター』・・・か。」

第9章 進むべき道・師（マスター）と逆らう少女（後書き）

何時の間にかPV1000件ユニーク500件越えてビックリしました。

いやいや、この様な駄文にお付き合い下さっている喜徳な方々には本当に感謝しております。

話は変わりますが主人公腹黒いです。

この話だけで4人手玉にとってます、でも、本領の発揮はもうチョイ先です、ケケケケ（黒笑）。

さて、今後逃げたフロルド君は何を仕出かしてくれるんでしょうかね。

では、またお会いしましょう。

第10章 く分岐する未来・三人の天才、二人の出会い？く（前書き）

長いです。

書ききれそうに無かったので一段投稿しました。

インフルエンザに掛かってなかったらアップかなり遅くなってたかも知れません。

第10章 〱分岐する未来・三人の天才、二人の出会い？

「以上で説明は終了させて頂きます。

最後にこちらから質問させていただきます。

貴方はこれからどうなさいますか？

端的で結構です。

例えばこれを機に軍属となる、私達わたくしに着いてくる。

または学園生活を続けると言った物で構いません。」リン

一通りの説明を終えたリンとガゼルはそう言ってソラ達を見つめた。

それに真つ先に反応したのはノバアだった。

「その前に聞いときたいんだけど。

もしも敵対するって言ったらどうなるの？」

「どうもせへん。

どう足掻いてもあんたらじゃ俺らに敵わへん。

これまでも、これからもな！」ガゼル

「そう、感に触る言い方だけど事実だし仕方無いわね。

じゃあ、私は学園生活を続けるわ。」ノバア

次いでハースも答える。

「オレも学園に戻らせて貰うよ。」

「私は〱指導者として〱誰かが〱残る〱って言うなら〱貴女達に〱ついて行くよ〱。」

でも、誰も、行かないなら、教師を、続けるわ！
さあ、ソラちゃんと、ジン君は、どうするの。」「メイリン

そう言っつてジンを見つめた。

ソラがまだ悩んでいるのは確認しなくても判ったからだ。
その視線を受けてジンは一瞬思案した後リン達を見て。

「オレもあんた達と一緒に連れていってくれ。」

そう答えていた。

「じゃあ、私も、残るね。」

そのジンの言葉を聞いてすぐにメイリンはそう続けた。

それからリン達はソラの決断を待った。
しばらくの沈黙の後ソラが口を開いた。

「私は学園を辞めます。」

その一言だけで全員がリン達と行くのだと思いメイリンが、

「じゃ、行こっか。」

そう返した。

だがそれにソラが目をまるくして、

「どうして先生と一緒に？」

そう問い返し直ぐに勘違いさせたのだと気付くと、

「ゴメンナサイ。」

そういう意味じゃなくて、私は違う道を探して見よつと思つて。」

そう付け加えた。

それを聞いたジンは少々落胆したがすぐに、

「違う道って何か当てが在るのか？」

そう聞いてきた。

「無いけどしたい事って言うか、目標はある！」ソラ

「目標、ですか？」リン

「ええ、私は戦後の復興に尽力したい。」

私何かじゃ戦争は止められないし。」ソラ

そう苦笑しながら答えた。

それをハースは冷ややかに観ていた。

《所詮、世間知らずのお嬢様か》

そう心の中で呟きながら。

一方、リンは、

《お兄様の言った通りに為りましたね。》

と的確すぎる兄の予想に半ば呆れつつ聞いていた。

それから一週間の時間が過ぎた現在………。

ソラはリンと行動を共にしていた。

「でも、驚いたわ。

その後、リンが私について来るなんて思ってもいなかったから。」
ソラ

「そうですね。

私もわたくしこつも見事にお兄様の予見通りでなければ貴女がこれから何をわたするのくか気にもしなかった筈です。」リン

「でも、良かったの？

ガゼル君達をほって置いて？」ソラ

「問題ありません。

ガゼルは、行動こそいい加減ですが、戦力としては申し分ないですすから。」

それと指揮は私の副官わたくしでも在ったフィルにとって貰っていますか
ら。」リン

「フィルちゃんって別れる前に話してた子だよね？

強いの？」リン

「強くはないです。」

基準は虹内部ですが……。

ただ、ファイルは戦闘面ではなく指揮、策謀面に置いての才が抜きん出ています。

とても10才とは思えない指揮、軍略を披露してきた天才軍師です。すからね。

ですので全く心配いりません！」リン

「天才軍師……。

それでも、まだ子供でしょう？

寂しがったりしない？」ソラ

「しますね。

私はあの子の母親同然ですから。」リン

「だったら！」ソラ

「ですが、その分合流した時には思っきり甘えさせてあげます。」

リンのその時の顔は正に母親の顔だった。

そんな会話をしながら二人は水中都市『オスティア』の町を図書館に向けて歩いていった。

ただ問題はこの町は国内最大の図書館が在ると同時に水中都市と言う性質上、犯罪者が多く、また、二人が街中の女性と較べて郡を抜いた美女だったせいもあり図書館に着くまでに二人は両手で数えられないぐらいの犯罪者を捕まえる事に成っていた。

そのせいで図書館に着いたのは朝9時の会館直後に着くように宿を出たにも係わらず午後2時を廻ってしまっていた。

「図書館受付」

「その文献でしたらD-75の棚に在るはずです。」受付員

二人が捜していたのはかつての戦争、天災等の資料とそれの復興を行つた人物の資料だ。

理由はまず何をすれば良いか全く見当もつかなかったからだが。

二人はその文献の数を見て固まってしまっていた。

この二人は実は似たり寄つたりでかなりの勤勉家あり、本好きなのだが……この量は二人の許容量を超えていたのだ。

それでも二人は意を決して本の山に向かつていった。

それから暫く二人は図書館に通い続ける事になるのは言うまでもない。

二人が図書館で調べ始めた頃ガゼル達はエルフ族の町「カルタロツサ」に来ていた。

「ゴメンね、ナタルさん突然お邪魔しちゃつて。」フィル

「良いよフィルちゃん。」

「気にしないで。」ナタル

ナタルと呼ばれたエルフはこの町の長であるハイエルフで魔法に長け長命で知られるエルフ族としてはかなり若い部類に入る。それと余談だがエルフ族は名字を持たない。

「それで、こんな大所帯で訪ねて来たのはやっぱり、フロルド殿の件だね？」ナタル

「はい。」

事情はその通りです。

それをお願いしたい事が在って。「フィル

そこまで言つとナタルの妻のリリーが、

「そんなに緊張しなくても協力させて貰うわ。

この町は貴女達、蒼の翼とフロルド様には凄くお世話になっているのだから。」

それにカトレアとクロスの戦争はこの国にとっても目の上のタンコブだもの。」

それを聞いてフィルの顔が年相応の無邪気な笑顔に変わる。

その笑顔を見てリリーはフィルを優しく抱き寄せながら。

「ところでリンデイスちゃんはどうしたの？」

蒼は実質あの娘が管理していた筈よね。「リリー

「リンママは今は違う仕事で別行動してます。

ガゼ兄だけだと頼りないからって事で蒼には私が着いてますけど。」
「フィル

そんな話しをしていると突然目の前が光だす。

三人は咄嗟に戦闘態勢を取り外で待つていたガゼルも異変を察知して武器を構えながら入って来るとフィルを庇う様に前に出る。

それと同時に光は納まり、

「きゃう!」???

と言う可愛らしい悲鳴が響いた。

だが自分に対して向けられた武器を見てすぐに臨戦態勢を取り。

「此処で捕まったらまたフロルド君に迷惑がかかる。」???

そう呟いた。

だが当然フロルドの名が出たことで4人に空気ができた。

それを見た少女は踵を返し逃げ出したが後ろから掛かった一言で足を止める。

「兄貴の知り合い?」ガゼル

「えっ?」少女

それから暫く警戒を解こうとしない少女に事情を説明し少女の警戒を解いた。

「ゴメンナサイ。

まさかフロルド君の御友人の方と御家族の方だとは思わなかったもので。」少女

そんな少女の言葉に4人は内心で、

『フロルド殿を君付けか。』

『フロルド様を君付け。』

『兄貴を君付け。』

『ルーパパを君付け。』 4人

そう突っ込みながら話を聴く。

「改めまして自己紹介しますね。

私はエリシエール・A・S・マアークライトと申します。

今回の件の原因となった、カトレアの第7皇女です。

ガゼルさん達には本当に申し分ない事をしてしまいました。」 エリシア

そう言つて深々と頭を下げる。

そのままフィルが頭を上げる様促すまでエリシアは頭を上げなかった。

そこにエリシアが来た事を聞いたジンが入って来るとエリシアを見て直ぐにエリシアに問い返す。

「エリシア？」

あっ！

失礼しました。

エリシエール様！

それで・・・本当に・・・エリシエール様・・・何ですか？」

「エリシエール様だなんて、エリシアで構いません。

ですが・・・それほど変わりましたか？」 エリシア

「何の話しだ？」

そう以前のエリシアを知らないガゼルが割って入りジンを見る。

「それは何て言うか・・・雰囲気って言うか・・・気配って言うか・・・。」

ん〜まあ、そんな感じのが・・・以前と全然違ってたんだ。
それに喋り方も違うし。」ジン

「いろいろ・・・有りましたから、この1週間で・・・。
いいえ、この数時間で・・・と言った方が正しいですね。」エリシア

その時のエリシアの表情を見たフィルはその表情を彼女がルーパパと慕うフロルドの表情とダブらせていた。
それから自然とエリシアの頬に手を伸ばし、お腹の辺りに額を当てて、

「大丈夫だよ！
皆が居るもん。」

そう呟いていた。
その行動に一瞬目を丸くし、驚いた様な表情を見せたエリシアだったが直ぐにまだ彼女達が学生だった頃の全てを包み込む様な暖かい笑顔で、

「ありがとうございます。」
そう返していた。

「それで、何であんたは此处に居るんや？」

そう、人見知りの激しいフィルがエリシアにすぐに懐いたのに驚きつつ、フィルがエリシアから離れるのを待ってガゼルがジンの登場で聞きそびれていた事を問い掛けた。

「ガゼル君。

お相手は一国のお姫様だよ。」

そう言葉を継いだナタルが、

「ですが確かにその理由はお聞きしたいですね。」

そう少し恐い顔でエリシアにガゼルと同じ質問をする。

先程からエリシアとずっと手を繋いでいるフィル以外は皆そんな顔だった。

しばしの沈黙の後、エリシアは、

「それが……、解らないのです。

おそらく……。」

そう言いかけた時、

「ルーパパだよ！

エルお姉ちゃんの手首のネックレス、パパと最後に会った時にパパが作ってた魔道具だもん。

何かのきっかけで転移魔法が発動する様にしてたんだよ。」フィル

そう、とても10才とは思えない洞察力でことの顛末を言い切った。

「フィルちゃん、ルーパパとは確かフロルド殿の事だったね？」ナタル

フィルが頷くのを見て、

「エルお姉ちゃんと言うのはエリシエール様の事？」 ナタル

そう再び問い掛けた。

それに頷きながらフィルは、

「ガゼ兄、気付か無かったの？」

と少し非難の籠った目で呟いた。

その目にたじろぎながらガゼルは、

「俺が居ない時やる、俺だって何時も蒼に居た訳やない！」

「居たよ。」

それに、『兄貴、何やってんだ？』って自分から聞いている。
そんな事も忘れた？

この役立たずの筋肉バカ！

そんなだからリンママの苦勞が減らないんだ。

もういつそ出て行け！

それが死んで！」 フィル

そう言っただけは更に憐れみまで籠った目を向ける。

「フィ、フィルちゃんちょっと言い過ぎよ。」

『毒舌過ぎるから。』
ねっ。

もう少しお手柔らかに言っただけで！」「リリー

妖精の様に可愛いらしいフィルの口から出たとんでもないバクダン発言に必死に制止を掛けるがフィルは相変わらずガゼルに文句を言いたげにしている。

しかしエリシアはそんなフィルの姿に彼女が良く知る学生時普段のフロルドの姿がダブリ、

『やっぱり家族何だ。』

と何処か納得してそのフロルドが残したネックレスを愛おしげに眺めてから胸の前で優しく握り締めていた。

「どうかなさいましたか？」

ナタルがそれに気付いて問い掛けると、

「羨ましいと思ったのです。

お二人の様に本音でお互いに言い合えるのが……。

それと、フィルちゃんの口調がとても子供らしい素直な飾りげの無いものだった事が何処かフロルド君に似ていてつい。」

「ルーパパに？」

でも、パパはそんな風に振る舞った事ない！」フィル

「そつやな。」ガゼル

そう先程迄の会話をまるで無かったかの様に二人は聞き返した。

「おそらく、エリシエール様の印象は演技、意図的な物でしょう。

そつでなければつじつまが合いませんし、……いえ、逆でしょうか。」

私達が知るフロルド様が不自然なのかも。」「リリー

後半思考の海に潜りながら、彼女はそう呟いていた。

「それは判りませんが、前者だと考えるのが自然です。

という事で、フロルド君の事は此処までにして、今後の事を話し合いましょう。」「エリシア

「そうですね。

では・・・、まず、フィルちゃん達への支援については私達は全力で支援させて貰うよ。

勿論、エリシエール皇女殿下も歓迎致します。」「ナタル

「ありがとうございます。

ですが先程も言いましたがエリシアで構いません。
敬語等もいりませんから、普通に接して下さい。」「エリシア

「ありがとうございます、ナタルさん。

フロルド、リンデイスに代わり感謝致します。」「フィル

そうそれぞれに歓迎と感謝の意を告げた。

返答を聞いてすぐに砕けた調子で話は進む

「それじゃ、遠慮無く敬語は省かせて貰うよ。

エリシア君」「ナタル

「はい。

それと逃亡中の身ですので念のために街中では、別の名前で呼んで頂けますか？

そうですね・・・フィルちゃんと呼んでいたエルとでも。」「エ

リシア

「判りました。」

では町の者にもそう呼ぶように伝えます。

フィルちゃん達もそれで良いかな？」ナタル

「はい。」

良いです。

それでは、私達の事ですけど、当面は町の会議場で休ませて頂きたいです。

勿論、明日から、皆が泊まれる場所の詮索、確保と、町の手伝い等をさせますけど。

手伝える事があれば何時でも何でも言っただけです。」フィル

「うん、判ったよ。」

たよりにしてますね。

後、泊まる場所ならいつその事、新しく建てて貰って構わないよ。

「ナタル

「考えておきます。」フィル

「あの、フィルちゃん、貴女方が宜しければ、私も貴女方と生活させて頂いて構いませんか？」エリシア

「俺らと？」

その提案に今までフィルに任せきりだったガゼルが口を挟む。

「ダメでしょうか？」エリシア

「いいよ！」

大歓迎、私達なら気にしないで！」フィル

そうフィルは満面の笑みで答えた。

「それは何か理由があるのかい？」ナタル

ナタルに質問されてエリシアは少し困った様な、恥ずかしがっている様な複雑な顔で、

「その何とかわせて頂いたら良いのか……。」

その……、私は……、その……今にして思えば、皇族だった為なのですが、その……、典型的なお嬢様育ちと言いましようか、魔法と勉強以外の事に、その……、まったくの無知なものですから。

その……まずはそのあたりからこの世界の事を学びたいと思いましたが、身勝手とも思いましたが、お願いできますか？」エリシア

「成る程、つまり庶民の生活を学びたいと言う事だね？
どうかな？」

ガゼル君、ジン君」ナタル

そう二人に尋ねる。

それにジンは言葉を重ねて、

「だったらオレも学んどきたい！
良いか？」

そうフィルとガゼルに聞いた。

それにガゼルは笑みを浮かべながら、

「良いぜ！」

と答え、フィルは、

「エルお姉ちゃんは良いけどジンはヤダ！」

ガゼ兄が相手して。」

と言う言葉で切り捨てる。

その返答にリリーは内心、

『誰に似たの？』

などと思いつつながら、

「リンデイスちゃんも大変ね。」

と本人にしか聞き取れない程小さな声で呟きながら苦笑した。

そういつた具合にナタル邸での顔合わせの一日は過ぎていった。

翌日からエリシア達は昨日のやり取りの通りガゼルを中心にした男性陣は居住地探しと街の警備を女性陣は子供達の世話や家事をそれぞれ行い、フィルにナタル、エリシアとリリーはそれぞれの仕事をを行った上で、夜は今後の事を話し合う毎日が続き比較的平穏な日々

が過ぎていった。

当然、フィル達とは違いこういった生活に不慣れなエリシアとジンはほぼ全日、ふらふらになっていたのは言うまでもない。

そうしてエリシアやソラ達がそれぞれの望む未来に向かって進み出した頃、フロルドはと言えば、ケイオスに付け回されていた。

「・・・何時までついて来る気だ？」フロルド

そう聞くとケイオスは、

「お前がこの国をどう判断するか見届けてからお前に指定された人間に会いに行つてやる。」

そう言つて再び沈黙を保つ。

それに、

《ヤレヤレ》

といった具合に肩を竦めてから進行方向を変えトウルカナ湖と呼ばれる湖に向かった。

トウルカナ湖

「そういう事なら、オレの判断を聞かせてやる。

此処なら滅多に人は来ない。

「こういふ話しをするにはもってこいだ。」フロルド

「そうだな。」

この湖は神属の者しか近付く事を許されていないからな。得にこの国の人間は信心深い奴が多い。」ケイオス

ケイオスは気付か無かったがトルカナ湖周辺には聖域として嚴重な結界が張られていたがそれと気付かせずに魔法を掛けたフロルドにより結界内に侵入出来ていた事にケイオスが気付くのは随分先の話である。

それからフロルドは、付近で湖に一番近い樹の枝に座り湖面を見つめながら、囁きの様な小さな声でしかし不思議と非常に聞き取りやすい声で、まるで歌を歌う様に聴く者を包み込む声音でゆっくりと語りはじめた。

その声をケイオスはフロルドが昇った樹の幹に背を預けながら聞いていた。

「この戦争は両国にとってまるで意味が無い、不自然な戦争だ。

二国の国力はほぼ同等だし、イカロスも国力はほぼ同等、三大国家の均衡により安定した状態だった。

更に両国共天災、食料不足や水源の枯渇に外交上の摩擦と言った戦争の引き金になりえる事象も一切無い。

こんな状況で戦争を起こせば最後はイカロスが疲弊した戦後の両国を攻めてどちらの国も倒れて国が滅ぶ。

滅ぼさざるえなくなる、そうしなければ次に滅ぶのはイカロスだからな。

だと言つのに戦争は起きた。

なら考えられる事は一つだ。

それは、第三者による戦争の先導！

だったらオレはソイツらを止める！

そして泥沼化する前に戦争の真相を突き付け、この無意味な戦いを終わらせる。

勿論、この国に無意味な闘争を仕掛ける気は無いしな。

少なくとも第三者を罰する事で事態を終息させられるならそうする。「フロルド

そこで一旦言葉を切り、まるで演説を聴く観衆を相手にしている様に一拍措くと再び言葉を紡ぎはじめた。

「……だが必ずしもその第三者を人々の前で罰する事が出来るとは限らない。

その時はオレがこの戦争の責任を全て背負おう、その為の細工ももう仕掛けてある。

正直に言えば、大切な人達を騙して、その人達に自分を殺させる事には抵抗はあるが……。

戦争と言う物がそんな綺麗事だけで終息しない事だって判っている。

なら他の者に無実の罪を着せるなどと言う愚かな事をする気は毛頭ない！

罪はオレが被る！

勿論、平和に成ったこの世界を観てみたいとも、大切な人達と幸せな日常を過ごして活きたいとも思うけどね。

そんな一個人のちつぽけな感情よりもこの世界中に住む多くの人々の幸せを護るのが為政者としてのオレの役目だからな。

これがお前の問いに対する答えだ……。

他の人間にはバラすなよ。」

そうフロルドは一息に語り切りケイオスの反応をケイオスには一切視線を向けずに待った。

沈黙が二人の間を包みこむ、動物の鳴き声や木々の擦れる音に風の

音が響く中、ただ時間だけが早足で過ぎて行く。そんな中、日が暮れる直前に意を決したケイオスが口を開いた。実にフロルドが語り終えてから5時間以上もの沈黙と静寂だった。それほどの沈黙と静寂だったにも関わらずケイオスの第一声は驚くほどに完結だった。

「そつか。」

ただその一言だけ言ってまた沈黙が訪れる。

二の句が継がれたのは日が完全に沈んだ後だった。

「何故それほど重要な事をオレに話した？」ケイオス

「お前に嘘をついた所でバレるだろう？」

それにお前がこの事をばらしても誰も信じない。気分屋の傭兵として有名だからな。

貴様は！

一応さつきも言ったが口止めはしておくがな。「フロルド

返答を聞いたケイオスはたからかに笑い、

「良いだろう！」

会ってやるつ。

お前が指定する雇い主とやらに。」

そう言い残して去っていった。

フロルドは枝から音も無く飛び降りながら、

「御手並み拝見といこうか。」

と言いながらトウルカナ湖の岸を上流にある山麓に向かって歩き始めた。

く河口付近く

そこでは暗闇に紛れて川の流れる水音とは違う水音が響いていた。勿論こんな暗闇で川で泳ごう等というバカはいない。

まして此処は聖域だ一般人は近付かない。

だからこそフロルド達は此処で話しをする事にしたのだから。

しかしそこには5人も人が居た。

1人が川の中に後の4人はそこから10メートル程離れて川の中の1人に背を向ける様にして。

暫く水音だけが続いていたが、

ガサツ

という草を掻き分ける様な音がして一斉に音のした方を5人が見る。しかしそこには何も居ない。

その事に安心した様にまた5人は元の配置に戻ると。

「ほんまにそんな神託が当たるんか?」???

そうまるで期待していないと言いたげに一人が口を開く、声からして男だろう。

「神託が外れた事は無かったと記憶しとるけど?」???

それに、もう一人が答えたこれも男の声だ。

「神託云々はどうでもええ。

ワイは自分の仕事こなすだけや！

無駄口叩くなや。」????

三人目も男の様だがそう、うつつうしいと言いたげに口を挟む。
それに中心にいる人物が、

「ウチの事信じとへんの？

なんや寂しいな。」????

と川から上がって髪を拭きながら聞いた。
声からして女だ。

少し考えてから最初に口を開いた男は、

「紗羅様の事は信じとる！

せやかて、近い内にシャラ様の未来を大きく変える出来事が起
る言われてもな。」????

「ウチだけちやうよ。

一樹、あんたもや！

むしろ、あんたの方がその影響大きいねんで。」シャラ

そう今まで黙っていたイツキと呼ばれた男に顔を向けながら話し掛
けるシャラ。

それにイツキは、

「ワシ？

でも、ワシ、こん中やと一チャン雑魚やで。

ありえんやろ・・・思うけど。」

そうまるで老人の様な口調で問い返す。

「せや。」

流石に今回は外れるて。

「シヤラ様、いくら弟やからて変に気く使わんでええで。」

それに最初に口を開いた男が同意する。

「うわ〜。」

「ほんまの事やけど凹むわ〜。」

「円マンそないハツキリ言わんでも良いやないか。」イツキ

そうこうしている間にシヤラは着替えを進めて行くが。

再び、

ガサツ

という音で全員が音のした方を見る。

そこには先程とは違い毛むくじやらのダチヨウのような生き物が居た。

「なっ!」

と全員が口にしたのと、2番目に口を開いた男がダチヨウモドキに頭から動体を食いちぎられるのは殆ど同時だった。

鮮血を吹き上げ、残った内臓を近くに撒き散らしながら倒れる仲間を見ながら臨戦態勢に移る男達。

「憐レン!」

クソ！

なんやこの化け物、冬摩^{トウマ}、イツキ！
シヤラ様を守れ！」エン

「仕事や！

やっと巫女姫様の護衛らしい仕事や。」トウマ

そう言つて会話を五月蠅気に聞いていた男がダチヨウモドキに背にしていた打鞭を手に飛び掛かった。

しかし横薙ぎに振られた打鞭は空を切り4人はダチヨウモドキを見失う。

「何処いった？」

エンは警戒しながら円を描く様にシヤラに向かつて移動する。

トウマはその場で周囲を見渡すが、ダチヨウモドキを目で捉える前に二人はダチヨウモドキに弾き飛ばされ川の中に沈む。

「エン、トウマ！」

そう叫びながらイツキは自身の持つ槍でダチヨウモドキに突きを放つと、

「姉貴、逃げろ！

戦いの邪魔や。」

と叫んだが、シヤラは、

「でも！」

と躊躇った。

その直後、エンとトウマが川から飛び出し、

「行け！」

と叫びながらダチヨウモドキにエンは戦斧を頭上から縦に振り下ろし、トウマは打鞭を下から振り上げる。

その剣幕に押されシャラは仕方なくその場から逃げ出した。

一方、フロルドは5人が居た場所から響いた音に反応してそこに向かって走り出していた。

「何だ？」

そう言いつつ、魔素マナの正確な気配を探る。

元から逃亡中だった為人の持つマナに近づか無い為、広域のマナ探索中でポイントを合わせるのは早かった。

《これは、召喚獣？

はぐれか？

いや、主持ちあるじもちだな。

一人離れた、戦えないのか？》フロルド

などと考えつつ更にマナの探索範囲を絞り込む。

よく勘違いされるが元々フロルドの強さはその膨大な魔力の量でも、魔力のコントロール能力でも無ければ、物理戦闘能力でも無いし、知力でも無い、勿論それらも十分過ぎる程優れているが、そんな物よりもマナの探索能力の高さがその強さの要で在り、他の追従を絶

つ絶対的な差だった。

そんな長所を生かしフロルドが今している事は、その場に居る者達の戦闘能力と戦闘パターン^の分析、それと周囲状況の把握にそれぞれ^の精神状態の確認だった。

信じられない程の高速疾走を行いながら、暫く様子をつかがった後、

《成る程、それが目的か。

つくづく縁があるな、まあ、此処は聖域だ彼奴等が居てもおかしくは無いか。

ならオレも上手く立ち回る必要があるな！》フロルド

そう結論付けて速度を上げる。

一方でイツキ達は、

「クソッ！

このダチヨウモドキなんつう速さや！」エン

この言葉の通り、ダチヨウモドキのスピードに翻弄^{デュオ}されていた。

このダチヨウモドキの速さはS・R、SS^{デュオ}クラスで一般兵（R・A、B以下）では10人掛かりでもほぼ間違いない^た全滅する戦闘力があ^つた。

3人は巫女姫の護衛だけはありエンとトウマのR・AはS^{ソロ}ランクでイツキはAランクの上級兵クラスだが苦戦は必死だった。

「まあ、でもシャラ様は逃げれた事やし、これで本気出せるわ。」
トウマ

その言葉と同時に3人は今まで抑えていた神力シンリョクを解放する。

神力・・・

神兵シンベイや神官、巫女といった神属の者のみ使えるとされる聖魔法セイマホウで別名は神法シンホウ。

魔法の派生種とされているが、神力を使える者は魔法を使えない。逆に魔力を使える者は神法を使えない。

また神官、巫女は何故か補助神法と回復神法、またはそのどちらかしか使えず。

神兵は攻勢神法コウセイしか使えない。

3人は攻勢神法を発動してダチヨウモドキに挑んでいった。

その頃シャラは3人を置いて来た事に不安を覚えながら救援を求め、神社に向かつて走っていた。

神社はシャラが水浴びしていた(身を浄めていた)場所より1Km程東の所に在る。

しかし、シャラは『巫女姫』と言う出生上、体が余り丈夫ではないうえ、此処は森の中で足場がかなり悪い為200mも走らない内にフラフラになっていた。

「！」シャラ

そんな彼女が異変に気付き後方に目を移すのと気を失うのはまった

くの同時だった。

（トウルカナ湖北西部の鍾乳洞）

そこに目を覆いたくなる様な肥満体の男がいた。どう見てもフロルド3人分は横幅がある。いくらフロルドが小柄と言っても太りすぎている。

「グフ！」

グフフ！

待っててね、シャラたん。

もうすぐシャラたんを悪い奴らから助けてあげるからね。」

と明らかに妄想も甚だしい事を周囲に置いたスナック菓子を頬張りながら口に行っている。

傍目から見たらただの変態だが当人は気付いていない。

それには2つ理由があった。

1つは、その姿を見た人が揃って彼を避けた事だ。

シャラが連れ去られた事もそこに原因がある。

そうシャラは皆が避けたこの男に優人並みしくに接したからである。

理由は単純に巫女姫としての職務にすぎない。

その事を男は自分に気があるのだと勘違いしたのだ。

2つ目はこの男が使っている力だ。

フロルドが先程考えていた、召喚獣やはぐれ、主持ち等といった事柄だ。

つまり、召喚術と呼ばれる上級魔法（他には錬金術、神剣魔法などがある）がこの男は使えるのである。

召喚術は本来、禁術と同等とまで呼ばれる程優れていて、召喚術が

使える者は召喚士と呼ばれ、異名持ちと同等に扱われる。それほどの人材なのである。

それゆえに誰も男を恐れ男を止めようともしなかったのである。

「ゲツ！」

「ゲツゲツ〜！」???

そこにシヤラを背負った半魚人が現れる。

「待ってたんだな〜シヤラたん。

オイ！」

ギンギョ、そのベットに寝かせるんだな〜。

ソットだぞソット。」男

「ゲツ！」

そうギンギョは答えてシヤラをベットに寝かせる。

「グフ。

シヤラたん、何時もの巫女服もカワユイけど、今の浴衣姿もカワユイね〜。

起きたらいっぱい可愛いがってあげるからね〜。」男

と寒気がするほど気持ち悪い口調で話しかける。

しかし、直ぐに男は自身が張った結界に亀裂が入った事で警戒を強める。

「誰何だな〜？」

僕ちゃんの結界を壊したのは？」

あの3人がもう嗅ぎ付けたんだな？

違うんだな、1人？

じゃあ誰何だな？

まあ良いんだな。

「おまえら侵入者を消して来るんだな！」

そう言つて普通なら5体も召喚よべば十分と思うが何せ常識が無い。
何と500体も召喚んで向かわせたのである。

しかしある意味その常識の無さが当たっていたとも言え無くもない
相手で有った訳だが意図した訳では当然ない。

そのマナを読んだフロルドは、

「またワラワラと、邪魔だな！」

とゴチながら相棒たる双剣を召喚んだ。

「ソウゲツ
双月」

そう剣の名を呼んで双剣を召喚ぶとフロルドの身長以上の長剣168cmと刃
渡り20cm程の短剣全長35cmが姿を見せる。

その剣の形状は両方共に三日月の様な曲刀形でクラッシュユアイスの
様な透明に近いが内部で光が乱反射する事で非常に色彩豊かな芸術
品の様な造りの武器だった。

剣を手に取ると直ぐに右手の長剣を反転させ逆手に構え、左手の短
剣を順手に構えて進みですが、直ぐに大量の召喚獣と鉢合わせして
戦闘が始まった。

一方、イツキ達はダチヨウモドキのヒットアンドアウェイの攻撃（単に小回りが利かず自然とそうなっている）にてこずっていた。

「クソッ、当たんね〜。」

それにあの質量やと受け止めるんも無理や。「エン

「何でこないな化け物が置^おんねん。

聖域やでな。

此処。「イツキ

そう2人が半切れしながら怒鳴った。

「ウツサイわ！

集中せ〜！

こないなったら、誰か囿^おなってそのスキに畳み掛けるしかない！

問題は誰がやるかや。「トウマ

「・・・ワシがやる。」

その役目を誰がするのか決めようとしたトウマにイツキは自分から志願していった。

「ワシは今中やったら一番弱い。

留めさすんに火力不足かもしれん！

やったら囿^おん成るんが一番や。

それにこの化け物は野放しんでけんしな。「イツキ

「ええんか？

下手したら死ぬで。」エン

「わ〜っとる。」

せやかて、やらなしゃ〜ない。」イツキ

「ホナ頼むわ。」

次かわしたら作戦言うで。

跳べ！」トウマ

それと同等にそれぞれ上と左右に別れてかわす。

直後突風を纏ったダチヨウモドキが突き抜ける。

それを確認してから3人はトウマの指示を聞いた。

作戦は至ってシンプルな物だった。

トウマ以外の2人が樹上でそれぞれの最強神法を唱え待機し、イツキが大岩を背にダチヨウモドキを待つと同時に遅延神法をセットしておく（イツキにセット可能な神法はBクラスの神法まで）。

後はダチヨウモドキが突っ込んで来たらそれをかわして神法を放つと同時にそれぞれの武器で頭部を集中攻撃して倒すという物だ。

シンプルだがダチヨウモドキの猪突猛進な攻撃パターンを上手く利用した作戦だ。

トウマという男の技量を伺うには十分だろう。

それからすぐに3人はダチヨウモドキの攻撃をかわしながら場所を移動して行く。

暫くして目的の大岩のある場所にたどり着き配置に就いた。

勝負は一瞬だろう。

心臓の音が早くなるのをイツキは感じていた。

ドクンドクンと世話しなく打つ動悸を無視してダチヨウモドキが突

進んで来るのを待つ。
冷や汗が首筋を撫でた瞬間、前方から弾丸の様な速さでダチヨウモ
ドキが突っ込んで来る。
それをぎりぎりまで引き付け、僅か1m手前という1/1000秒に
も満たない瞬間にイツキは左に跳び、

「弾ける！」

と叫んだ。

それと同時にダチヨウモドキが大岩に、

ドゴーン

と言つ轟音を響かせて激突する。

それを合図にエンとトウマは

「カミナリ神鳴り」エン

「シンエン神炎」トウマ

とどちらもソロスクラスの神法を放ち岩に激突したダチヨウモドキの頭
の在った場所に鞭と斧を振り下ろす。

更にイツキの発動させた 旋風 の神法が追撃を掛け一拍遅れてイ
ツキの槍がダチヨウモドキの首に深々と突き刺さった。

「・・・ヤッタ？」イツキ・エン

そう言った後、

ズーン！

と言う音と共にダチヨウモドキの巨体が崩れ落ちていた。

「作戦成功や！」

とつと帰って姫さん安心させたり、イツキ。「トウマ

そう言いながら3人は神社に急いだ。

〈神社〉

神社に到着した3人は神主にレンの死の報告とシャラの居場所を聞いた。

しかし、シャラは今誘拐されていて此処には居ない。

その事を知った3人は戦いの疲れも癒えないまま神社を飛び出した。そのまま3人はダチヨウモドキと最初に出会った場所を中心にシャラを捜し始めた。

〈鍾乳洞近郊〉

3人がシャラを捜し始めた頃フロルドは召喚び出した双月とリンデイスに自ら教えた剣舞をもって、まだ戦闘開始5分程度だというのに大量の召喚獣を倒し一種の地獄絵図を作り上げていた。

倒した数は389体だがその頃には知性の無い本能のみの召喚獣達は生存本能に従い逃げ出していた。

そんな戦いを終えたフロルドは信じられない事に傷一つ無い所か息一つ乱していない。

唯一変わった事と言えば頭の後ろで結い上げパイナップル状にしていた髪がスピードに耐え切れず解け、首の付け根辺りで紐で結んだだけの状態になっているくらいだ。

その直後、召喚獣達は光の粒子に包まれ立ち上がる。

しかし、フロルドは見向きもせず鍾乳洞に向かう。

一方、召喚獣達の状態はフロルドと同じく傷一つ無い。

だがそこには先程とは決定的に違う事があった。

フロルドを襲わないのだ、そして倒された順番通りに姿が消えていく。

最後の1体が消えた頃光の粒子も納まり元の静かな森に戻っていた。後方の光は消えたがフロルドはそのまま鍾乳洞を進む。

暫く進むと鍾乳洞は行き止まりになっていて、そこでは気を失ったままのシャラを満面の笑みで見下ろす大男がいた。

フロルドは外での戦闘にあれだけの召喚獣が送られていた事で洞窟内も敵でゴった返していかと面倒だったせいも合ってマナを読む事を止めていた為、少々ウンザリしながら進んでいただけに半分拍子抜けし半分呆れ返りながら近付いて行く。

それはそうだ、普通結界を破って侵入した者を迎撃するなら相手の撤退か撃破を確認してから警戒を解く、しかしこの男、数に任せた迎撃で安心し、戦闘に全く無関心だったのだ。

「オイ！」フロルド

そう怒鳴った。

しかしこの男あろう事か。

「五月蠅いんだな。」

僕ちやんとシャラさんの愛の一時の邪魔しないんだな、報告何かいらないんだな。」男

と気付きもしない。

フロルドは左手でこめかみを押さえながら、右手で双月を投げ付ける為に構える。

その顔は笑顔だ。

ただし、押さえしていない顔の右側は蒼筋が浮かんでいる事が判る。それから優しいのにドスの効いた声で、

「人の話しは目を見て聴きなさい！」フロルド

と言いながら、構えていた剣を男の鼻の頭目掛けて投げ付けた。

剣は男の鼻を掠め洞窟の壁に、

ドスッ！

とゆう音を発てて突き刺さる。

驚いた男が驚愕に見開く目をフロルドに向けるがすぐに鼻息を荒くしてフロルドに詰め寄ろうとする。

同じく剣が突き刺さる音で目を醒ましたシャラは直ぐには状況が理解出来ずに寝ぼけたまま口を開いた。

「此処は？

なんやお腹の辺りが熱いし？」

腹部の熱はギンギョに気絶させられた時に殴られた痕だ。

そう言いながら自分の体を見ると浴衣がかなり乱れていてハダケていた。

そのまま顔を上げると目の前に見知らぬ大男がいる。瞬間今までの事を思い出して顔を真っ赤にしながら、

「キヤーーーー！！！！」

と大声で悲鳴を上げ半泣きになりながら胸を隠す。
その悲鳴に男は振り返りながら、

「シヤラたん。

起きたんだな！」

と嬉しそうに声をかける。

更にフロルドに、

「ごめんなんだな！

君みたいなカワイユイ子がわざわざ来てくれたのに無視しちゃったんだな。」

等と行ってくる。

フロルドは投げた大剣、水月の所に走り引き抜きくとシヤラの横で短剣、輝月と共に構え、シヤラはフロルドが横に来たことでフロルドの脚に縋り付き2人揃って鳥肌を立て男を拒絶した。

その間僅か2秒である。

その状態のままフロルドはシヤラに問い掛ける。

「なあ、普通剣を投げ付けたらどんな風に思う？」

「勿論怖がるで、軍人はんやったら反撃するやろか。」シヤラ

「だよな。

オレの頭がおかしいのかと思った。」フロルド

「大丈夫！

ウチもそうか思ったから。」シヤラ

2人は男の反応に理性が吹っ飛びそうに為ったのを必死に戻したが、余計に鳥肌が立った様だ。それから2人はまるで謀った様に、

「とりあえずこの男は目の前から消したい！」フロルド

「とりあえずこの男は目の前から消そ！」シャラ

と結論ずけた。

男は相変わらずフロルドとシャラを見比べて鼻息を荒くしている。

「オイ！」

この三流術師、とつとと帰れ！」「フロルド

「ん〜ギンギョ。」

取り敢えずあの暴漢共が来る前にぼくちゃんの花嫁さん達をぼくちゃんの家に避難させるんだな。」「男

「話しが噛み合つとらん？」「シャラ

「ゲツ！」「ギンギョ

「嘘や！」

「こんなんが召喚師！」「シャラ

ギンギョが出て来た事でシャラは初めて男が召喚師だった事を知り恐怖で顔を蒼くしながら震えだしより強くフロルドの脚に抱き着いた。

「ああド三流のな。」

まったく何だつてこんな出来損ないの素人が召喚師何だか。「フロルド

「さあ行くんだな！」

ぼくちゃんの花嫁さん達。「男

しかし、フロルド達からの返事は勿論、ギンギョからの返事も無かった。

フロルドがギンギョを切ったからだ。

そこまで来て初めて男はフロルドが敵なのだ気付いたがその直後の第一声がまた普通とは違う。

「ぼくちゃんを騙したんだな！」

シヤラたんそんな卑怯な女からは早く離れるんだな。

ぼくちゃん怒ったんだな。

奴隷としてヒューヒュー言うまでこき使ってやるんだな。「男

フロルドとシヤラはお互いの顔を見つめ、

「どうしたら良い？」フロルド

「どうしたええん？」シヤラ

と違いにこれ以上無いぐらいに困惑している。

元々ドジっ子のシヤラはともかくフロルドがこれほど困惑するのは珍しい。

それからフロルドは取り敢えず双月を送還お返しした。

名剣である双月で斬る事に嫌悪感を持ったのだ、その直後、普通の剣を召喚だした後、

「あれを斬るから離せ！」

それ以上なにも言わずシヤラの手が緩んだ瞬間男を切った。すると斬られた場所から黒い球状の物体が現れその球が完全に現れたのを確認してから黒い球を切り捨てた。フロルドが斬った物は魔源^{マナ}。

魔源・・・

魔素と呼び方は同じだがこちらは魔法を使う為に必要な魔力が貯められたそれぞれの魔導師の力の源だ。神法では神源^{カルラ}と呼ばれている。

つまりこの男はもう二度と魔法が使え無くなった訳だ。だがシヤラも男も状況が判らない。だが直ぐに男は召喚術を使おうとして使えない事に気が付いてフロルドに怒鳴り付ける。

「女！」

お前何したんだな！

召喚獣召喚べないんだな！」

「召喚出来ん？」

何で？

怪我もしてへんのに。」

そうシヤラは首を傾げながらフロルドを見上げた。

「ゲート」

フロルドは質問には答えず男を此処から100Km程離れた町に男を飛ばしてからシヤラを見た。

「ともかく此処から出るぞ。」

「こんな所に居たら何時まで経っても鳥肌が消えない。」

そう言いながらも身震いして更に鳥肌を立てる。

同感なのかシヤラは何も言わずについて来る、そんなシヤラに上着を掛けてやりながら2人は鍾乳洞を後にした。

行きはフロルド1人で走って入ったので速かったが実はこの鍾乳洞全長5Km程で迷路状でオマケに暗い。

シヤラが怖がりなかなか先に進め無かった。

少しの物音でフロルドに飛び付いて離さ無くなるのだ、仕方なく途中からフロルドはシヤラを抱き上げ（つまりお姫様抱っこだ）進むが、それでも物音がするとフロルドの首を絞める様に抱き着いて来るので2人が鍾乳洞から湖畔に出た時には既に空に朝日が登り掛かっていた。

ちなみにフロルドは戦闘では一切、息を乱してはいなかったにも関わらず、何度も首を絞められたせいでかなり息が荒く、シヤラは必死にフロルドに謝っている。

フロルドの息が落ち着くのをまって洞窟内でした質問をシヤラは再度繰り返した。

「それである男に何したん？」

「マナを斬った。」

「それだけだ。」

フロルドはそうまるで何でもない事の様に応えた。

「マナを斬ったて、そんな神業。
それに物凄い美人で大人っぽいし、同じ女や思えんな。」
ウチ何も出来んのに。」シヤラ

「美人？」

女？

まさかお前までそう思ってたのか？」フロルド

「エッ？」シヤラ

フロルドは解けた髪を慣れた手つきで何時のピナツプル状に結い上げながら言葉を続けた。

「オレは男だ。」

「嘘っ！」シヤラ

そう言いつつも今までの自分の姿と態度を思い出してシヤラの顔が
一気に紅くなる。

それはそうだ、シヤラはあの男もそうだがフロルドにも胸を見られ
ている。

その上洞窟から出るまで女だと思ってフロルドに当然の様に抱き着
いていた。

それを根底からひっくり返されたのだ、取り乱して当然とも言える。
それから恐る恐る判っていないながらシヤラはフロルドに問い掛けた。

「なあ、その、やっぱり見た？」

フロルドは特に気にした風も無く、

「ああ、それと飛ばしたついでにあの男からは今日一日の記憶は消
しといた。」

後は拐われて胸見られた以外の事は何も起きてない安心しろ。
助けた代金としては安いだろ？

散々人の首、締め上げたんだから。「フロルド

「うぐ！」

その通りやから言い返せへん。」

そう言つてシヤラはこの件に関しては諦めた様だ。

それから暫く思索した後シヤラは意を決してフロルドに問い掛けた。

「なあ、あなた何者や？

それにあの双剣何処で手に入れたん？」

その問いにフロルドは決まり文句を返した。

「人に物を尋ねる時は自分から、が礼儀だぞ。」

そう言いながら食事の準備を始める。

「それもせやな。」

ウチは隼神・紗羅。ハヤガミ・シヤラ

ほんまは部外者に教えたアカンのやけど、恩人に嘘はつけへんし
言うな。

現巫女姫や。

そうは見えんやろけど。

そんであなたの名前は？「シヤラ

そういったあとフロルドの横に座り顔を覗き込んでくる。

「知ってるよ。」

先々代の巫女姫、星詠の旭アサヒ様の娘。

巫女姫、月詠のシヤラ様、どちらも先詠に長けた巫女だな。

アサヒ様には昔随分と世話に為った。

オレの名前だったな、ケイ・フィードガルド、冒険者だ。

で、他に質問は？」フロルド

フロルドがアサヒの事を知っていた事に驚きつつ、また、自分の事も知っていて名乗らせた事に若干の抗議の視線を送りつつシヤラは質問を続ける。

「あの双剣、何処で手に入れたん？」

あれは七シチセイソウケ聖双具の一つやろ！」

そう言つて二振りの小太刀を取り出す。

「さつきまでずっと共振してたさかいな！」

間違いあらへん！」シヤラ

シヤラが七聖双具を持っていたことに驚きつつフロルドは自身の七聖双具を召喚びだした。

「第六位の七聖双具、双命か、まさかこんな所に在ったなんてな！」
フロルド

「第六位？」

「なんやそれ。」シヤラ

「知らないのか？」

そうフロルドが聞くとシヤラは頷く。

「まったく、自分の持つ神器の事くらい少しは勉強しておけ。

七聖双具はその名の通り七組の神器だ。

双具はその力毎に階位がある一位から三位までが上位双具、四位から六位までを下位双具と呼び、それらの頂点に天位双具が存在する。「フロルド

そこで一旦切り、作り終えた朝食をシヤラに渡しながら話しを続けた。

「取り敢えずオレが把握していた七聖双具はオレが持つ天位の双月に、虹の桜剣舞が持つ第三位の双龍と朱あかのレイそらが持つ第一位の双陽そらひの三つ、つまりこれで四つ目だ。「フロルド

「あんたの双月が天位！

何でそんなとんでもないもん持っとんねん。

あつ、美味しいやん。「シヤラ

最後の一言に苦笑しつつフロルドは続ける。

「七聖双具は意思を持つ神代の武具だオレがこれを持つのは双月の意思だ。

ついでに教えといてやる。

双命が双月に反応したのは双命が双月を畏れたからだ。

双月は何の反応も示してないぞ。

最初からな。「フロルド

そこまで言ってフロルドは朝食を済ませ手早く片付けまで済ませる

とシヤラに、

「流石に疲れた、少し休ませて貰うぞ、お前も休むと良い。」

そう言いながら毛布を渡し自身は樹の根本に移動して片膝を立てて座りそのまま眠りに就いた。

シヤラはそれを見てフロルドの横に移動してフロルドにも毛布が掛かる様にしてから眠りに就いた、どうやら洞窟内で散々フロルドに抱き着いた事で、もはや気にならなくなった様だ。

二人が眠りに就いてから6時間後、シヤラを捜していたイツキ達が樹の根本で寄り添って寝ているフロルドとシヤラを見つけ出すとまづシヤラをフロルドから離し直ぐにフロルドを捕まえ様とした。勿論シヤラはフロルドから離された時に起き必死に説得しようとしている。

しかし、此処は聖域だ神属以外の立ち入りが禁止されている。弁護のしようがないのも事実だ。

確かに巫女姫を助けた事で多少の恩赦が汲まれるのは確かだがそれでも重罪は重罪、庇い切れる物ではない。

「オイ！」

起き！」エン

そう言つて戦斧を突き付ける。

それにフロルドは目は瞑つたまま、

「起きてるよ。」

どっかの誰かさんがなかなか起きないから動け無かつたんだよ。」

「ええ！」

「ウチのせい？」

そう言つてシヤラは状況も忘れて意味も無く焦る。
それを尻目にイツキは、

「聖域に神属以外の者が入れんのは知つとるな？」

そう切り出す。

対してフロルドは、

「知ってるよ。」

だから入つた。

「オレも神属だからな。」

「何？」神兵

「ほら証拠だ。」

そう言つてフロルドは神樹シンジュ（SSSトリオクラス）の神法を使って見せる。
これにはその場に居た全員が驚く。

神樹が使えるのはこの聖域出身者ではアサヒ以外居なかつたからだ。
特にフロルドが魔法を使つていた所を見ていたシヤラの驚きは大き
かつた。

「これで判つたら、オレが神属だつて事が。」

判つたらそれを降ろせ。」

そのまま立ち上がるフロルドにイツキ達は武器を降ろした。

すると今まで心配そうに見ていたシヤラがフロルドの元に駆け寄り謝罪しつつ周りに聞こえない様注意しながら問い掛けた。

「堪忍な。」

でも許したってな、此処はそういう場所何よ。

でな、さっきのほんまに神樹なん？

確かあいつに使ったって魔法やる？」

それにフロルドは、

「気にするな。」

『この世には例外も居る。』

それだけだ。』

後半を念話に切替て返した。

一方神兵達はフロルドを見ながら口々にえらいベツピンやとか美人やな〜等と言っている。

実際学園に居た頃は極力目立たない様になりにかなり地味にしていたし、魔法である程度敵つく見える様にしてもいた。

しかしそれを解いただけでこつも女性に見間違われるとは思っていなかったフロルドは困惑を隠せない様だ。

イツキに至っては姉を取られた事に若干のやつかみを持っている事が伺えた。

「シヤラ様、これからどうするんや？」トウマ

「ケイ様に御礼したいさかい社に行くわ。」

それとイツキ〜！

アサヒ様の事知ってはるらしいから一緒に話し聞こ。」「シヤラ

「母様の知り合い？」イツキ

それを聞いてフロルドが止めに入った。

その事にシヤラは信じられない物を見た様な目でフロルドに振り返っていた。

その反応を予測していたフロルドは、

「悪いな先にアサヒ様の墓前を訪ねたい。

社はその後に行く。」

と、昨夜の目的地であったアサヒの墓参りに行く旨を伝える。

するとシヤラは先程とは打って変わり、晴天の様な笑顔でフロルドの手を取りながら急かせた。

そんな姉を久しぶりに見たイツキはこの時初めて巫女姫としての重圧と常に戦ってきた姉が初めて家族以外に心を許している現実に戸惑いを隠せなかった。

まして目の前の人物は昨日初めて会った人物なのだ尚更だろう。

しかし同時に物心が付く前に亡くなった母親の事を聞ける相手でもあり自然浮かれていた。

そうこうしている間にフロルド達はアサヒの墓前に着いた。

到着後、直ぐにアサヒの身内であるシヤラとイツキ以外は下がらせ、フロルドは片膝をついた状態で目を閉じ手を合わせた。

そのまま後ろで立つ2人に話し掛ける。

「オレがアサヒ様と初めて会ったのは今から16年前の事だ。

その時に当時1歳のシヤラと産まれたばかりのイツキとも会っている。」

そこまで言うと合わせていた手を降ろし、目を開けてアサヒの墓を見つめた。

「オレがアサヒ様に会うきっかけになったのは、アサヒ様の実の姉君である朔夜様サクヤがその双子の実子をお前達の祖父達に合わせる為にツキの誕生の祝福の為の二つ。

その護衛を含めた一団にオレも居たからだ。」

そこまでフロルドが話した所でイツキが疑問を口にし、疑惑の目を向けてきた。

「母様に姉が存在したなんて初耳や。

それに、護衛に子供を入れたんか？

それは変やろ。

どっちも嘘とちゃうんか！」

「あくまで護衛を含めた一団だ、サクヤ様以外にも里帰りの為に一団に居た人物も居た。

最初の疑問は後で解ける。

話を戻す。

その一団はこの地に着くと一部の者・・・神力を持つ者を除く大部分が下の街でその足を止めたがサクヤ様を始め10名程が社まで進み、そこでアサヒ様を含む15名と合流しこの・・・。

そこまで話した所でフロルドは話すのを止める。

背後に16年前に一度会っただけが忘れた事など無かった気配を感じたからだ。

その人物はアサヒの墓の前に座るフロルドの後ろ姿に目を見開き震えだし口元を吊り上げていた。

第10章 く分岐する未来・三人の天才、二人の出会い？く（後書き）

冒頭でも書きましたが長い章になりました。

しかもまだ終わらない・・・。

ついでに視点がコロコロ変わると言うオマケ付き。

てな事で中々にカオスってる第10章ですが、読み応えは有ると思うので楽しんで下さい。

ではまた次のアップでお会いしましょう。

第10章 く分岐する未来・三人の天才、二人の出会い？く（前書き）

10章後編です。

第10章 分岐する未来・三人の天才、二人の出会い？

フロルドがイツキ達と出会った頃リンデイスとソラは、図書館に在った歴史書や文献をあらかた調べ終えた為、息抜きを兼ねて連日、数多くの犯罪者を捕らえていた事で仲が良くなった審議官の夫婦、ギャリック・ハーデンス、静・ハーデンス夫妻とその息子の辰巳・ハーデンスと共に近郊に有る湿原、ロプト湿原を訪れていた。

ただ初めの頃は数分毎に犯罪者を捕らえる学生である筈の年齢の二人に夫婦は不信に思い職務質問をしたりしている。

それにはリンがかつての虹の身分証を見せて極秘任務だと言って心中で謝罪しながらごまかしている。

息子のタツミはソラと同じで軍学校の学生でクラス内では女子からの人気の高い青年だかりンとソラの美少女コンビには気後れ気味の様だ。

ロプト湿原

ロプト湿原は休日である為か、かなりの人集りに成っていた。

そんな中でリンとソラは昨日迄、図書館に缶詰め状態だった為か二人揃ってはしゃぎ回っている。

ただこの二人、地が良すぎる為やたらと目立つ。

10分としない内に数え切れないほどナンパされることになっていった。

そうなつて来ると気が気でないのはタツミだ。

クラスではほつて置いても女子の方から近付いて来ていたがリン達はそうでは無くタツミに初めて振り向かせたいと思わせた女性だった。

そんなリン達は先程からナンパ師達の執拗な誘いに戸惑っている。特に15歳から派閥に在籍しそれ以前は孤児院を生活の拠点としていたリンはこの状況に対処出来ずソラの後ろに隠れている。

タツミやハーデンス夫妻はそんな二人を助けようとしているが人垣が邪魔で助けられないでいる。

その状況に真っ先に参ってしまったのはやはりリンで、普段、気丈にフロルドや親フロルドの立場を摂っていたマリアーナの代役等をこなしている姿が信じられないぐらい見事に泣き出していた。

流石にいきなり泣き出された事でナンパ師達にも動揺が生じてタツミ達が入って来れる余裕が出来る。

ハーデンス夫妻はナンパ師達を追い払うとソラとタツミに慰められているリンの所に来る。

しかしこの状況にもっとも驚いているのはソラだ。

ソラは此処数日の間に犯罪者を瞬きする間に捕まえるリンの姿をずっと見ている。

何より彼女の凜とした落ち着いた姿からは今のこの少女は想像出来ないからだ。

「すみません。」

突然泣き出してしまつて。」

そう落ち着いてきた所でリンが謝る。

「良いのよ。」

別に気にしなくて。

悪いのはあの連中何だから。

それより、大丈夫？」

そうシズカが話し掛ける。

リンが頷くのを確認しながらソラはシズカの言葉が途切れると言葉

を重ねた。

「でも、驚いたわ。

ネムのイメージジって落ち着いた大人の女って感じだったから。」

ネムとはリンデイスのセカンドネームである。

一部の派閥関係者は本名と偽名の二つ以上の身分証を所持し使っている。

理由はリンならリンデイスやリンの呼び名が帝国ではそれなりに有名で名が知られていて動きにくいからだ。

若しくは、潜入、潜伏任務の多い物もこの部類に入る。

今の状況で言えば理由は前者である、タツミはリンが派閥に所属していた事は知らされていないし、夫妻が知るのもネムの名だ。

「幻滅なさいましたか？」

そう悲しそうに微笑みながらリンが聞くとソラは、

「全然！

ただ、びっくりしただけ。

むしろ泣き顔すごく可愛いかったわ。」

何処か嬉しそうに見えるソラの顔から嘘は無い事を理解して安心したのかリンはぽつりと呟く。

「あれほど沢山の男性に囲まれたのも言い寄られたのも初めてです。子供達に囲まれる事は有りましたが……。

それにあの方達はお兄様達とは余りにも違いすぎて……、すごく怖かったです。」

その独白にソラは納得する。

リンデイスにはフロルドの片腕と言う側面がある。

そのせいで他の男性を意思して見る事が無く。

彼女の中に有る男性のイメージ像とはフロルドその人だっただけなのだ。

しかしリンから兄と言う言葉が出た事でタツミが質問した。

「お兄様？」

お兄さんがいるのか？」

そこで初めてリン達は家族の事を全く話していない事を思い出す。

「あゝそっか。」

友達の事とか家族の事ってまだ一度も話してなかったっけ。

「ごめんね。」

ソラはそう言いながらリンの横に座りまだ少し涙声のリンの頭を抱き寄せる。

二人が再会した頃のリンに対する気後れや罪悪感といった物はもう感じられない。

それ位今の二人の仲は良くなっている。

そうかつてテイターニア家で幼い二人が仲良く遊んでいた頃そのままに二人が成長したかの様に。

つまりそれ位二人の相性は生れつき良いのだ。

夫妻は初めて二人に会った時、二人の事を姉妹だと思った程だ。

その状態のままソラは自分の家族の事を聴かれても差し障りなく、また聞いていて不信な点が出ない程度に話しはじめた。

「私の家族はお父さんとお母さん、それとおじいちゃんと私の四人家族で、私は一人っこ、タツミ君と同じね。」

そこで今度はリンが自分の家族の事を話す。

「私は物心が付いてすぐに家族を全員事故で亡くしました。」

勿論、リンの家族は事故死ではなく暗殺による殺人だ。

だからといってわざわざ隣にいるソラとソラの家族を追い詰める様な事を言う気はリンには無いし、数日前に知り合ったばかりの人に話す事でも無い。

「亡くなった！」

・・・その、知らなかった事だけど、ごめん。」

聞いてすぐにタツミは謝り難しい顔をする。

「・・・そう、大変だったね。」

夫妻は揃って苦い顔をする。

特にこの二人は審議官だ。

こういった経験は多い。

その辛さをよく見て知っているのだ。

しかしすぐに矛盾がある事に三人は気付く、それを承知していたリ
ンは続きを話した。

「その事故の折、私をその現場から救ってくださったのが先程、
私が申し上げたお兄様です。」

その後、私はお兄様に引き取られ、いろいろな事をご教授頂きな
がら、お兄様がお引き取りになられた私と同じ境遇の子供達と暮ら
しております。」

そうソラに甘える様に頭をソラの頬に寄せながら話した。それが家族を亡くした辛さとフロルドに対する敬愛や憧れの狭間で葛藤するリンデイスの心の上げた小さな悲鳴であった事はその場ではソラのみが気付いていたがソラにはリンを救う手立てが解らなかつた。

暫くの沈黙を破ったのはこの場に居た五人では無かつた。

「タツミ先輩・・・その二人は誰、何ですか？」???

そこには三人のリン達と同じ年頃の少女がリン達を敵意を含んだ目で睨んで立っていた。

その手の視線に馴れているソラは彼女達がタツミのファンだとすぐに気付く。

「心配しないで、私達はタツミ君の只の友達よ。」

私もこの子もタツミ君の御両親に良くしてもらっていて今日は御両親のお誘いをお受けしただけだから。

それに彼とはまだ今日で2回しか会っていないから。」

しかし二人に好意を寄せているタツミには結構キツイ一言だ。

ハッキリ言っただけかなり落ち込んでいる様だ。

その辺りソラは鋭い様で鈍い。

それでも、何故、敵意を向けられているのか判っていないリンよりはマシである。

リンは小首を傾げキョトンとしながら。

「ソラさん、何故そのような事を？」

確かにその通りですけれど。」

などとタツミに追い撃ちを掛けている。

そんなソラとリンの反応に三人の少女は胸を撫で下ろす。
リンは訳が解らず頭に？マークを5つ程浮かべている様だ。

そんな風にその場はリンとソラの二人を穏やかに押し流していた。
タツミのファンの三人が加わり賑やかに過ぎる時間を突然終わらせたのはリンだった。

「ソラさん、皆様をお連れして避難なさって下さいね。」

突然そんな事を言い出したのだ。
ソラはソラで、

「わかった！」

「気をつけてね。」

と言い出す。

訳が解らないので困惑する他の人達を余所にリンはおっとりとした動作で立ち上がる。

対してソラは困惑している五人に手を差し出して立たせ湿原を離れる様に誘導する。

ソラに背中を押され訳が判らないまま五人が移動を開始した事を確認するとソラはリンに確認した。

「誰が来たか判る。」

それを落ち着い口調でしかし強張った声で返答する。

「四皇のレックス様です。」

少し時間を稼いでから逃げます。

合流はあの場所に三日後、急いでくだ……。

どうやら、気付くのが少し遅かった様です。
幸い囲まれたのは私わたくしとソラさんだけの様ですけど。「リン

「覚悟を決める！」

・・・か。

大丈夫とつくに出来てるから！」「ソラ

そう言ってリンと背中合わせになり、具現化の魔法で自身の武器であるハンドガンを作り出す。

ソラは具現化の魔法だけならM・R、SSデユオと遜色ない技術がある。十分虹の構成員と対抗出来る武器だ。

く具現化魔法く

具現化の魔法や神法は作った物に固有の名称を付けると名前をイメージし魔力や神力を一カ所に集めるとスペルキャンセルでも作った時と全く同じ能力が実力が上がりより力の集束率が高くなっていると自動的に上書きで今の実力相当に更新された物を具現化出来る便利な魔法である。

ちなみにソラが付けたハンドガンの名前は『ミリタリー』である。だが具現化の問題点は想像力が優れていないとたいした物が作れない事である。

そのため、一般の魔導師や神属の者は魔具、神具と呼ばれる魔法を補助出来る一種のブースターを装備し、そのままだったり、透明化系の魔法や神法、縮小系ミニムの魔法や神法を使って持ち歩く。

例外は召喚師で召喚師は必要な物を亜空間に保管し必要な時に取り出すのが一般的でフロルドはこれを使って双月を持ち歩いていた。また具現化を使える者と一部の魔力、神力感应者は魔具、神具を使

わ無くてもブースターを装備した魔導師や神属の者と互角の力を引き出せる。

その頃、後を追って来ないリンとソラを不信に思った五人は後方を振り返り、ソラが具現化の魔法を発動したのを見た。

「！

具現化！

それもかなり高度な……。

何で彼女があれだけの魔法を親父、彼女は一体？」

そうタツミに聴かれてギャリックは状況も相俟って答えざる終えなくなっていた。

一度、シズカに視線を送ってから話しはじめた。

「……彼女達は虹の派閥に属している魔導師だ。

彼女達は特殊任務でこの街に来ていた。

これはその妨害なのだろう！」

「虹の術師……。

おじさん……でも、二人共私達と同一年ぐらいですよ。

ネムちゃん何か年下なんじゃないですか？

落ち着いてるけど。

そんな子が虹に居るなんて……。」追っかけ！

その疑問に夫妻以外が同意する。

「しかし、ネム君に派閥の構成員証を見せてもらった、あれは偽造

出来る物では無いんだ。

それに私達が彼女達と知り合っただのは彼女達が任務中に数分毎に犯罪者を捕らえて来たからだ。

前例だつてある。

罪人として指名手配されたエレメントマスターと召喚師のフィルと言う少女は10歳で、入閥している。

実力があれば入れると言う事だろう。」

そう説明したギャリックは視線をリン達の方に向ける。

話しをしている間にリンとソラは20人近い人影に囲まれていた。数が違いすぎる。

助けに行くべきだろう。

しかし、救援に向かう前にレックスが二人に接触していた。

その声が五人の耳に届く。

「久しぶりだな、フィードガルドの姫君。

お前も随分とひどい男を兄に持った物だ。

だが、俺の物に為ると言うならお前だけは助けてやる。

正直な話し派閥内でも随一を誇るお前の美しさは嫌いではない。」

そう言い放ち手を差し延べて来る。

つまり奴隷同様の扱いか死ぬかそれが嫌なら自分の元に来いと言っているのだ。

それとフィードガルドの姫君と言うのはフロルドを嫌う派閥の人間がフロルドの妹であるリンデイスを皮肉と侮蔑と悪意を籠めて呼ぶ時に使う忌み名だ。

つまり派閥の関係者にしか解らない言い方でレックスはリンデイスを雌として扱ったのだ。

むしろ世間一般に姫君等と呼ばれる事が嫌がらせだとは思わないだ

ろう。

しかしリンと同調率の高いソラにはその言葉が嫌がらせだと言つて
とが自然と解ってしまった様だ。

一気に機嫌が悪くなり目元を吊り上げながらレックスに怒鳴った。
端から見れば只の命知らずだ。

「あ・ん・た・ね〜！」

黙って聞いてればふざけんじやないわよ！

リンデイスはあんたみたいなさ情魔に渡すもんですか！」

しかし言つた後にソラは自分が失言をした事に気付く。

自分から周りの一般人に私の連れは桜剣舞だ！

とばらしてしまったのだ。

当然、審議官のギャリック夫妻はリンデイスの事を知っていた。

「リンデイス？」

リンデイスと言えば確かエレメントマスターの妹君。

桜剣舞と呼ばれた才女。

ネム君がその桜剣舞なのか？」

その囁きのように漏れた言葉にタツミ達は絶句する。

特にリンが多数の男達にナンパされ、大泣きした所を見ていた者達
はレモンをかじつた後の様な顔をしていた。

しかし事實は事実、此処に居るのは桜剣舞本人だ。

そして本人なら此処に多数の追っ手が来るのも納得できるのは確か
だ。

何故なら皇帝に反逆したあのエレメントマスターの妹なのだから。

「ごめん・・・リン。」

でも、許せなかったのよ。

リンの事、雌扱いた上にフロルドの事も勝手に悪人扱いして！
ぶん殴ってやる！」ソラ

どうやらリンデイスの正体を明かした事は反省している物のリンを雌扱いた事とフロルドの事を馬鹿にした事に対して怒った事は反省どころか時間が経つにつれて更に頭に來ている様だ。

その事にリンは、

「ありがとうございます。

ソラさん、とても嬉しい。」

ソラと背を合わせたままソラの空いていた右手を取り呟いた。

そういつた仕草や表情からはやはりリンには桜剣舞などと呼ばれて
いる様な実力者にはとても見えない。

ちなみにソラは左利きでミリタリーは左手に持っている。

「おじさん、桜剣舞ってソラちゃんの事じゃないんですか？

ネムちゃんが異名持ちだなんて・・・信じられない。」追っかけ2

この光景を見ていればそう思って当然なのだろう。

確かにリンは楽器や子供達の手を取っている方がよく似合う。

するとそんな感想を二人を囲む虹の隊員の一人が言った言葉が後押しする。

「師団長殿。

やっぱりあんた師団長失格だよ、役立たずの素人。

戦闘力なんて皆無のくせに、色気しか取り柄も無いからどうせ大
好きなお兄チャマに頼んで虹に入れてもらったんでしょ。

愚図だもんね。

そこの素人と一緒に大好きなお兄チャマに抱いてもらってなさい

よ！

フロルドがいなかったら虹にも入れないような愚図何だから当然よね。

桜剣舞の異名もお兄チャマからもらったんでしょ？」

その言葉にはその場にいたほとんどの人間が納得した。

リンの容姿ならその方が納得出来るのだ。

しかしその言葉はリンデイスとソラティカの逆鱗に触れた。

「オルフレア副師団長！

わたくし私の事をどうお思いになられたとしてもどうお言いになられ様と構いません！

ですが、わたくし私の家の者と友人の方々を悪くお言いになるのでしたら・・・。

容赦致しませんよ！」リン

「あなたね！

リンの事何も知らない癖に適当な事言ってるじゃ無いわよ！

私は確かに素人だからどう言われ様と構わない。

でも、リンとその家族の事馬鹿にする様ならただじゃおかないから！」ソラ

二人の放った魔力の混ざった怒気は実力に劣るソラの怒気ですらその場にいる虹の一般隊員の力を超えていた。

リンと行動する様になってからの数日間ではあるが二人は暇があれば戦闘訓練を行っていた。

その成果にソラ自身は気付いていなかったが結論から言えば経験不足な事を差し引くと今の彼女はR・A、SSSトシオと変わらない所まで実力が飛躍している。

ましてリンデイスはフロルドの影に徹して実力を隠していたが実際

はR・A、SSSSSの四皇と同等な実力がある。

リンデイスは血は繋がっていないなくても、間違い無く天才フロルド・Y・F・ランフォードの妹なのだ。

結果、リンとソラの放った余りにも膨大な魔力に当てられた二人を困んでいた虹の兵達は半数の兵が気絶するに至った。

背筋の凍る光景がほんの一瞬の間に湿原の一面に拡がりタツミ達は勿論リンを馬鹿にした態度をとっていたオルフレアを始めとした気を失わなかった虹の兵達の大半がリンデイスの事を誤認していた事をその瞬間思い知った。

だがよく考えればそれは余りにも判りきった事だ。

なぜならフロルドは派閥内において穏健派の筆頭として名が揚がるほど虹の実力行使を嫌っている事で知られていた。

何より過激派の者達自身がフロルドは甘いと非難し続けていたのだ。更にフロルドはその力を派閥に入ってからずっと隠していた。

その身内が実力を隠す事ぐらい用意に想像できる。

ましてリンデイスはフロルドの片腕として虹に入る前からフロルドを補佐し続けていたのは周知の事実なのだから。

しかし、リンの実力を下等評価していたのは実際には極一部の人間である、主にリンデイスの団と男性の団の一部で、リンデイスの団は、師団長であるリンデイスが良くフロルドとマリアーナから個人的な密命を受けてフィルとのコンビで単独行動していた事が原因で実質半分以上の割合で、団はオルフレアの管轄扱いで有った事、男性の団は単に男尊女卑の思想からである。

そこに広がる光景に冷や汗を流しながらギャリックが呟いた。

「これほどの力が有るなどあの容姿からは想像できないな……」

タツミ、彼女達は諦めるお前では釣り合わない。」

後半余計な事を言いながら二人を囲む虹の隊員達を見た。

視線に気付いた訳ではないがオルフレアが身じろぐ。

リンに脅えているのだろう。

リンの逆鱗に触れた張本人なのだから。

湿原を優しく風が流れていく。

鳥達はその柔らかな風に乗り天を舞い、草木は種子を運ぶ。

虫達の柔らかな歌声は動物達を眠りへと誘う。

そんな晴れ渡る青空の下に在りながらオルフレアは自分よりも7才も年下の182cmの自分よりも20cm以上背の低いただ手を前で組み、立っているだけの強く叩けは砕けてしまいそうな少女を前に声すら出せず・・・ただ、震えていた。

もうリンデイスは怒気も魔力も発していない。

ただ哀れむ様な悲しそうな瞳を他でも無い自分に向けている。

・・・ただ・・・それだけだ。

今はもう何の感慨も持ち合わせていないだろう。

オルフレアは副師団長である。

R・AはSSS。

ソラとなら経験的にも戦えば勝てるだろう。

しかし自分はこの少女にとっても見る価値も無い、刃を合わせる価値も無い、ただの石ころでしかないという残酷な現実を否応なしに突き付けられ、そして理解してしまっていた。

もはやこの場で行動を許されているのはリンデイス本人とリンデイスと背を合わせて立つ少女、そしてリンデイスと同等の力を持つ四皇、破天の剣皇・・・レックス・スミルノフの三人だけだという現実。

くカルタロツサく

その頃のエリシア達は流石は蒼の孤児達と言うべきなのかフロルドから建築につれて学んでいた子達を中心に既にそれはもう立派な城かと思う程の建物を建てていた。

それでもどうこう言っても50人近い大所帯。

その上、今は居ないフロルドやリンデイスの執務室や200人以上の人が集まっても会議議会が開ける議事堂、宿屋兼来客用の浴室、厨房付きの部屋も 150室、練武室何かも有る。

その他大浴場、厨房大小等含めて有に300室は有るだろう。

資金は勿論、稼ぎ頭だったフロルドとリンデイスのポケットマネーと商業を学んだ子供達だ（ガゼル、フィルは二人の1/4以下の稼ぎ）。

正直な一般人の感想から言えば、

《ガキの癖に能力高すぎっ！》

……とツツコミぐらひは許してほしい所だ。

フィルは孤児達孤児院に家を建てる事を許可していたがまさかこれほど大規模な物を建てるとは思っておらず途中から呆れ返っていた。だがそれだけで終わらないのがこのメンバーの恐ろしい所。

完成と同時にそこを基点に商業、工業を学んだ者達が商売を開始し、議事堂で学校を学んだ比較的高齢（と言っても15歳前後）の者達は平時に

家の完成と同時に手の開いた建築担当は次に鍛冶場の製作に移っている。

更には手隙の10歳以下の子供達でさえ宿屋として開業したこの家で働いている。

当然エリシアも此処で働いている。

エリシアが担当したのは学校の教師である。

元々人当たりが良く、学園での成績も良かっただけに十分熟せている様だ。

そんな訳で今現在のカルタロツサは実にフィル達がやって来る前の実に100倍近い経済効果を上げている。

ナタル達からすれば嬉しい誤算だろう。

「何と云うか・・・遅たくましいね。
フィル君の家族は。」

ナタルは家が完成してそこで仕事をエリシア達が始めたその日の会議でフィルに語りかけていた。

フィルはそれに、

「恐縮です。」

私もまさか自分の家族のポテンシャルが此処まで高いなんて思っ
てなかったです。

正直みんなポジティブ過ぎです。

ビックリです。」

等と呆れた様子だ。

エリシアはただ感心しながら、

「やはり普通よりも格段に優秀なのですね。」

フィルさん達を見ていて感じてはいたのですが。」

そんな事を言っている。

孤児が普通の子供よりもしっかりしている子が多いのは知っていて
も蒼の孤児達はしっかり者とかそういうレベルではない。

子供は親の背中を見て育つ物だが見てきた背がフロルドでは大き
すぎるのだろう。

そんな会話にリリーが提案を入れる。

「折角だし、もし良ければフィルちゃん。」

このまま此処を拠点に両国の進攻に備えて有志を募ってみたらど
うかしら。」

それにエリシアは反対の意見を入れる。

「それはいけません！

確かに両国の進攻は脅威です。

しかし、此処で人を募れば多くの犠牲が出てしまいます。

元々人口の割に御年子供の若い方と御高齢の方が多く、また守りに向かない地形ですし。」

「確かにその通りだね。

でも対応策は必要だよ。」 ナタル

「判ってます。

だから私達の人数以上の家を建てたんです。

そろそろ各国に散っていた元蒼の院生が集まってくる頃です。

こんな世界情勢で行き成り短時間でこれだけ大規模な物を作る建築技師は早々いませんから蒼の生徒なら気付きます、勿論パパとママも、気付く筈です。

まだ、戻ってはこないと思いますけど。

本格的な迎撃準備はそれからです。

と言う事で取りあえず地形図と地図は有りますか。」 フィル

「流石はリンデイスちゃんの補佐官ね。

はい、こつちが地図でこつちが地形図よ。」

そう説明しながらリリーはフィルに地図と地形図を渡した。

それから直ぐにフィルは二つの図を確認しながら迎撃準備の為にその頭脳を駆使しはじめた。

今現在フィルの頭の中では現在の戦力と軍資金と地形他もろもろの情報が錯綜している。

それから暫くの間フィールは思考の海に潜りそうなのでエリシアはこの時間を使つてずつと気になっていた事をナタルとリリーに聞いた。

「あのすみません。」

ずつと気になっていたのですけれど・・・。

たびたび何かがある度にお名前が出て来られるリンデイス様とは一体どの様な方なのですか？」

それに今までリンデイスの名前だけ出してエリシアに一度もリンデイスについて説明してないのを思い出す。

特に、ジンとメイリンはリンデイスに会った事があり極普通に会話に乗ってくるのでそのままスルーで来ていたのだ。

「そういえば、言つてなかつたね。」

リンデイス君はフロルド殿の妹君、と言つてもフィール君達と同じで孤児院の生徒だよ。

ただリンデイス君はフロルド殿が蒼を造る前から共に暮らしていてフロルド殿にとっては妹であり最も信頼を置いているパートナーでもあるね。

だからこそなのだろうけれど、リンデイス君は蒼で唯一フロルド殿と同じフィードガルドの名を名乗っているね。」ナタル

「それにリンデイスちゃんはまだフィードガルドの名前を名乗っているんじゃないくてそれに見合った才能が有るわ。」

例えばリンデイスちゃんは今、桜剣舞の異名を取っていたり、政治の場でも活躍してるわね。」

そうリリーが引き継いだ。

それから暫く二人はリンデイスの事を話してくれたがその中にリンデイスの短所が上がる事は無かった。

「素晴らしい方なのですね。
リンデイス様と言う方は。」

そう感嘆の声を二人が息切れしたのを見てエリシアは口をはさむ。
同時にその時まで思考の海に沈んでいたフィルが遇えてナタルとリ
リーが避けていた話題を口にしてしまう。

「うん！」

リンママはすごいよ。

美人だし、優しいし、頭も良いし、器用で家事も完璧。

お歌も踊りも他の事もほとんど何でも出来る。

ルーパパとリンママの二人で居ると夫婦みたいだよ。

多分この件か終息したら結婚するんじゃないかな？」

第10章 く分岐する未来・三人の天才、二人の出会い？く（後書き）

興が乗ってたので勢いで突っ走って書き上げました第10章の後編です。

リン& amp ;ソラの視点メインに為ってますが意外な一面や怖い一面が描かれています。

また孤児院メンバー大奮闘、凄まじいですね。

最後にフィルの爆弾投下のオマケまで。

ちなみに三人の天才が誰だか解りましたか？

答えを言うと今後のネタバレになるのでご想像にお任せします。

では、第11章でお会いしましょう。

第11章 く時を刻む者・今は昔、昔は今？

時間は少々遡り、フロルドが牢を破壊し脱獄した翌日、バンはその報を牢番をしていた密偵からの報告で聞く事になる。

バンはフロルドがどちら側にも付く事はないと踏んでいたがその通りに為った事を喜びつつ、反面、最高純度の魔封石で造られた牢を魔力を持って力任せに破ったと聞いて背筋に嫌な汗が伝うのを止められずにいた。そんな最悪の心理状態の中、バンの元にフロルド達と歳の変わらない少年が訪れる。

「なんや用でも有るんかい？」

ブラッディー・クリムゾン。「バン

呼び名からして異名かコードネームと言った所だろう。
ブラッディー・クリムゾンと呼ばれた少年は無言でバンをみ観察している。

その壮絶な瞳を仮に一般人が目にする様な事が有れば間違いなく、ただ一人、氷点下の世界に置き去りにされた様な寒気と錯覚を覚えて震えていただろう。

その少年の瞳は間違いなく人殺しの目だった。

戦場で数々の活躍をしてきたバンにはそれが嫌と言うほど身に染みて判っている。

しかしその目から観てもブラッディー・クリムゾン・・・この少年の瞳は異常だった。

英雄として数々の戦場で何百と言う人間を殺して討つて来たバンでさえ、どれほどの人間を討てばこんな瞳を出来るのか理解出来ずにいた。特一級戦犯者や殺人狂でさえこれ程の壮絶な瞳をした者は存在しない。

少年は隠して居てさえく慈愛に溢れた暖かい輝きを放つフロルド

(エリシアやソラは無意識の内にこの輝きに惹かれていた)とは正に正反対の<呪怨>を纏った絶対零度の暗黒を全身から吐き出していた。

暫く無言で互いを観察していたがブラッディー・クリムゾンの方が先に用件を口にした。

「セキセイガン隻蒼眼が逃げたんだな？」

その耳慣れない単語にバンは思わず聞き返した。

「セキセイガン？」

「なんやそれ。」

「エレメントマスターの事か？」

疑問は当然だがブラッディー・クリムゾンは答えようとはせず密偵に違う質問をする。

「牢を出る時、皇女は存在居したのか？」

密偵は答えて良いものか解らずバンに視線を向ける。

クロスの將軍であるバンの存在を完全に無視してブラッディー・クリムゾンは自分の都合上必要な質問を勝手にしているのだから無理も無いだろう。

しかしその行動はこの少年には取るべきでは無かった。

密偵が気が付いた時には密偵の腕は其処には存在しなかった。

そして有る筈の腕はブラッディー・クリムゾンに引きちぎられその手に無惨にも握られていた。

冷徹な目だった。

地獄と見間違う程の純然たる罪過をこの少年の瞳まへからは伺えた。

まるで其処が地獄であるとも言いたげな目だった。

のたうち廻る密偵にブラッディー・クリムゾンは容赦無くその引きちぎった腕の傷口を踏み付ける。

ブラッディー・クリムゾンの仮面の様な顔を紅く染めながら周囲に飛び散る鮮血の雨、濃厚な鉄の錆びた臭いが薄暗く狭い室内に充満していく、そんな中、傷口近くの骨の砕ける音と密偵の悲鳴が嫌に遠くから響いてきている錯覚を同時に憶える。

密偵はもう既に正気を保てはしない程の恐怖をこの10秒程度の時間に受けていたがバンは突然の非常事態に対処出来ずに目を剥いて硬直してしまっている。

……様に振る舞った。

実際にはバンは密偵が腕を掴まれた瞬間、事態を理解し密偵を切り捨てた。

密偵を捨て駒にする事でブラッディー・クリムゾンと言う少年を試していたのだから、密偵には知る由も無かった。

時間にして30秒程度経過した所で今まで観察を行っていたバンは正気に戻った振りをしてブラッディー・クリムゾンを止めにかかる。しかしこの時バンは自分が見間違いの行動を行っていた事に気付く。観察されていたのはブラッディー・クリムゾンではなく自分の方だった事に……。

それからバンの行動は早かった。

まず事の目撃者である密偵を治療しブラッディー・クリムゾンの質問に全て答えさせた。

更に自分の欲しい情報を聞き出した後、容赦無くその密偵の首を愛用の漆黒の刃をした大鎌・煉獄レンゴクを用いて刈り落とした。

それから元々密会用に作った場所ではあるが死体を含めてその場に誰かが居た痕跡を完全に消し去った後、最後にブラッディー・クリムゾンと共にその場を離れ別の場所で改めて二人は会談の席に着く。

先程の場所とは違い交渉の為に互いのカードを切り始めた。
国の為とは言っても余りにも冷酷、無慈悲な対処選択ではあった。

二人が密偵と交わした会話の内容はこうだ。

「死にた無いやろ？」

ボウズの質問に答えたええ。「バン

そうブラディー・クリムゾンに質問する様に促す。

「エリシエール皇女は奴が脱獄した時居たか？」ブラッディー・クリムゾン

その問いに恐怖で真面に呂律の廻らない中必死に質問に答える密偵。

「はっ、はははっ、はい！いつ、いい、居ました！」密偵

「他に居た人間は？」ブラッディー・クリムゾン

「こっ皇帝とジジイがひっ一人！」

ほほ、他は居ませんでした。「密偵

「奴はどうやって逃げた？」ブラッディー・クリムゾン

「ろっ牢の鉄格子をこっこっこ壊して、それから、てってっ転移で」
密偵

「どんな風に壊した？」

具体的に言え！「ブラッディー・クリムゾン

「まっまるで刃物で、切り、裂いたみたいになっ二カ所、切り
っ切り裂かれてまっました。」密偵

「何故、奴は突然逃げ出した？」

きっかけは何だ？」ブラッディー・クリムゾン

「わっわわっ解りません！」

たったただ皇帝がフッフロルドを脅っ脅しに来て・・・いたのはま
っままま間違いありません。

そっそれが原因、原因なのではなっ無いかと。」密偵

そう言った後、密偵はブラッディー・クリムゾンに顔を蹴り飛ば
される。

「憶測の情報など必要無い！」

聞かれた事にだけ答える！」ブラッディー・クリムゾン

「ずっとびびせん！」

ぼっぼがには何か？」密偵

「逃げた時、^{エリシキール}皇女はどうしていた。」ブラッディー・クリムゾン

「おっ送り、出した・・・様です。」密偵

「その後は捕まったのか？」ブラッディー・クリムゾン

「どどどどちらが・・・ですか？」密偵

「チッ！」

両方に決まってるだろうが！」ブラッディー・クリムゾン

「フツフロルドはゆ行方、不明です。

エリシエールはフツフロルドが逃げた、とつ当初は確認できましたが、いつ今現在はゲート・・・発動により行方不明です。」密偵

「両方行方不明か？

奴の手駒の情報は？」ブラッディー・クリムゾン

「一切、ありませんでした！」密偵

「皇帝とそのジジイのめばしい情報は！」ブラッディー・クリムゾン

「皇帝ははっ二人を逃がした後、後、殺気だつたまつまま居城に戻りました。

ジジイはそれに・・・ついて・・・ついて行きました。

それ以上は解りません。」密偵

「チッ！

役立たずめこれなら自分で調べた方がマシだ。

愚図め。」ブラッディー・クリムゾン

そう言つて密偵を顔面から地面に叩き付けた後、再び密偵を今度は後頭部から踏み付けながら睨み付けた。

足を暫く捻り密偵は床に顔を擦り付けられていた。

それをバンが止めた後、今度はバンが密偵に質問を始めた。

「ご苦労さん。

酷い目に合わせてもつたな、スマンのう！

後はわいの質問に答えてもつたらゆつくり休んだええわ！

今月の給料は期待しとき、臨時ボーナス付けとくさかい。

ほな質問に移るで？

落ち着いたら答えてか？

フロルドと皇帝の会話、ちよつとでも聞いたか？」

暫く震えたまま消沈していたが震えが退くのと共に答え始める。

「はい。

はいっ。

聞けました！

ですが牢から距離が離れていましたから極一部しか……。」「密偵

「構へん！

詳しい教えてんか？

どんな些細な事でも構へんから。」「バン

「解りました。

しかし解るのは皇帝の言葉だけです。

フロルドは聞き取れない様な小声でした。

意図的な物だと思われず。

では……。皇帝はエリシエル……。皇女との婚約を条件にフ

ロルドを前線に送ろうとしていた模様です。

しかし結果から観て断られた様です。

それでも諦めきれ無かったのかエリシエルを餌に脅しを掛けていました。

それも見事にあしらわれていた様でしたが……。」「ですがエリシエルが囚われていたフロルドの元に面会に来たことでどうやら状況が一変した様です。」「

そこでバンは一度口を挟む。

「チヨイ待ち！」

一旦整理するさかい。」

そう言うとバンは右手を腰に当て左手を顎に当て思考の海に潜って行った。

バンは整理すると言っていたが実際にやっている事は整理では無く策を練ったり、不必要な内容の削除でブラッディー・クリムゾンのしていた質問やこれまでに獲っていたフロルドは勿論、カトレア軍、クロス軍の情報等も踏まえた上での一種のシミュレートに近い作業だった。

つまりバンと言う人間にとって一番重要な事象は、

《フロルドに勝つ》

事では無く。

飽く迄も、

《この戦争に勝つ》

事が最重要事象なのでありフロルドと言う存在は、あくまでも勝つ為に排除すべき障害に過ぎず、逆に有り得ない事象では有るが、フロルドが邪魔にさえなりえなければ完全に無視してしまう事も有り得るのである。

またフロルドが後にケイオス相手に危惧していたこの戦争が仕組まれた物である可能性もバンは当然理解していながらも、それでも尚自国の勝利の為に策を練らねば為らない立場でもあった。

本音と建前はあくまでも一致しないのが世の中の仕組みだと言う良例だろう。

そういった意味で言えばバンの本音はあくまでもフロルドと同じく戦争反対派なのであるが・・・、建前は多くの部下や自国を守る為

の軍人であり將軍であり他人^{ヒト}より少し頭が廻り、能力^{チカラ}が優れているだけの凡人でしかないのだ。

それから5分……。

一通り考えをまとめたバンはブラッディー・クリムゾンと密偵に休憩を兼ねた昼食を提案する。

密偵にとってはおそらく最後の食事だ。

そのためバンはその後、殺さなければならぬ部下に贖罪の意味を込めて提案したのだ。

しかしそれをブラッディー・クリムゾンは拒否した。

「こんな役立たずと食事等出来るか！

早く尋問を終らせろ！！」

それがブラッディー・クリムゾンの言い分だった。

それをバンが更に否定する。

「誰のせいや思とんねん。

お前がコイツ、ボコボコにしたせいで治療の為に大量の魔力使こてもたんやぞ。

それにコイツも多量の出血で体力が無^のうなつとるし喉も渴いとるはずや。

そんな状態やと話しもなかなか進まん。

やったら始めにエネルギー補給しといたった方が効率良いんや！

それにワイが腹減ったんや！

誰の所為とは言わんけどな。」

そう言っつてバンは密偵に向き直り問い掛けた。

「そんな訳で何か喰いたいもん有るか？」

大変な目に合わせた詫びに何でも奢るで！

遠慮しなや。」

そう言つて密偵のリクエストを待つて三人は昼食を取りに飲食店に入つて行つた。

時間は戻つて現在。

リンデイスを前に震え上がった部下を従えたレックスとリンデイスとソラの三人が向き合つたまま既に10分の時間が過ぎていた。

静かな10分間だった。

しかし・・・、余りにも張り詰めた10分間だった。

兵の一部は、その緊張感に耐え切れず、気を失っている。

しかし考え方を変えればむしろ気を失っている方がマシなのかも知れない。

これから起こるであろう戦闘は、今以上に緊迫した物に為る事は必死なのだから。

そんな派閥の内部闘争とも言つべき争いを遠巻きから見ている野次馬の一人が呟いた。

「何だよ。」

虹の派閥つっても対した事ね〜な。

女二人に怖じけづくなんて。」

しかし、それは仕方ない事だ。

リンデイスは戦闘準備中に被害を恐れて半径50mの円形の結界を周囲に張り、内と外を魔力、物理の干渉外にしているからであった。

仕方ない・・・、仕方ない事だが一人の野次馬のそんな一言が皮切りになり一気に外野の野次がヒートアップし始める。

もはや外野は止まりそうになかった。

ほおっておくのが無難であるう程に日頃の鬱憤を晴らす為か罵倒し悪態を付き続けていた。

ある意味、一部の構成員がエリートとして威張り散らしている事実への派閥に対しての反発である。

しかし、その野次は今までの硬直が解け戦闘が始まった瞬間に納まった。

リンデイスの張っていた結界が破れ三人の放っていた魔力が津波の様にその結界の中心から押し寄せた結果だ。

遮る物の無くなったその力は、耐魔力の低い一般人を瞬く間に飲み込み意識を奪っていく。

結界内に溜め込まれた魔力が解き放たれた後に意識が残っていたのは僅か16名、残りの人間は全てその場に倒れ伏していた。

残った16名もリンデイス、ソラティカ、レックスの三人を除けば全員震えながら腰を抜かしているような有様だった。

足元が濡失禁した者れている者も少なくない。

そんな惨状を余所に戦闘を続ける三人。

一般人の目にはもはや捉らえられない速度での目まぐるしい移動と攻防が続く。

本来、ソラにはこれ程の超高速度での戦闘はまだ無理だがリンの使った無属性SSSクラス肉体強化補助魔法『ソル・ブレイク』の力でついて行けていた。

ただしこれは一種のドーピングとも言って良く、掛けられる側に適性が存在する変り種の魔法でレックスは勿論、リンにも適用が可能な魔法だ。

ソラは運が良かっただけと言えた。

しかし例え運と言っても言い方を変えれば持って生まれた才能である事は間違いないかった。

そんな正に異常とも言つべき緊迫した惨状での戦いは速度を除くと見た目はかなり地味な物だ。

本来、実力が均衡した相手との戦いに大技は余り必要無いもので有りむしろ邪魔と言つても良い。

大技は当たれば良いが外せば只の良的に外ならない。

その様な愚を犯すほど三人は愚かでも無ければその事が理解出来ない程戦闘経験が無い訳でも無い。

始めから大技を出すのはフロルドの行つていた戦闘の様な実力差が極端に開いている時に限られる。

それ故にお互い、回避は相手の攻撃を回避かわすか受け流すかの回避方法が普通であり、罅迫り合い等の金属同士の激しい激突音等は一切聞こえない。

また攻め方も相手を倒す為の大振りは一切せず足元を薙なたり手を銃撃しての態勢を崩す攻めか、動作が小さい連突きによる急所攻撃だったりと、とにかくひたすら繊細な攻防が続く。

と見えやはりそこは二対一である。

時間が経つに連れてリンデイス達の方が有利に為つて来ている。

正確には開戦直後からやたらと息の合ったリンデイスとソラティカの連係攻撃にレックスがお圧され気味では有つたのだが、戦闘時間が経つに連れてリンデイスの力に引き摺られてソラティカが実力以上の力を発揮している為だ。

そしてそのソラティカにつられてリンデイスもまた実力以上の力を発揮している。

幾ら実質、同ランク同士の戦闘と言つても防ぎきれぬ物ではない。

しかしそこは四皇の一角を担う者である不利と見るや戦闘スタイルを切り替え、策も切り替えてきた。

リン達が激しい戦闘を繰り返している頃、カルタロツサのエリシア

達はフロルドとリン達の行方を詮索する為に蒼の情報網を一箇所に集める事での確に管理する事を目的に造られた情報拠点と言つべき場所、^{アミヤ}天宮と名付けられた社^{ヤシロ}に来ていた。メンバーはナタル、ガゼル、フィルにエリシアの四人である。しかしその中の一人エリシアは傍目にも解るぐらいに落ち込んでいた。

理由は二つある。

まず一つ目は社の有る場所である。

社はフロルドの作った空天の門と呼ばれる門を^{クッゲウ}空宮の鍵と言つリンデイスが作った鍵でもって初めて入れる上空1万2000メートルの特殊な雲の中にある、そして社は魔力を溜めやすいと言つ理由から全体が非常に透明度の高い天然水晶で出来ていた。

つまり傍目には空中を歩いている様に見えてかつ、その上を歩いている人には地上が見渡せるのである。

つまり結論は………。

エリシアは高い所がダメ、高所恐怖症なのである。

来るまではこんな所だとは知らなかったため平気ではあったが来た瞬間からこれである。

二つ目は天宮に移動する際襲った感覚、丁度エレベーターが動き出した時やフリーフォールの落下直後の感覚に泥沼に全身で浸かっている様な感覚を併せた何とも言えない気持ちの悪い感覚に到着するまでの5分程度の間中ずっと襲われていたのだ。

その結果この場所に来慣れていないナタルとエリシアは酔ったのだ。特にエリシアは根がお嬢様な為より酷い結果になった。

この二つの理由によりエリシアは完全にグロッキーな状態を現在進

行形で、維持し続けている。

フィル達はそんな状態のエリシアを気遣いつつフロルド達の行方を探し初めている。

そんな中リン達の行方は直ぐに見つかる。

元々隠れるつもりが無かったリン達は複数の場所に自分達の痕跡を残していたらしい。

事実リン達は派閥に見つかっている。

その痕跡の多さに半ばナタルは呆れ混じりの苦笑をしつつフィルを見る。

それにフィルは軽く頷いて呟いた。

「困になんて為らなくても平気なのに。

リンママは心配症何だから・・・。」

「でも心配だね！

いくらリン君が強くても足手まといが居たのでは勝てるものも勝てないからね。

援軍を出した方が良くかもしれないね。」 ナタル

そう言っただけで自分達の戦力の分配方法を考え始めた。

それにガゼルが意見と言うよりも感想と言っただけの見解を述べる。

「リンに援軍なんていらねえよ。

あいつまだ本気じゃねえし。

あのソラティカって女もリンの補助が有るけど今、カルテッドSSSSぐらいには使えるみたいだしな。」

そんなガゼルの意見にフィルは了承の相槌を打つ。

フィルが同意するとは思っていなかったナタルはこの反応に驚いたようだった。

それを見たファイルは補足の説明を入れた。

「この馬鹿、頭はお猿さん以下だけど戦闘能力と野性の感なのか他人の力を見抜く才能だけは私達の中闘能力でも一、二を争うくらい優れてるから意見の採用に問題は無いよ。」

仮にも紅蓮の最年少入団記録保持者だから、認めたくないけど。それが無かったら私達が例えルーパパが許してもこんな役立たずに居場所何かやらないよ！

「この愚図野郎!!!」

そう一々一言多い台詞と共に言い切った。

その後、エリシアが蒼い顔のままガゼルに問い掛ける。

「ソツソラティカさんカルテット下つがSSSSクラスと言うのは、は、本当、ですか？」

その様子に渋い顔をしながらガゼルは、

「大丈夫かよ？」

まあ、あの女、リンとは相当、相性が良いらしい！

そのせいで初めて会った時と比べて別人みてゝだ。

下手すると蒼の五指と同格かもな。」

そう補足する。

蒼の五指とは言葉通り蒼の翼の中でも特に特出した力を持つ者達だ。例外のフロルドとリンデイスの二人を除けば正に

《蒼の顔》

と言って良かった。

フィル、ガゼルは勿論、五指の内に入るが、残り三人は現在外で単独行動中のため行方知れず。

フィル達二人は二人で他の三人を探す気が無いらしかった。探す必要も無いのだろう。

必要なら独自に接触して来るはずだからだ。

ちなみに五人の中ではフィルはNo.3でガゼルはNo.5に当たる。

しかしフィルはいずれはNo.1か例外の一人に成り得る人材で自然周りの期待は大きかった。

話しは戻って社、ガゼルの話しを聞いたエリシアはただでさえ凹みまくっていた所に別れて一月にも満たない間に嘗ては自分の方がランク上位にいたにも関わらずソラにぶつちぎりで置いて行かれた事で放心状態で床に指で円を描いていた。

余程ショックだったのだろう。

しかしそれもある意味仕方ない。

ソラの指導者^師はリンデイスでありリンはソラと生れつき相性が非常に良い上、元々才能の方向性がエリシエールとソラティカでは違うのだから。

しかし今のエリシアには言っても仕方ないのでフィルはエリシアが多少なり気を取り戻すまでそっとしておく事にしたようだ。

そんなやり取りをしている間にリンデイス達の戦況は1対2の状態に致っていた。

丁度リンとソラの二人が互いにオルフレアに罵倒された直後のようだ。

その光景にナタルは少し身震いし、フィルは目を輝かせ、ガゼルは一言呟いた。

「馬鹿な奴。」

普段はともかくキレたら蒼で一番手が付けられないのリンデイスだつてのに！」

これは事実でキレたリンデイスをなだめられるのは現状フロルドとフィルだけである。

それから暫くフィル達はリン達の戦闘を横目にフロルドの行方を探しはじめた。

しかしフロルドは行方処か痕跡すら一切掴めない。そんな状況でやっと

落ち着いた………？

様に見えるエリシアがそれでもまだ高い所が怖いのか足を震わせながらフィル達にゆっくり近づいてきた。それに気付いたフィルがエリシアの元に小走りで駆け寄りその白雪の様な手を取りエリシアの顔を心配そうに覗き込んできた。

「ごめんね！」

お見苦しい所をお見せしてしまいました。

御心配お掛けしてしまいましたよね？

もう大丈夫ですから。」

そうエリシアは最初の言葉はフィルに後半は全員に対して話し掛けたがその言葉はやはり振るえていた。

それに気付かないふりをしてフィルはエリシアに問い掛ける。

「本当に大丈夫？
無理し無くていいよ？」

私達でルーパパ達の詮索は十分出来るから休んでても大丈夫だよ？」

それにエリシアは、ゆっくりではあるがはつきりと、

「大丈夫です！」

これ以上ソラティカさんに置いて行かれる訳にはいきません。
足手まといには足手まといなりの意地がありますから。」

そう言いながらも立体パネルの操作盤に手を掛け作業を始めた。
しかしエリシアには凹んでいたため操作方法を教えていない事に気が付いたフィルは慌てて説明をしようとエリシアに声を掛けた。

「あっ！」

待って今、操作方教えるから。」

「大丈夫です。」

先程見させ頂いて大体把握できましたから。」

そう微笑みながら答えエリシアはこの場に居る誰よりも早く正確に
天宮の機能を使い熟し始めた。

そうこれがエリシアの本来の才能だった。

エリシアはソラの様に戦闘能力には優れてはいない。
かと言って戦闘^{後方}支援に優れる訳でも無い。

つまり皇族としてのカリスマ性とデスクワークや交渉と言った内政
や外政に特化した政治能力がズバ抜けて高い生来の統治者。
それがエリシエールだった。

エリシアが作業を始めて僅か10分………。

三人掛かりでも一切掴めなかったフロルドの行方……。その痕跡が初めて見つかる。しかし、その痕跡は4人を戦慄させる事になる。

痕跡が見つかったのはクロス領トルカナ湖。しかしそれは有り得ない。

見つかるはずが無い、何故なら痕跡は今から10年以上昔のトルカナ湖。

その湖底である筈の場所で見つかった。

子供の頃のフロルドの痕跡（この痕跡が見つかったとしても十分問題では有るが）、では無く今のフロルドの痕跡が……。である。

「どう言う事でしょうか？」

これは？「エリシア

「判らない。

もう少し詳しく探れないかな？」ナタル

「やってみます！」エリシア

そうこうしている内に画面に映るリンデイス達の戦況に変化が起こる。

戦っている二人にとっては好むばしくない方向で……………。

徐々にレックスを押し始めていたリンデイス達では在ったが事態は一瞬で暗転する事になる、一言で言えば邪魔が入ったのだ邪魔をしたのは思いもしない人物だった。

邪魔をした人物それはタツミだった。

しかしその目は完全に白目を剥いていた。

気絶したままの状態でレックスに操られているのだった。

その非人道的な戦法にリンデイス、ソラティカは激怒するも操られている人達を傷付ける訳にもいかず戦況の変化後、五分もしない内に二人は完全に追い詰められていた。

その光景に四人は先程の自分達の判断が間違っていた事には気付いていたが今更助けに行った所で間に合わない事にも気付いていた。

《甘かった……………》

その一言に尽きる。

「ママ……！」

フィルの悲痛な叫びと共にリンデイスとソラティカは人形と化した人々に飲み込まれて行った。

場所は変わってアサヒの墓前、フロルドはまだ背後の人物に顔は向
けず。

また、立ち上がる事もしなかった。

シヤラ達も背後の人物に気付きこちらは顔をそちらに向けている。

当然ながら彼等に背後の人物に対する警戒はない。

また背後の人物も特別変わった様子を見せてはいなかった。

それこそ始めにフロルドの背を觀察_ミて見せた表情等何処にも存在し
ない。

その人物を知る人々にとつてはごくごく普通の普段通りの姿、俗に
言う“自然体”と呼ばれるある種の人としての悟りの到達点に達し
ている人物がそこに存在しているだけだった。

後ろを振り向かないフロルドにシヤラは気付いていないのかと思い
込み声をかける。

「ケイ様、御祖父様、神官長様が来られたんやけど？」

後ろに居てはるから紹介するわ。」

それを御祖父様と神官長と呼ばれた歳は80歳程に見える老人が制
止した。

「シヤラ、イツキ、その様な事は後で良い先ずは、こちらに来なさ
い。」

何故呼ばれたのか解らないまま二人はその人物に向かって歩いて行
く。

フロルドはそれに合わせて非常にゆっくりと、しかし見ている者の
目を引き付けて放さない不思議な立ち振る舞いで相変わらず顔は墓
石の方を向いたまま立ち上がり静止していた。

その背にまたシヤラが手でその人物を示しながら声を掛ける。

「ケイ様、この方がウチの御祖父様で神官長を勤めてはる玄武針様
や。」

紹介を承けたにも関わらず、フロルドはそれでも振り返る事はしな
かった。

代わりに先程迄の多少事務的な口調だか暖かみのある声では無くま
るで吹雪の中に居るような寒気のする声でゲンブシンに話し掛けた。

「久しいな、ゲンブシン？」

イヤ、トルカナの死神と呼んだ方が良いかな？」フロルド

その台詞にゲンブシンは老獪な笑顔で、

「母君は元気かね？」

と問い返してきた。

そんな二人の会話は周囲の者達には噛み合っていない様にしか見え
ない。

ましてフロルドは冷徹な声音でゲンブシンは朗らかな声音で話す物
だから尚更だろう。

しかし二人には十分過ぎる位に通じていた為そのまま周囲を無視し
て二人は話を続ける。

「今だにトルカナに抱かれたままだな。」

しかし出世した物だ。

神官長か……。

忌み狩りはそれほどの大役か？」フロルド

「そうじゃな。」

忌み狩りは神族の者に置いては最大最高の神事それを完遂したのじゃ。

当然よな。

そしてまたその忌み狩りが行われる事が決まった。

良い事じゃて。「ゲンブシン

「また新たな時詠を狩ると？」

16年前の様に……………」フロルド

「嫌々、16年前と同じではない！」

それ以上の忌み狩りじゃ。

当然じゃろうて。

今回は時詠の血筋でありエゼルの血筋であり臨界者でありまた魔眼持ちでもある。

しかも本来、時詠の能力……時軸操作の能力は女子おなこにしか発現せんと言うのに男子おのこの身で発現させた余りにも特出した異能者じゃ。

その者の名は、……………」フロルド・圭夜ヨシヤ・フィードガ

ルド・ランフォード。

マスターエレメント・オブ・キャスターマスター、の名を冠した邪術師である、彼の

者の狩るのじゃから。

のう、そうで有ろう？」

圭殿ケイ？

それとも……………」フロルド殿……………」の方が良かったかね？」ゲンブ

シン

そう言つて声高に笑つた。

その会話を聞いていたシヤラ達だったが全く状況が掴めないでいた。先程迄、ケイ様と呼び好意を寄せ始めていた男性が忌人イミヒトだと言われ、かつその人が今、最も世間に名を知られた魔導師のフロルドだと言われたのだから尚更だ。

混乱を無視して肯定も否定もせずにフロルドは選り状況を混乱させる事を言い始める。

「さすがは神官長様、高潔でいらっしやる。

「……そう言っつて父、ワイズリー、母、サクヤとその付き人呑み為らず何も知らず里帰りに同行した者達全員を”アサヒ叔母上”諸共シャラとイツキの目の前で忌み狩りの名の下に殺したのだな……。」

御祖父様、貴殿は。」

その台詞と共に振り向いた美しい青年の瞳は言葉の冷淡振りとはちがい深い哀しみと悲嘆が漂っていた。

しかしゲンブシンはそんなフロルドの顔を見るや嫌悪を顔と声に滲ませる。

「……何と悍ましい。」

忌み巫女と見間違ごうたわ。

それとのワシにはサクヤ等と言う娘はおらんし孫はシャラとイツキの二人だけじゃ。

汚らわしい！

それにのイツキ達の母を何故ワシが殺す必要があるのじゃ、第一、二人とも母の死を見てなどおらん。

世迷言を言うで無いわ。

何をしておる忌人を討ち取るんじゃよ！！」ゲンブシン

そう言いつつもゲンブシンは暗殺用の鋼針をフロルドに投げシャラを後ろに下げる。

それをフロルドは片手で全て掴み取りながらシャラとイツキを始めその場に居る者達全てに語りかけた。

「事の判断は自分達で決めろ！
他人に判断を任せるな！
いいな？」

そうは言った物のフロルドは彼等から自分が信じてもらえる様な信頼関係は築けていないし、ゲンブシンの攻撃が激しく余り彼らを説得する様な事に口を開いている余裕も無い為この程度では彼等は止まらない事も判ってわいた。

実際、彼等の多くはフロルドに襲い掛かって来ている。

それを上手く捌きながらフロルドはゲンブシンに永年、本人の口から聴きたく思っていた事を口に出した。

「ゲンブシン、忌人とは何だ？」

神に背いた者か？

神族を辞めた者か？

時詠で在る者か？

私の様に人としての禁忌臨界者に触れた者なら忌人と呼ばれても仕方ないのは認めよう。

しかし、アサヒ様叔母上は姉君であられたサクヤ様母上を庇われたただけだ。

だと言うのに何故、サクヤ様母上ごとアサヒ様叔母上を討った！

何故、神域に踏み込んでもない里帰りしただけの同郷の者達を討った！

答えよ！

ゲンブシン！！」

流石にこの言葉にはゲンブシン以外の者は動きを止める。

その一瞬の隙を付きフロルドは傀儡クゲツと入れ代わる。

その事には気付かずゲンブシンはくぐもった笑い声を上げながらその質問に答え様とした。

しかしそれよりも早くシャラとイツキが震える声でゲンブシンに問

い掛けていた。

「御母様を・・・御祖父様が・・・殺した？

他の・・・神族の・・・人等まで？

ほんまに・・・？

・・・何で・・・何でなん？

・・・何で！！」シャラ・イツキ

それを聞いたゲンブシンは二人の孫に目を向けながら人として口にしてはならない台詞を口にする。

「愚か者！

忌人に毒されおつて、もう良い不信心者は死して神に購うが良い！

ああ、それから、お前達小娘シャラに次の巫女を産ませよ！」

それと同時にイツキはゲンブシンの攻撃に曝される。

またそれを聞いたシャラに好意を寄せていた男達が一斉にシャラに襲い掛かる。

しかしゲンブシンの攻撃も男達も動いた瞬間弾かれる。

先程、傀儡と入れ代わったフロルドが止めたのだが状況が判つたのはシャラを襲わなかった者とイツキとシャラにゲンブシンの極少数だけだった。

そのままゲンブシンを牽制しつつフロルドは二人を連れてゲンブシンから大きく距離を取る。

距離を取ると同時にシャラから声が掛かる。

「ありがとな。

ウチ役立たずで敵仇の孫やのに、何度も何度も。」

その台詞をフロルドはゲンブシンを睨んだまま聞いていた。

だがこの時フロルド以外の者は気付いていなかった。

此処が16年前の世界でトルカナ湖の湖底であり今、正にゲンブシ
ンによる虐殺が行われている最中だとは。

なぜなら景色にまるで代わりが見られないからだ。

早い話が空間を今と昔で入れ替えた訳だが、それだけではこの空間
は湖底の水で埋め尽くされてしまおうし、タイムパラドックスもお越
し兼ねない。

と言うよりも確実に起こすだろう

そこでフロルドが探ったのは高位現実（ハイ・リアリティー又はア
パ・リアリティー）と言われる位相のズレた過去に飛ぶことで位相
相互の干渉を不可にすると言う禁忌ギリギリの時空転移魔法タイムゲートの使用
と言った行動だった。

逆に言えばその位相のズレが墓前から湖底に飛んだ原因でもある。

そんな状況だが知らない事実は対処出来無くて当たり前。

当然の様に玄武針と神兵達の猛攻は続く。

そんな状況ナカでイツキは刃を取る。

イツキの槍は一直線にその軌跡を描き疾走する。

相手の命を確実に絶つ無慈悲な一撃。

しかしその一撃は一振りの長剣によって防がれるが勢いに圧された
のか相手は大きく弾かれる。

イツキの体格は大柄なガゼルと比べても一回り程大柄だ。

その巨軀から繰り出される一撃は並の人間では防ぎきれない。

ましてその相手が小柄で軽い人間なら吹き飛ばすのは容易だろう。

そうフロルドの様に女性の様な体格の人間にはイツキの一撃は重過
ぎる。

まともには受けきれない事が判っていたからこそイツキは自身に出
来る渾身の力を持って最速の突きをフロルドに向けて放ったのだ。
フロルドが吹き飛んだ理由が判らず当惑の表情を浮かべた周囲だっ
たがイツキが槍を突き出している姿を見てシヤラが声をかける。

「あんたまさか！

イツキ！

あんたがやったん！？」

「他に居るか？

ゲンブシン様らに気く行つてたから楽やつたは。」イツキ

その返事を聞いてシヤラは鋭い目付きで睨みながらイツキの頬を思い切り叩いた。

「正気なんか？

うち等を助けてくれた人を不意討ちで殺すやなんて正気の人間のする事や有らへん！

それが判らんあんたや無いやる！」

しかし、シヤラの叱責に反してゲンブシンはイツキを褒めていた。

「ようやったイツキ、忌人を討つたのじゃ先の件は不問とする。

そのまま次の巫女作りしてくれるかの。」

一瞬訳が解らなかつたシヤラだが突然、押し倒され眼前の人物を見て理解してしまった。

自分は今、弟に襲われているのだと。

ゆっくりとイツキの手が伸びて来る。

抵抗しても微動だにしないイツキにシヤラは顔を強張らせ、叫ぶ。

「やめてイツキ！

ウチら姉弟やで、こないな事許されへん。

やめて！！」

しかし無情にもイツキはシヤラに手を伸ばす。
止める気は無い様だ。

それに気付いたシヤラは蒼い顔で目に涙を湛え抵抗を諦めた。

「御盛んな事で！」

俺の事忘れてね？」

その声を掛けられたのは正にその瞬間だった。

イツキとゲンブシン以外の者の振り向いた顔は化け物を見た様な顔だった。

それでもそう見えたのは一瞬で既に兵達はフロルドを見て笑い出した。

吹き飛ばされた事でフロルドの服がボロボロだったせいだ、死にに
来た様にしか見えない有り様で有った。

現実にはフロルドは傷一つ負ってはいない訳だが。

しかし経験の浅い兵達にはヤケクソを起こした様にしか見えてはい
なかった。

そのため次の瞬間起こった出来事に全く対処出来なかった。

突然目の前の景色に観たことの無い人物が複数現れて会話を始めた
のだ。

いや、正確には会話の途中でしかもその人物達はこちらに全く気付
いていなかった。

「その娘が次の？」女性1

「エエ、正確には次の次、二代先の・・・ね。」女性2

「そう、ほら二人ともシヤラちゃん達に御挨拶して？」

貴方達の従兄弟のシヤラちゃんとイツキ君よ。」女性2

「・・・・・・・・・・。」男の子×2

「あらあら照れちゃって。」女性1、2

「違う！

僕はその子を殺すから！

だから必要無い！」男の子1

「レイ兄ちゃん？」男の子2

「アハ！

ほら死に神が来た！」レイ

『ドス！』

「サクヤ姉さん？」女性2

「母さん？」男の子2

「こつれ・・・ば？」サクヤ

自らの胸を貫いた光の槍・・・・・・・・『神法・光牙^{コウガ}』を見つめながらサクヤは口から血を流しながら眩き死んで行った。

「忌み巫女が早様死ね！」????

そこにサクヤを討つたと思われる人物。

若き日のゲンブシンがまるで汚物でも見るような濁り切った目でサクヤを見ながら現れる。

「……………どうだ自分の娘を殺す瞬間をもう一度客観的に見るのは？」

位相が違うからなサクヤ様を助ける事が出来ないのが残念だが……。
「フロルド

あえて母とは言わず主君で在るかの様に話ながらゲンブシンの様子を伺う。

その一方でサクヤの傍で高らかにレイが笑い声を揚げていた。

その横ではもう一人の女性がサクヤを抱き上げながら必死に声を掛けていた。

その女性に双子の片割れの男の子が信じられない言葉を掛ける。

「……………母は亡くなりました！」

アサヒ様はシャラ様、イツキ様を連れ……お逃げ下さい！

母が討たれた以上私も討たれる事に為るでしょう。

さあ、お急ぎ下さい。」

そう話す男の子の声には何の感慨も恐怖も怒りも哀しみも無かった。ただ全てを悟りこれ以上の悲劇を起こさない事だけを考えている事が伺える。

それがアサヒには混乱した頭でも理解出来てしまった。

とても物心の付いたばかりの子供の台詞ではない。

しかし、その言葉を聞き黙って縦に首を振れる程アサヒは大人では無かった。

一言、

「二人をお願いね。」

そう言つてゲンブシンを睨み付け神法の詠唱を始める。

それを見てゲンブシンがアサヒをも標的として認識したのが殺気から理解できたがそれよりも先に戦闘は始まつていた。

肉体強化神法と思われる力で強化した筋力でもつてレイがシャラ達を襲つたのである。

「心配しなくても後でフロルド！」

お前も殺してやるよ！」レイ

「止めてレイ兄ちゃん！」

しかしそのレイの攻撃は同じく肉体強化魔法と思われる力で、フロルドによって阻まれていた。

その頃天宮では傀儡化した人々に飲み込まれて見えなくなつたりンデイス、ソラティカの二人を救出しようとナタル達は戦闘準備を進めていた。

とは言え戦力不足は否めない。

蒼のクルーで腕の立つ者は今殆ど出払つている。

かと言つてナタル達エルフ・・・亜人が大挙して攻めるのはかろうじて均衡している三国間の均衡を崩す結果にしか成らない。

そうなれば一時的にはリンデイス達を助けられても次からは更に危険な立場に自分達を追い込んでしまうのは明白だった。

それでもやはりリンを失う事は蒼やナタル達、そして何よりフロル

ドと言う存在にとって最も避けるべき事象なのも事実だった。

「問題はこの面子でどうやって二人を連れ出すかだ……。」ガゼル

「判ってるわよ。」

今、考えているんだから、黙りやがれこの筋肉バカ。」フィル

「ア、ハハハ……。」

その、気にしない様にね？

ガゼル君。」ナタル

そんな中、エリシアは画面を操作し人々に飲み込まれたせいで見えなくなったりリン達の状況を確認しようとせわしなく指を動かしていた。

しかしリンデイスとソラティカはまるで確認出来ないでいた。しかし、横からリンデイスに声を掛けられる。

「エリシエール様、聞こえておられますね？

フィル達わたくしに私達は無事ですと。

お兄様……失礼致しました。

兄、フロルドと合流いたしますので湖底の映像を御覧下さいとお伝えください。」

「そんな馬鹿丁寧になわなくても平気よ。

相手が皇族でもね。」

違うか、皇族だから必要ないわ。」ソラ

そう巨大な白狼アイスルバインと呼ばれる魔狼に膝を揃えて座り、輝く白狼アイスルバインの毛を撫でながら実に優雅に話し掛けてくるリンデイス。

ソラティカはその後ろで女の子座りで片手をエリシアの腰に廻しな

がら空いた手は同じ様に白狼を撫でていた。

その呼び掛けに目を丸くしてエリシアは数秒固まっていたが直ぐにフィル達を呼びに走った（その途中慌て過ぎてコケていたが当人以外は気付いてはいなかったようだ）。

少ししてフィル達全員がスクリーンの前に集まった。

暫くは泣き出したフィルを宥めるのに気を割いていたエリシアとリンドが泣き止むとすぐに状況確認の為にリンの話の聞き始めた。

「私達はレックス様の傀儡と化した人々に飲み込まれる寸前にお兄様より頂いていたこちらのアメジストの力により、お兄様の近く。」

と言つても10Km程離れておりますが・・・に転移されました。ちなみにこの狼はお兄様とは古くからの知己でアルフリルと言います。

アルフ、ご挨拶をお願いします。」

そうエリシアは髪をかき上げ耳に光る非常に大きなアメジストのピアスを見せた後、アイスルパインに顔を向けるとそのアイスルパインが続けて口を開く。

「魔狼の一種、白狼のアルフリル・ガル・フィンだよろしく頼む。」

それからフロルドからの伝言がある。

先ず、我はこれより本来の主で在るリンデイス、ソラティカの元に戻る様言付かっている。

それから乙女達よ。

心して聞くが良いお前達のこれからに深く関わる事柄だ。」アルフ

そう自らの背にゆられる二人の少女達に軽く視線を向けながらしかし歩は止める事なく語りかけてくる。

その静かな威圧感に身を委ねながら二人は頷いた。

第11章 〽時を刻む者・今は昔、昔は今？〽（後書き）

前回更新からかなり時間が空きました、更新を楽しみに為さって居られた方には申し訳ありませんでした。

何れも此れも仕事が悪いんです！

何でこの数週間の間、同じ職場内で私だけ徹夜が続くですか！

巫山戯すぎです！

人を殺す気ですか！

とまあ、言訳プライベートな事態はこれ位にしてお知らせです。

遂に別サイトの進行に追い付きました。

よって、第11章はまだ続くのですが、一旦アップします。

これにより、更新に掛かる時間が今までより遅くなると思いましたが
ご容赦を。

それとお約束道理、別サイトの名前をお教えします、” E - エリ
ス ” サンです。

には任意で文字を入れて下さい。

それでは本文についてですが、この作品の主人公5人何ですが5人
目殆ど出てませんゴメンなさい！

それでストーリーを観てもらえば解る事ですがこの作品はフロルド
君の視点を時間軸に各主人公の行動を出来るだけシンクロさせて書
いています。

天宮なんか良い例ですね。

後、判りにくいですが所々に爆弾ネタ仕掛けてます（重要そうなのに
早々に消えたアレとか）。

場面の切り替わり、主人公の切り替わり激しくて申し訳ない気もし
ますが人と人の互いへの影響とか思いの形とかは余り一人に時間掛

けても（長文にしても）逆に解りにくいかと思いついて短文で視点切り替えしまくってます。

ただこの書き方各キャラの進行状況つい忘れちゃうんですけど。

それでは皆さん至らない事も多いですけど最後までフロルド君達に付き合ってもらえると嬉しいです。

（別サイト作者からのメッセージより一部抜粋）

第11章 く時を刻む者・今は昔、昔は今？（前書き）

大変遅くなりました、おまけに量も少なく、まだこの章は続くと言
うダメっぷりです。

言い訳は後ほど、ではでは。

第11章 く時を刻む者・今は昔、昔は今？

密偵との最後の食事の後、バンは再び密偵に質問を再開する。

因みに食事への誘いに渋っていたブラディー・クリムゾンだが実は三人の中では一番多く食事を摂っていたりする。

「ほなら、フロルドと皇帝の話の内容が一変した所ここからもう一篇話してんか？」バン

そう言うと密偵は頷きながら口を開く。

「解りました。

フロルドは皇帝をからかい半分に挑発していたと思われるのですが、偶々その内容がエリシエールの登場で実現可能に成ってしまった物と思われます。

その事は皇帝と共にいたジジイのタイミングが悪いとでも言いたげな表情と皇帝の卑下た表情から推測できます。」密偵

其処で小声でバンが呟く。

「成る程のう、そのジイさんは常識人みたいやし、エリシエールを孫見とるみたいに思ってたんやろつ。」「バン

『これは、ほぼ間違いなくそのジイさんはガイアのジイさんと見て間違いないやろつ！』

そうその人物が誰かを心中で正確に推論しつつ密偵の話に再び意識を集中する。

バンの呟きを聴きつつ密偵は話を続けていく。

「その後、数十秒皇帝の命令の内容を聞いていた三名ですが、途中でエリシエールが舌を嚙んだ模様です。

倒れたエリシエールはジジイに抱き留められ、ジジイの治療を受けておりましたが余り治療系が得意で無いのか上手くいっていません。た様です。

その光景を皇帝は呆然と見ており、直後にフロルドが牢を切り裂き治療を実行しますが、その折り、フロルドの様子にジジイと皇帝がフロルドが魔眼の持ち主だと、確かに「サファイア」と言っていたと記憶しております。」

それに僅かにブラディー・クリムゾンが口角を歪めていたが二人の死角に居た為に、二人は気付く事は無かった、一方でバンは、サファイアと呼ばれた魔眼の事を考える。

「サファイア、確か瞳の色により性能の違う特殊な魔眼、性能は未知数で詳しい事は一切不明ときとる、何で彼奴はこいつも厄介事を一人で持つて来んねん！」

魔眼なんざ使用せんでも十分、厄介や言うのに、とんだ疫病神やな、ホンマー！」

魔眼・・・・

魔眼とは瞳に特殊な紋章・・・・ペンタグラム五芒星やヘキサグラム六芒星を始めとした魔方阵と呼ばれる紋章が刻まれていたり、瞳孔の形が蜥蜴の様であったり、多角形であったりと異形の物を指す。ゴルゴニアアイその性能は様々で有名な物はイビルアイ石化眼、フェアリーアイ邪眼、フエアリーアイ幻視（精霊）眼等がある。

何れも使用には魔力を消費するが発現が容易で有り使用魔力も単純

に同効果の魔法を使用するよりも軽微で抵抗が難しく、術師の能力使用時の暴発の危険性が少ないと言った利点がある。反面、精神面の未熟な者が使用すると被術者が一生術より解放されないと言う欠点も有るが訓練すれば解ける様にも成る為、一般的には、重宝がられる傾向がある。

オツドアイ・・・・・・・・

オツドアイは魔眼には該当しない、瞳の色とは属性を示す為オツドアイで有ると言う事は生来の強力な多重属性所持者^{エリート}で有る事を示す為、魔導師の間では歓迎される傾向にある。

オツドアイの所有者の間には稀に逆属性の能力所持者も居る。

属性・・・・・・・・

属性はその個体の固有性質で有り、その性質は瞳の色や髪の色に現れ易く、比較的判断しやすい。

しかし、属性が見た目に現れない者も当然居り、一概には言えない。属性には様々な物が有るがその個体の有する属性が一番その個体と相性がよく反面、逆属性の相性は悪い傾向にある。

そうは言っても後天的に属性が変質したり、全属性の適合者が居るなど相性に関しても一概には言えない傾向にある。

サファイア・・・・・・・・

魔眼の一種、魔眼の中で唯一呪われた物とされる魔眼。

その色により性能が異なるとされるが、その性能は謎が多く、また、種類、判別方法等も不明である。

所有者自体も非常に少なく、所有者自体が気付いていない可能性も高い変わった魔眼である。

そう考えながらもバンは密偵の報告を聞く。

「フロルドは二、三、エリシエールとの会話の後、ゲートの発動によりその身を消しています。」

その後はフロルドの逃亡を間接的には言え手助けした形になるエリシエールに対して、皇帝とジジイによる詰問が行われていたが、その返答に激昂したのか皇帝がエリシエールを反逆罪での拘束を命令。

それに対してエリシエールはフロルド同様ゲートによる逃亡を決行、その後の行方は一切不明です。

以上が今回の事象に対する此方で伺える事の顛末です。」

そこでバンは密偵に労いの言葉を掛け、退室を促すと背を向けた密偵の首を音も無く刈り落として全てを消し去った。

（トルカナ湖（過去））

幼きフロルドの実兄レイに対する悲痛な訴えを無視してレイの神法による猛攻は納まるうとはしなかった。

繰り返される神法は術の発現こそ起こってはいないがそのどれもが天才と呼ばれる神属の者でさえ詠唱破棄出来ない様な高位の物ばかりで構成された全くと言って良いほどに空きの無い洗練された攻撃だった。

その攻めを防ぐフロルドも又同様の洗練された動きを繰り返し繰り返して行った。

直ぐ近くで戦うゲンブシン達、それに従う忌刈り部隊に周囲を包囲されながらも互いに舞う事を止めようとはしない二人の子供。

よく見れば二人は互いに相手の使う奇跡の法を確認する事無く同時に逆属性・逆位相の術を当てて打ち消している事に気付いたで有る

うが最初の衝突以降互いに術をぶつけ合っている様には周りには見えていない、発動前に消え去る力に気付けないでいるのだ。

位相………

術に込められた力の波動。

逆位相とはある力の波動を基準とした時に逆方向の同等の強さの波動の事。

音波等と同じイメージ。

しかし、そんな死闘も長くは続く事を許さなかった、打ち消す力の膨大さに当人達では無く周囲が持たなくなり始めたのである。

空間崩壊の始まりであった。

空間崩壊……

空間崩壊は数種類の分類が存在するが、今回の事象は二人の魔力が行き場を無くした事が原因の魔力の暴走、最もポピュラーな空間崩壊であり被害範囲の広さが特徴でもあった。

そんな状況に到ってもレイは手を止めなかった、それどころかこの状況で同時に行っていた接近戦闘の比率を更に増やして来たのである。

素手の二人は蹴撃ケリを中心として攻め立てる、しかしその一撃一撃が

地を裂き、岩を砕き、大木を押し折る。

とてもでは無いが周囲の人間には手に終える争いでは無かった。

その死闘の近傍で対峙したまま様子を伺うゲンブシンとアサヒは・
・、と言うと互いに高位神法を唱えた状態で互いに威嚇と牽制を仕掛けては止め仕掛けては止めを繰り返しながら常軌を逸した双子の戦いを観ていた。

双方共に術法の最高位の術師がその生涯をかけて体得する境地の技法を時間と呼ばれる概念を一切無視して連続使用しているのである。それがどれほど危険でまた得難い才能の両翼であるのか、でなければ認められざる災厄の権化であるのか少なくともアサヒにはレイは後者にフロルドは前者として映り、ゲンブシンには双方とも後者として映った。

双方の眼マナコに映ったそれぞれの在り方の委細の結果、動いたのはゲンブシンだった、ゲンブシンはフロルド達を囲む神兵達を兵器として精神を操り、二人に特攻させたのだ。

その意図に気づいたアサヒもまた動く、突貫して行く兵達に上位神法の雨を降らせる、降りかかる神法により神兵たちの8割が絶命する事と為った。

しかし、その行為により生じた隙を見逃す程ゲンブシンとレイは甘くなかった、結果から言えばアサヒに向かった二つの魔法の内一つはフロルドによって防がれ、もう一つはアサヒの上半身を消し飛ばした、防がれたのはレイの放った雷属性禁術、SSSSクラスの神のシャッジメントトオブコッド裁きの神法、対して打ち消したのはフロルドの放った水水と風の混成属性禁術のSSSSクラス魔法、氷河期グラシアルエイジ、それに対してアサヒの体を消し飛ばしたのはゲンブシンの放った闇属性のBクラスの神法、深淵クラレイド刃、威力も範囲もその他全てにおいて余りにも平凡な術がアサヒの命を奪った。

混成属性・・・

ふたつ以上の属性を組み合わせる事で初めて発現する派生属性、代表的なものでは風と水の氷、土と火の溶岩、光と各属性の聖、闇と各属性の邪等がある。

混成属性は性質上例え逆属性であっても属性として発現ができる（水と火による蒸気、雷と土による磁化等）が、光と闇のみ混成化出来ない。

また同属性同士での混成も可能であるが効果によっては単純に単属性の上位魔法として扱われる為、同属性の混成は殆んど行われない。

それまでの死闘がどんな意味を持つのか全く解っていないかった幼きシャラだが実母の半身が消し飛ぶと言う今の事態になって初めて周囲の状況に関心を示す。

半身と成った母にイツキを抱えたまま覚束無おぼつかないい足取りで歩んでいく。そのまま母親だった下半身のみの肉の塊に服が汚れるのも気付かず、すがり付きその肉塊の名前を呼ぶ、

「母様（かあ様）、母様。」

そのままシャラはゲンブシンがシャラからこの時の記憶を消すまで叫び続けた。

そしてまた、フロルドとレイは互いの放った膨大な力の余波で弾き飛ばされその場から強制撤退してしまい行方不明となっていた。

（ 天宮・トルカナ湖（過去） 近傍 ）

アルフの背に揺られる二人と天宮の三人はフロルドの元に向かいながらアルフにより二人の業が語られていた。

「先に言っておくが質問はすべての事柄を話終えてからにしてもらう、時間が無いのでな、大人しく聞くのだぞ。

・・・乙女たち二人は本来ならば双子として生を受ける筈の存在だった。

しかし乙女たちは近しい家に他人の子供として生まれる事と為った、その結果二人の守護者たる我は二つで一つである乙女らの魔力を見つける事が叶わぬままと為った。

そんな折りに出会ったのがフロルドだ。

奴は身寄りを亡くした直後だと言うのに我の目的たる乙女らの捜索に手を貸してくれたのだ。

まあ、それ以外にも奴とは色々に関わりが有るがな。

今は良い。

そうして乙女らの捜索を行う中、我らは、死の危機に瀕したリンデイスを見つけ保護したのだ。

その際、我は奴とは別々に詮索を行っていた故、あの場には居らなんだがな。

そうは言った所で奴はそんな物関係なくともリンデイスを助けたで有ろうし、仮にあの場に居たのが赤の他人であろうと助けたであろうな。

話を戻そう、リンデイスの保護後、ソラティカの存在は直ぐに確認できたのだが乙女らの今生の関係が関係だけに今まで黙っていたのだ。

その上で別段用が無ければ普段、我はソラティカの護衛に付き、リンデイスに護衛が必要でかつフロルドが動けぬ時はリンデイスの護衛に付いていた。

最近はお互いの護衛にも付いてはいなかったがな。」アルフリル

そう言つて僅かに口元に笑みを浮かべる一匹アルフの魔狼。
しかしその笑みは誰にも気付かれる事は無かつた。

「では此処からが本題であるが、我は、古いにしへの頃、ある双子に仕えていた守護獣だ、その双子と言うのがつまり、乙女ら二人の前世であり、乙女らの背負うべき業でもある。

「……業を背負いし本来の乙女らの真マナの名は、ソラティカが豊穰イシスと栄達を司りし者、リンデイスが転生ネフティスと誕生を司りし者、であり、その見た目から別名、イシスは金の女神とネフティスは銀の女神と呼ばれていた……古の双子の女神の神名だ。

汝らが互いに深く意識せずとも、通じ合えたのはそれ故だ。

フロルドは重過ぎるこの事実を可能なら伏せ続けるつもりだった様だが運命と言う現実は今この乙女らの関係からその甘い考えは決して許さないと判断したらしいな。

「……どうやら話は此処までの様だ、乙女らの運命を握る者の元に着いたぞ！」

まだ、この話には続きがある、質問もあるだろうが、全てはこちらの件が片付いてからだ！「アルフ

第11章 時を刻む者・今は昔、昔は今？（後書き）

前書きの通り言い訳をば一つ！

会社の旅行、突然の出張、親戚の 報、e t c . e t c . かぶりま
くりました。

今年厄年ですが、見事に享受しております、今日この頃です。

おまけに今週あたりから更に忙しくなるので更に更新ペース遅くな
りそうです。

では作品について少し、フロルド君の過去の戦闘シーンです、この
頃から完全に化け物街道まっしぐら、チート過ぎですね。

<注：心の声>書いてて楽しいから良いけども。

また、リン、ソラ、コンビの関係の一端が明らかになっています。

因みにイシスは本来、良き妻、良き母、すなわち女性の典型とみな
され、また豊饒トヨケルの女神だそうです。

ネフティスは死者を再生へと導く死者の守護神だそうです

二柱共にエジプトの神で姉妹になります。

てな感じで今回の後書きはこれで、次回も更新遅そうですがまたお
会いしましょう。

第11章 く時を刻む者・今は昔、昔は今？く（前書き）

本当に久々の投稿です。

何時もの如く言い訳は後書きで。

第11章 く時を刻む者・今は昔、昔は今??

バンは密偵の首を狩った場所から徒歩で1時間程歩いた所に在る酒場にブラッディー・クリムゾンを従えて訪れていた。

そこは、良く権力者が密談を行う酒場で店側も商売柄良く言えば口の固い、悪く言えば裏取引による秘匿を行う、表向きは合法の裏では非合法の酒場だった。

故に裏の使用方を行う時に置いては入り口で先ず特定の酒を決められた順番に注文して案内を受けてから店を出る時に通常の3〜10倍の代金を払う事が通例と成っていた。

そこに入り既に10分、バンが有る質問をしてから返答の無いまま過ぎていた。

それはフロルドとブラッディー・クリムゾンの関係である。

それはどう考えても二人の関係が通常の敵対行為とは掛け離れた非常に残忍で獷猛でいて何故かやたらと蛋白に感じる空虚さを拭い切れなかったからだ。

普通此処までひどい敵意を持つ場合はもつと泥々とした殺意や嫉妬と言った負の感情を感じ取れる、しかし、ブラッディー・クリムゾンからは敵意や殺意は感じてもしういった負の感情が感じられないのである。

はつきり言つてこれは異常と言える。

だからこそ交渉の前にどうしても確認しておか無ければならなかったのである、しかし返ってきたのは沈黙、答える気は無いのだろう、そうは判断したもののそれでもバンは次の質問には行か無かった、その結果が吉と出るのか凶と出るのかはあえて思考からは除外して制限時間を今から十分として様子を見ることにしたのだ。

それから更に時間が経ち、間もなく刻限と言うギリギリの時間でブラッディー・クリムゾンは口を開いた。

「俺と奴は同じ力を持ち、共に喰らい合う関係だ。そこに感情などある物か・・・只、何方かが喰い何方かが喰われるそれだけだ。」

それだけ言つとまたも沈黙に徹する。

しかし、今度はバンが戦慄と共に押し黙った事で更に重い沈黙が周囲を覆う。

店員は、二人の沈黙に今までの政治家達のネチネチとした陰湿な駆け引きとは違う気配に二人が客である事を完全に無視してその部屋に近付く事すらしようとはしなくなっていた。

重い沈黙の中、バンはこの交渉を続ける事に疑問を持ち初めながらも席を立つ事を選べなかつた。

その様子をどう解釈したのかは分からなかつたがブラッディ・クリムゾンは沈黙を破って口を開く。

「奴との関係を知つてどうする？」

「何か国のために為るような事でも有つたか？」

何処か挑発している様にも取れる質問の仕方でも問いつけてきたその質問にバンは言葉を窮する事になったが答ええないと言つて選択肢を取ることが直感的に危険だと悟つた。

故に更なる深みにハマっている事にも気付いていた。

トルカナ湖湖底

フロルドとレイの死闘とアサヒ、サクヤの死の真相を目にした若い兵たちは、その凄惨な光景に完全に沈黙し、実母と叔母の死と二人

の従兄弟と祖父の関係を目にしたイツキとシャラはシャラはイツキに組しかれたまま、驚愕を顔に貼り付け沈黙し、イツキは何処か冷めた眼差しでフロルドを見詰めていた。

そんな中ゲンブシンはアサヒの死を確認した瞬間に再びフロルドに刃を向けていた。

フロルドはイツキの動向を気にしながらゲンブシンの放つ刃を受け流し続けていた。

暫くして徐ろにイツキが動いた、その行動によって起こった結果は実に単純でシャラの衣服が破れると言う結果、この瞬間イツキは完全にフロルドに敵対し、ゲンブシンの傘下となった。

その結果、起こったのはシャラの三度の絶望みたびと同時に白い毛並みに覆われた大きな足に蹴り飛ばされるイツキと言う不思議な構図。

更に地に伏したシャラの隣に舞い落ちてきたのは裾の大きく広がった白いドレスと少し後ろに降りた濃紺のパンツスーツ姿の二人の少女、現実離れた不思議な光景に沈黙が落ちるが、そんな中でもフロルドとゲンブシンは変わらず争っている。

何ともシュールだが、イツキがこの場にもどった事で状況に一気に緊張が走る。

「もう宜しいですね？」

「帰りましたよ、お兄様。」リン

それ故に緊張感の無い声音で切り出されたその言葉に後ろでソラに出された手を取っていたシャラを始めゲンブシンでさえ動きを止めた。

そんな中、それが一瞬の注意を見逃すことなく戦線を離脱したフロルドとアルフはそれぞれフロルドはリンとシャラを両手で抱き上げ、アルフはソラを背にのせて撤退を開始する。

直ぐ様追撃を開始したゲンブシン達だがタイムゲートの再びの発現により現在に強制転送された事によりフロルド達を見失う事と成り

追撃は失敗する事となった。

一方、フロルド達はそのまま一旦完全に姿を消す事となる。

第11章 〽時を刻む者・今は昔、昔は今？〽（後書き）

長い沈黙申しわけ無いっす！
とにかく忙しかったんです。

働基 法完全に無視した忙しさだったんです。

死ぬかと思いましたがよ、ええ、そうですよ。

休出、残業当たり前、徹夜？そんなもの当然ですけど何か。

延々愚痴りそうなのでそろそろ本文について。

トルカナ湖編終了です。

前回更新からかなり空いた割にトルカナ湖編の終了までは余り文章
なかったんですハイ。

コメントとしてはシヤラ良かったね〽これ以上嫌な目に会わずに…。
位しか言っただけであげられ無いただって自分で書いたんだもの。

ピークは過ぎた物のまだしばらく忙しい（地震の影響がボディーブ
ローで（泣））のでまた遅く為るかもですが永い目で見てください！
では。

第12章 紅の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？

フロルドとゲンブシンのトルカナ湖での戦いから既に3ヶ月の月日が流れていた。

その間に世界情勢は想像以上の変革を見せていた。

まず目に付くのは、イカロスの急速な発展だ。

理由はエルフ族を始めドワーフ族、ウルフヘジン族と言った亜人族は自然信仰の精神が強く、その概念から良く言えば、歴史・伝統を重んじる、悪く言えば変化を嫌う古臭い風習が根強かった為、科学（化学）技術と言う物を軽視する傾向が強かった、それ故に人種の技術と言う物を余り受け入れて来なかった。

しかし、先の蒼のカルタロツサ入りとその後の発展に強く興味を引かれた部族は多く、また、幼少期より亜人との親交の強いフロルドに教育された蒼のクルーは亜人にも受け入れやすい、自然との共生と発展の両方を主観に置いた中立的な技術体系を模索し開発させていた事から受け入れられるのにさほどの時間は必要なかった。その結果が出た形だ。

続いては神社、神殿と言った神族の関係だ。

巫女姫であるシャラが社を出た事（一般には誘拐された）で各神殿の関係者はフロルドとその協力者に対しての警戒をさらに強めたのである。

当初はシャラの逃亡を隠蔽する事も考えられたが、誘拐に内容を摩り替え事実を公表する事で忌み狩りの必要性を信者に浸透させかつ、巫女の奪還を信者に強く刷り込ませる為、ゲンブシン等はこの事実を公表したのだった。

しかしその思惑は想像以上の効果を見せ、他国、他宗派の神信者のフロルドへの不信感を助長した。

『次は我等の当主ではないか？』

と・・・。

その後の各関係部署の対応は早かった。

神の反逆者としての汚名を被る事と為ったフロルドは各方面に指名手配書が飛びかい、ついでとばかりに帝国からの皇女誘拐の報を捏造された為に英雄としての名は地に落ち、邪術師としての悪名が轟いていた。

しかしそれでもイカロスではフロルド擁護の声が根強い。

表立って擁護するには事態が大きくなり過ぎている事もあり戦争に発展しかけないからと抑えられているがそれでも養護を表明する者は跡を絶たない。

要因はやはり蒼の存在である。

また非公式ではあるが誘拐されたとされている皇女の保護事実がナルによって上層部が上がっていた事、更には、種族柄風評で物事を判断しない者が多い事もある。

次に帝国である。

帝国内は現在、共和国との戦争により戦線を大幅に下げ領土を占領されている状態にある。

カイ、フロルドのいない帝国はその抑止力を大幅に低下させているその影響が想像以上に深刻だったのだ。

カイは戦前から虹に属する有力な帝国魔導師として各国、各都市を積極的に回っていた、この行為は主観的に見れば共和国将軍としての謀報活動だが、客観的に見れば国内屈指の魔導師の視察である。

口こそ悪い四皇であったがそれでも人前に滅多に姿を見せない他の四皇よりは余程親しみやすい事もあり、支持率は四皇内ではダント

ツに高かった、その裏切りは帝国軍の士気を大きく下げた。

また、フロルドの罪状の決定により親フロルド派の権力は地に落ち、その筆頭だったマリアーナと、シンクレアの変の折り、フロルドを擁護していたガイアへの不信感の拡大もあり発言力の低下に伴って派閥トップ2の指揮能力は低下し、実質の最高権力者となったレックスはその行動から未だに女性クルーからの支持の低迷が続くと言ふ戦時の軍としては最悪の状態にあった。

その上、皇帝の開戦の判断に対して現状の戦況から市民の疑心が強くなり、こちらに対しても支持率の低迷と言ふ悪循環に陥っていた。そして何より帝国に打撃を与えたのは元フロルドの直轄部隊の戦線の離脱であった。

この部隊は実質の派閥の最前線部隊で練度も高くまた、シンクレアの件でも判る様に指揮官で有ったフロルドへの信頼が強く帝国のフロルドに対しての扱いに疑心が強く残っていた。

シンクレア事件の一部始終を遠巻きながら視ていた事も有り帝国の発表に偽りが有る事を知っているからだ。

またこの事態に対して皇族の自業自得と考える者も直轄部隊には多かった特に自身の上官は拘束直前、事態を予測していたかの様な命令を送っていた事もあり、彼らは最優先事項として彼ら自身の身の安全を優先した判断を多くの者が選択していた。

その結果、共和国に侵略を受けながらも国内が大きく分裂状態に突入し、半内乱状態に陥っていた。

最後にクロス共和国の状態だ。

共和国内は現在、十字議会を中心に国内が優位な戦況に後押しを受け、議員への支持率が非常に高くなっている。

元々帝国からの宣戦布告を請けての開戦だった事も有り仮に劣勢だったとしても国民の多くは現政権を支持していた事は予想されるがそれでも、それでもだ、議員達を中心として国民の多くが

第12章 紅の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？（後書き）

12章突入です。

この章から、前章までとは時間が多少過ぎた所からスタートです。その為、暫し状況説明が続きます退屈でしょうが御容赦を。

今後ですが、放置気味だった最後の一人も暗躍を開始する予定ですが、はてさて、最後の一人は敵か味方が乞うご期待です。

第12章 紅の台頭・見える繁栄、見えざる衰退? (前書き)

注：犯罪者の視点です！

第12章 紅の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？

そんな中でかつてのフロルドやエリシアといった面々の母校であるシンクレアでは、かつての生徒や講師の起こした不祥事に対する説明責任を問われ、校長以下、学園理事と言った面々の大幅な入れ替えが行われる中、在校生の転校や、新規の入学希望者の激減などの変化が顕著になり始めていた。

特にかつての魔法科の生徒はフロルドと同じ空間で授業を受けていた事から周囲の目もあり転向していく人間が非常に多い。

正確に言えば残留を決意した者を置いてこの日を境としてすべての生徒がこの学園から去る事になっている。

事件前、30534名を数えた生徒は現状学園に残る事を決めているのはそのうちの約100分の1である302名だけであるその数は単純に情報処理科が他の学園には存在しない為に転校のしようが無い為に他為らない。

つまり事実上学園に在籍した総ての生徒がこの学園を捨てたと言っている、フロルドの存在はそれだけ異端扱いされた訳である。

それはかつてのフロルドのクラスメイトにも言える事で、本人達の意味は解らないが、兎も角彼らの血縁者から強制的に転校命令が下った形だ。

かつて、その態度から周囲にフロルドの親友とさえ認識されていた男もその例外では無くすべての手続きの終わったこの日を持って転校と言う運びとなっていた。

件の男の表情は暗かった疲れしている様に見えると言っても良いだろう。

理由はハッキリしている、事件後周囲の彼に対する態度は一変していたのだから。

言うまでもなく悪い方向で、である。

フロルドの親友であると言う認識は詰まる所フロルドの共犯者であると言う認識が自然と沸き起こる、その考えは当時の二人の関係を知らない多くの学友達にとっては消し去り様は無く広がっていた、ちよつどテレビでA氏がB氏を殺しましたA氏は危険な人です、その友人C氏はA氏の共犯の可能性がありません気を付けましょう。そう報道されてC氏が危険人物なのか知りもしないのに周囲が危険人物扱いするのと同じ様な事が起きているのである。

それでも少年は学園内では非常に優秀であり、同時に学生の身分で既に紅の派閥に入閥が決まっていた事もあり他校からの引手は数多かった。

しかし、そんな表面上の憔悴は兎も角として、ハースは今の自分の立場を余り……と言うよりははつきり言つて全くと言つていい程無關心だった、憔悴して見えるのは単にその方が同情の念を向けられて都合が良いからに他為らない。

それ位の行動はハースにとっては当たり前の事で今更、意識せずとも自然に演技として実行できた、はつきり言つてハースは元からフロルドの事を友人などとは思つていなかった。

ただ自分の評価を上げる為の駒でしかない、本性を隠すため事実落ちこぼれに対しても誠実に対する人格者として認知されていたのだから救いようがない。

しかし、ハース・零・タクティス・ランフォードにはその様な評価など初めから無意味だ、殲滅者・紅のレイ零その人にとってはまともな評価など初めから意味がない只殺し尽くす為にその本性の全てを隠す。

それが世界で唯一、特一級危険指定犯罪者として認知された者の存在原理であつた。

犯罪者の指定等級・・・
スリヤひったくり等から始まり、はては国際テロ等を起こす者など
様々だが、逐次等級が存在している。
等級は以下の通りである。

D・・・児童犯罪（殺人、放火等は除く）
C・・・ひったくり、スリ等
B・・・暴力事件、脱税、過失による殺人（事故）等
A・・・故意による殺人、誘拐等
S・・・放火、大量殺人、強姦（本人の意思としない性犯
罪はこの世界では重罪になる）等

SS・・・国際犯罪（個人によるテロ活動等）

SSS・・・戦争犯罪

SSSS・・・国際犯罪（組織的なテロ、この指定は組織に対
してのみ）

SSSSS・・・個人による組織的なテロと同等の危険を齎らす犯
罪者又はその危険が有る者

世間一般ではもちろん各国の要人の中でもレイの素顔を知る者は殆
ど存在しない、それどころか特一級危険指定犯罪者などと言う存在
が存在すると言う事実を知っていたのは、実にフロルドの直属の部
下とガイアにマリアーナ以上ぐらいの物で、各国のトップですらその存
在は把握していなかった。

理由は単純でレイと呼ばれる人間がフロルドによってその存在を揉
み消されていたからに他ならない。

フロルドの双子の兄でありもう一人の臨界者であるレイはトルカナ
湖で虐殺が行われた当時からフロルドとは逆方向で力を付けている。
それは詰まり、レイは単独で国と互角に渡り合えると言う事であり、

仮に世間に個で群を蹂躪できる存在が誰にも悟られずに自身の隣を歩いているかも知れない、そんな危険を感じたらとてもではないが平穏な生活など送る事はまずもって出来る筈が無い。

フロルドが自身の力を隠していたのはその為だ、レイの事を公には出来なかつたのもそれが理由だ、しかし、それでも例外という物は有る物でそれがガイアとマリアーナである。

ガイアはレイの存在が派閥内で噂され始めたところにフロルドより機密文書としてその存在を示唆され、同時に存在の隠蔽の理由を聞かされており、その対応を承認したからである。

当然いくつかは、捏造の報告も含まれていたがおおむねフロルドはガイアにはレイが臨界者である事を含め詳細な報告をしていたりする。

因みに、フロルドがガイアの素顔を見たのはシンクレアの時が初めてでそれ以前にフロルドがガイアに接触する時はマリアーナ経由での報告になっていた事（マリアーナにはこの時に報告した）は、当人達のみ知る事実である。

そんなレイとフロルドが半身の存在に気付いていない訳も無く、二人は学園では互いに牽制し合っていた事で、学園での虐殺は起きていなかった訳である。

第12章 紅の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？（後書き）

久々の投稿です、しかも短い（泣）。

いや〜いろいろ有りました。

会社で火事とか夏バテとか熱中症とかその他諸々………。
なんて只の言い訳か……。

そんなことより本文について、前書きの通り、犯罪者視点で暫く続きます。

危ない人です、ついでにこの人、も一個裏設定があったり、判明するのはもちよつと先です……のはず……多分……。

情勢不安に陥った世界でそれぞれの主人公は世界はどう感じどう動くのか全くの未定です、参考意見等ありましたら気軽にお願いします。

ではまた！

第12章 く紅の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？く

くカルタロツサく

そこから広がる街の活気はとて三か月前まで森の中に広がる多少大きな町と言う印象を感じさせていた田舎町の現在の姿だとは思えない物だった。

中でも今まであまり見られなかった人間族の姿が目立つのが印象に残ると言える、逆に言えば他の街では滅多に見られない亜人と言う種族の混在した現在の状況はかなりと言うよりも現在のカルタロツサ以外では見られない特異な光景とも言えるかも知れない。

そんな街の一角に聳える非常に大きな建物『櫻緑の月』と名づけられた宿には現在本当に多くの宿泊客が集まっていた。

集まる人ごみの大半は家族連れだった。

正確に言えば親戚ごと連れだって訪れた者が大半だった。

常識で言えばその様な事は結婚式でもない限り殆ど有り得ないだろう、しかし、現実になんか起こっていた。

そこを訪れていたのは、嘗てのフロルドの部下たちだった、彼ら、彼女らは嘗ての上官の身内の非常識さを身に滲みて知っていた、その為カルタロツサで起こった急激な発展に彼の身内の影を見てとったのである、事実、街に偵察に来た彼らの一部はフィルやガゼルの姿を確認すると急ぎ国に帰り仲間と一族を連れ避難してきたのである。

ただし、彼らは只カルタロツサを指摘したのではなく各地を転々として帝国の尾行を巻いて来ていた。

そんな彼らも実はフィルの指示で付けられた密偵の存在には気付か無かったのは蒼のメンバーのみ知る事実である。

そして彼らは現在そのフィル、ガゼル、ナタル、エリシア、リリーの5人と第五会議室と名付けられた10人程度の少数での会議に使

う小会議室で個別に対談していた。

（第五会議室）

「思った以上に人が集まったね。」

暫しの休憩中にそう感想を述べたナタルにガゼルが答える。

「兄貴の元直属の部下13人の内13人全員が一族連れて来たからな。」

正直工房の完成と同時に別館の制作に（建築士の）半数の当てたのは正解だったと今では思うぜ。

当初は多過ぎね〜かと思っただけどな。」

「そんな事、ちょっと考えれば判る！

相変わらずの脳筋ご苦労様！

消えるこの役たたず！」ファイル

ガゼルに向ける冷やかな視線に続く暴言に苦笑しながらエリシアが続ける。

「しかし寝床と言う物が戦において重要なのも確かです。

それと同時に各要所に建築中の砦の確保も・・・。

そちらの方はどうのですか？

私にはそのあたりは完全に専門外なのでどうしようも無いのです
が。」

「そっちは、大丈夫かな。」

今の所必要な砦は8割方完成したよ。

勿論、存在がバレない様に帝国にも、共和国にもない精霊術精霊召喚魔法の幻覚で隠してあるから当面は凌げるはずだし。」

そう質問にフィルが答えた。

精霊術・・・

亜人族のみ使える魔法、正確には自然との共生をして行く内に人種にも使用できる様に成るが体得までに才能にもよるが10年単位の期間が掛かる。

亜人族は種族柄生まれ付き使える者が多い、筆頭のエルフ族は、ほぼ全員が使い、稀に生まれ付きで修練を積まなくても神霊術と呼ばれる上位魔法の使い手が生まれる事がある（修練を積みめばほぼ全員このクラスになれる）。

その回答にエリシアは首肯うなずき返しながら、今だカルタロツサに姿を見せないフロルド達に意識を向けた。

定期的にリンデイスからの定期連絡は届いているが実質問題として此方からフロルド達に連絡が取れない上に、天宮の機能を使っても居場所を特定出来ない程に徹底した潜伏状態にフロルド達は移っていた。

それでも、蒼の誰一人としてフロルド達の事を心配しないあたり彼らおにとつてはこの程度の事は別段珍しい事では無いのだろうと推測できる為、会えない事を除けばエリシアには不満は無かった。

そんな事を考えている内に休憩時間が終わったのか会議室の扉がノックされた。

ノックに答え入室を許可すると蒼に所属する10歳の少年カインが手に何かを持って入室してきた、そのまま、カインはガゼルにその

何かを手渡しながら口を開く。

「今、宿の前にコレを持ってきた大男が居座ってる、正直物が物だから（蒼の）全員どう対処していいか判んなくて仕事が停滞してて、取り敢えずガゼとフィーに相談してきたんだけど・・・。」

識乃シノネ姉から多分その大男は、ケイオス・クーカイだろうって、その事は確実に伝える様になって言われた。

ガゼ、フィー、誰だかわかる？

うっんいいや、その顔で判ったから、じゃあ伝えたからボク、仕事に戻る。

じゃね。」

ガゼ、フィー・・・

ガゼルとフィルの事。

蒼のメンバーの半数は二人の事をこの愛称で呼ぶ。

識乃・・・

蒼の二期生に当たる古参メンバー。

フルネームは遠坂トオサカ・識乃シノ。

三期生までのメンバーは既に殆んど蒼の翼からは独り立ちしており、実質の院長と副院長に当たるフロルド、リンデイス（二人は孤児院の設立者に当たる為生徒ではない）以外では最も永く二人と共にいるメンバーであり、リンデイスとは親友同士の間柄である。

性格は寡黙で冷静、表情の変化に乏しい所があるがなれるとその僅かな表情の機微が判るようになる。

おっとりとした性格でありながら一方で激情家の一面のあるリンデイスのフォロー（事態が収集できるギリギリまで黙認することが多いが）を良くこなしていて家事と情報管理を得意としているM・R、

SSSS、S・R、D、R・A、Sランク相当（魔導師試験を受けていない為未認定）の女性である。

因みに、運動音痴では無く、此処まで能力が偏っている人間はかなり珍しい。

蒼のメンバーからの評価は我が家の裏ボスである。

そんなメンバー（二人にとっては姉）からの進言に表情を固くしながらも口を開いたのはリリーだった。

「憂慮すべき事態ではあるけれど、このまま此処で只ジットしている訳にもいかないわ。」

危険かも知れないけれど此処は鬼人・ケイオスに会ってみるべきだと思うのだけど、勿論、もしもの時に備えて今いる戦力で行える最大限の警戒は取るべきだと思うのだけれど、ね。

「どうかしら？」

提案に賛同したのは、ナタル、フィル、ガゼルの三人、対して反対したのは以外にもエリシアだった。

「会うことには同意しますが、必要以上に警戒して顔を合わせるの
は不味いと思います。」

天宮で偶然目にしたのですが、傭兵、ケイオス様は気に入った相
手の仕事しか請けないそうです。

此処で必要以上に警戒して見せる事は余り良策とは呼べないと思
います。」

そう提案したエリシアに黙考を返す四人その様子を伺いながらも更
にエリシアは提案を行う。

「ですが、余りにも無警戒ともいきませんので此処はあえて会談には私一人で望みたいのです！」

勿論、私の事情（一帝国の第4皇女《エリシエル・A・S・マークライト》である事）は隠して、・・・となりますが、この方法ならば、もしもの時の被害も私一人で済みますし、何よりこれは単なる直感なのですが、ここで私が直接ケイオス様に一人でお会いすることに意味が有る様に感じるので。

歴戦の勇士たる皆様方に対するには多大な不満を懐かせてしまう物言いなのは判っておりますが・・・。」

追加でもたらされたエリシアの提案に賛同を示したのはナタルとフィルだった。

対してリリーとガゼルは口にこそしなかったが渋い顔を隠さずにかし沈黙を返すに留めた。

それを見たフィルがリリー、エリシアの提案から第三の案を提案した。

「リリーさんの懸念もエルお姉ちゃんの考えも判るからこうしよう？ 会談にはエルおねえちゃん一人で行くけど、代わりにエルおねえちゃんには強力な魔道具を隠し持っていてもらう。

持つらうって言っても攻撃力は皆無だけど守備力だけなら禁術でさえ物ともしない防衛特化魔法、”聖なる神秘”^{ケンジユン}を封じてある堅盾の指輪、これを会談中は常に身に付けてもらう。

これなら発動すれば目立つし身の安全も確保できるから。

どう、かなリリーさん？」

その提案をガゼルに対しては返答は求めず、リリーだけに向けられていたが、特にガゼルは気にせずというより諦めている為口を噤みリリーはこの提案は十分許容できる提案であるため了承の意味を込

めて頷き返した。

第12章 く紅の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？（後書き）

12章？話の投稿です。

気が付けばこの小説を『小説家になろう』に投稿し始めて1年の月日が流れました。

正直忙しいのによく投稿を止めなかったと思っっています。

そして何より嬉しかったのは約1年と長期にわたり評価の投稿がなかったこの作品に先日始めて評価を貰えた事です。

PVも約4000と人気作家さんの様には参りませんが徐々にでも伸びてきているのも確か嬉しく思います。

拙い私の作品にこうして触れて下さる方々に心からの感謝を評します。

ありがとうございます。

さて恒例になりつつ有る作品についてですが、久々に『鬼』の人が出てきましたね。

更には新しい重要人物もまだ名前だけですが登場し段々と本格的に戦時モードに以降中です。

このまま戦争突入するのか零戦に入るのかは今後に期待してください。

では二周年目のサファイアを今後ともよろしくお願い致します。

See you again!

第12章 く赤の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？（前書き）

久々更新です。

短いのはご愛敬・・・。

ゴメンナサイ嘘です！遅筆でほんとゴメンナサイです！ハイ！

第12章 赤の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？

トルカナ神社

そこに複数人の人間が集まっていた、その者たちは全員白地に一字一字異なる配色の文字で祝詞のりとの書かれた狩衣かりぎぬ、差袴さしこ、烏帽子えぼしと言う出で立ちいでたちで見た目からしてかなり特殊な事態で有る事が見て取れる程度には非現実的な光景だった。

特に年間かなりの数の参拝者が訪れるこの神社でも通常の宮司の纏う狩衣等は青系統の無地の出で立ちで、実際その服装で働いている者もちゃんと見受けられる。

この様な特殊すぎる装いよそおいを見た事のある人間が一体どれ程の数に上るのか特に意識しなくてもほぼ0だと想像できてしまう程に特殊な装いであった。

その数は時間の経過と共に増えていく。

正常な精神状態まともでこの様な服装は凡人ではとても出来ないと言っただけ言っただけおこつ・・・、それ程に特徴的な人々の集団が其処には存在し、かつある種の一体感と共に強烈な意思決意と言う気配を放っていた。

そこにある一体感の正体は忌人の討伐と巫女姫の奪還の二つ。

此処に居る大半の者達は巫女の奪還の後の巫女の処遇を知らない。

詰まりシヤラがその後只の巫女を産む為だけの生きた人形にされる事を知るのはこの場では巫女姫奪還を謳い信者にその為の有志を募った神族の幹部だけであった。

神社・内宮の一室

「まったく、忌人どもにはいい加減にして欲しい物もんやな。

どれ程狩つても次から次へと出てきよる、前刈り取ったのはたっ

た10年前や無いが、終いには巫女姫まで拐しまわれてしもて。

こないな事なら15に成った日にお勤めや言ゆうて無理矢理にでも孕ませるんやった。

ゲンブシン翁、巫女姫奪還時に一番乗り果たした若い衆には、穢れの無い事確認できたならそのまま夫婦にして孕ませます。

悪いけど否定させんで！」

玄應ゲンオウと呼ばれる幹部の一人のこの発言はその場にいた幹部全員の意思でもあった。

しかしゲンブシンはその言葉を否定する、悪い方向で。

「何を甘い事を言ゆうておる。

穢れの確認は必要じゃがの、今のあの者には夫を貰う資格などないわ！」

見せしめも兼ねて「穢れ落とし」を行う、狂うまで男共おとこどもの褌ふんどしを与えん事には例え肉体が穢れずとも精神しんろが穢れておるわ！」

此度こたひの忌人は嘗かつての忌人の様に軽い穢れでは無い！」

個でありながら群れ以上に穢れた非人ひにんじゃと解とっておるうに！」

この発言に幹部たちはゲンブシンの中に眠る狂気を感じ取る事と成るがその狂気を異常と思わない程度にはこのメンバーも狂気に染まった狂人達であった。

勿論、境内に集まった狂信者達もまた同じ事が言える、ゲンブシン達の命令に一切の疑問を感じず穢れ落としを実行できる程度には狂っているのだから。

穢れ落とし・・・

主に邪魂に触れた女性に対して行うトルカナ教・泷夜源神派の宗教

儀式、身を清めた男衆による女性への奉仕行為。

相手が狂うまでその行為が終わる事が無く、狂った後でもその場に
いる全員から奉仕を受けないと終わらないうえ、それでも狂わない
時は二順目、三順目と続く。

言うまでも無くこれは儀式の名を借りた制裁兼宗教闘争（戦争）の
敗戦国又は町や村もしくはは団体に居た穢れを受けた女性を確保した
事に対する男性信者への褒美である。

洗夜源神派・・・

コウヤゲンシン派と読むトルカナ教系神社の宗派の一種、夜に輝く
星や月を源神として崇めた宗派の事。

そんなやり取りが行われている同じ時間、今回の出征に対し前線指
揮官の役を拝命した形のイツキはシヤラが連れ去られる原因となっ
た川岸に佇んでいた。

その手には愛用の槍が握られている、閉じられた瞳からは何も読み
取る事は出来ない、しかし、その眉間に刻まれたシワはその内心に
非常に明確な懸案すべき事態が存在する事を示していた。

あの朝の一戦以来イツキには時間が経つにつれて自分の力とフロル
ドの力に覆し様の無い絶対的な差が存在する事を思い知らされてい
た。

あの時フロルドは、ゲンブシンの猛攻からシヤラとイツキの二人を
守りながらもイツキが仕掛けた奇襲に当然の様に対応し、並列思考
では、魔法の行使と ゲンブシンへの叱責を行っていた。

もしかするとそれ以外にもまだ何かしていたかも知れない。

時間の経過と共に沸き上がる底の知れない得体の知れなさ、その様
な化け物とこれから勝つ糸口すら湧かないまま戦おうとしている自
分達。

その不安から気付けばこの場に來ていたのだった。

あの夜、3人掛りとはいえ召喚獣を倒したこの付近は今ではかつての静寂を取り戻しているが、あの時に戦ったダチヨウもどきの力は今でも鮮明に思い出す事が出来る、その戦闘力は凄まじかった、よく生きて帰れた物だと。

それと同時にもし仮にフロルドがダチヨウもどきと戦ったならどうなっていたかを想像する。

吹き飛ばしたフロルドはいくら自分から飛んで威力を軽減していたからと言っても軽すぎた。

多く見積もっても55Kgは無いだろう下手をすると40Kg台かも知れないそんな人間がアレとまともに戦えたとは思えないがそんな物は軽く無視して瞬殺した気がして為らない。

あの時視た過去の光景が事実ならば尚更だ、あの時の戦闘力より成長した今の方が弱いなどと言う事はまず無いだろう、あの時でさえ一撃一撃が木を岩を大地を粉碎したのだ、今なら山の一つや二つ簡単に消し飛ばす事が出来るかもしれない。

推測できる結果からフロルドならば動きもせずにダチヨウもどきを倒せただろう事に感付いたイツキは更なる戦慄を覚え、どれ程戦力をそろえても勝ち目の無い戦に成るであろう事に眩暈を覚えた。

しかし、同時に一つの確証もこの場での思考で気づいたのも事実だ、それはフロルドと言う人間の極端な甘さだ、あの時の光景と実際に戦った経験からフロルドはおそらくではある物の此方に致命傷と成りえる攻撃はして来ない、また、その場に庇うべき対象が居れば最優先で其方の救援、保護を行うだろう事。

そして、同時に自身の命を勘定に入れて行動していない、一種死人の様な行動をとる事。

これを利用すれば勝てる可能性があり同時にイツキが見つけた唯一の勝機であった。

第12章 赤の台頭・見える繁栄、見えざる衰退？（後書き）

皆さん、お久しぶりです。

約一か月半ぶりの更新になります。

早速の言い訳ですがまた一年で2度の地獄の時期が来ました。

真面目な人間が損をするとはよく言いますが真面目じゃなくても死ぬよコノ野郎！

会社なんて消えろ！

はあ、はあ、はあ。

うう、まだまだ愚痴が出そうですが作品についてです。

神族視点のシーンが書かれています、大きく視点が3つに分かれています。

一つは一般の神族、二つ目が俗に言う長老衆、最後がイツキ視点で間に世界観を少し織り交ぜていますがこんな所です。

では、一つ目の視点はまあ、本文を読んだまんまで。

二つ目はトチ狂った阿呆のお話、最後は冷静になったイツキがフロルドの非常識さを公開論評している感じになっています。

少々判りにくい内容かもしれませんが許してください、さて次話はメイン視点に戻るのかはたまたまだ脇固めなのか乞うご期待です。
ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6145n/>

サファイア

2011年11月11日08時19分発行